

人
一
般

橋本中國大使意見具申

11/28

注意

1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線2171、2174）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線3169）に連絡あり。

電信写

限定配布

極秘

大	政事	外務	官
大	務	典	房
次	次	次	次
臣	秘	官	官
審	審	審	審
長	長	長	長
北	經	環	査
大	大	ア	察
使	使	大	括
使	大	審	審
使	大	審	審
長	長	長	長
総	口	対	文
口	対	文	会
厚	情	研	究
察	人	電	在
電	在	儀	警
史	史	史	史
オ	オ	オ	オ
外	報	官	官
報	報	報	報
官	官	官	官
長	長	長	長
文	文	文	文
長	長	長	長
参	政	保	対
旅	旅	旅	旅
外	外	外	外
長	長	長	長
審	地	中	東
地	地	地	地
中	中	中	中
東	東	東	東
西	西	西	西
二	二	二	二
長	長	長	長
北	北	北	北
米	米	米	米
長	長	長	長
審	一	二	保
保	保	保	保
地	地	地	地
長	長	長	長
中	中	中	中
南	南	南	南
長	長	長	長
参	一	二	参
一	一	一	一
二	二	二	二
長	長	長	長
歐	歐	歐	歐
長	長	長	長
審	西	ソ	洋
西	西	西	西
東	東	東	東
二	二	二	二
長	長	長	長
参	一	二	ア
ア	ア	ア	ア
二	二	二	二
長	長	長	長
次	総	経	途
経	経	経	経
途	途	途	途
長	長	長	長
審	経	経	国
国	国	国	国
二	二	二	二
長	長	長	長
経	経	経	エ
エ	エ	エ	エ
国	国	国	国
安	安	安	安
ネ	ネ	ネ	ネ
二	二	二	二
長	長	長	長
審	海	審	準
海	海	海	海
準	準	準	準
長	長	長	長
審	政	国	開
開	開	開	開
無	無	無	無
長	長	長	長
参	調	技	有
有	有	有	有
理	理	理	理
長	長	長	長
審	条	協	規
協	協	協	協
規	規	規	規
長	長	長	長
国	審	政	経
経	経	経	経
社	社	社	社
長	長	長	長
科	科	原	原
原	原	原	原
審	審	審	審
情	参	情	析
調	調	調	調
長	長	長	長
企	企	安	安
安	安	安	安

総 番 号 R239602

月 28日

平成 3年 11月 28日

中 国 発

本 省 着

主 管

アジア局長

外 務 大 臣 殿

橋 本 大 使

てん皇御訪中（本使意見具申）

第4415号 極秘 至急（ゆう先処理）

（限定配布）

中国は明年の国交正常化20しゅう年に際し、官民あげててん皇御訪中を切望し、これが実現すれば名実ともに日中間の戦後は終わり友好協力の新時代が確固不動になると強い期待を表明越しているところ、本使の見次の通り申進する。

1. 戦前・戦後を通じ、日中間にはこう常的にやつかいな政治問題が存在したが、今後1年以内にわが国の国論を二分するような大事件の発生は予想し難く、友好訪問という本来の趣旨を考えると、明年はひとつの選択である。

2. 今後長期的に展望すれば、中国社会は必然的に民主化・自由化の方向をたどらざるを得ない。その際、ソ連・東欧のような大混乱の経緯を経験するか、あるいはまた長時間をかけた中国的変化を遂げるか、予測は困難であるが、いずれにせよ多少の混乱は不可避であろう。今後の1年ないし2年はその前やの小こう状態と言えよう。従つて、てん皇御訪中のタイミングとして明年を選ぶことはけん明な選択である。

3. 日米関係はわが国にとって最も重要な二国間関係であることは言うまでもないが、てん皇御訪中が対米関係に悪影響を及ぼすことはありえない。

人権問題をはじめとして、米中関係は今後ともまさつやあつれきが続くであろう。しかしながら、戦前・戦後を通じ米国のアジア・太平洋政策の基じゆくは常に中国政策であり、長期・基本的に米国も良好な対中関係を欲していることは明らかである。

他方、中国は表面では対米強こうのし勢をとりつづけてきたが、中国の独自性、自主性を認めて欲しいというだけのことで、米国の存在が中国の世界戦略にとって最重要であるとの認識は今後とも不変である。米側批

注意

1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線 2171、2174）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線 3169）に連絡ありたい。

極秘

電信写

判を口にする党・政府要人が例外なく最あいのむす子やむすめを米国に留学させていることだけを見ても、右は明らかである。

4. 明年前半、御訪米あるいは御訪欧を実現し、後半御訪中を実現させれば、西側の一員であると同時にアジアの一員であるという、わが国外交基本方針に、まさしく合致することとなろう。

5. 韓国については明年はなお時期しよう早であることは御高承の通りである。この問題は将来の課題として真げんに検討するということで内外の理解を得ることは可能であろう。

6. [REDACTED]

[REDACTED] このことは半世き以上にわたつて昭和てん皇の側近として御つかえた故イリエジ従長が生前何度も本使に語つたところである。一昨年、本使北京に赴任の直前はいえつした際、[REDACTED]

[REDACTED] 本使は今その時期がきたとぐ考する。（了）

(松井澤五五五下ーーへーいー)

天皇御訪中の当面の段取り（案）

平成3年12月19日

中 国 課

1. 宮内庁の了解取付け

大臣訪中の前に。

2. 中国への通報

（1）大臣訪中（1月）

○10～11月訪中を念頭に置いて中国側の受入れ可能性を打診するに止める。（中国側に食い逃げされないことが肝要。最終決定の前に「おことば」を含め、我が方の考え方を中国側に理解、受入れさせることが得策）

○会談における大臣の具体的発言ぶり

「本件については責任を持って努力する。仮定の問題として本年10月ないし11月の御訪中を念頭に置いた場合の貴方の御都合如何。なお、本件は、まだ先のことであり慎重に取扱う必要があるので、発言ぶりとしては『引き続き検討中』とのラインとしたい。」

（2）万里全人代委員長訪日（4月中旬予定）

このタイミングでの発表も検討。但し、出来れば5月下旬（予定）の江沢民総書記訪日の際に発表するとのラインで処理。

3. 対韓国

総理訪韓に先立ち、次官より説明。

4. 対米国

(1) 大臣訪中

予め米国の関心事項（天皇御訪中の件を除く）を照会し、米国に対し対米配慮を印象づける。大臣訪中前に対米通報は不要。

(2) ブッシュ大統領訪日

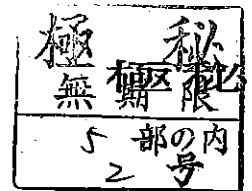
「20周年に天皇御訪中の可能性を検討している。」とのラインで伝達。その際、93年の御訪米（御訪欧）を検討中であることを併せ伝達（以上は何れも対外秘とすることを確認）。

(3) 御訪中の正式決定の段階で改めて通報。

（なお、サミットでは御訪中を念頭に対中問題につき対応）

5. 対台湾

発表のタイミングで、例えば日華議懇より通報。（台湾の人々にも向けられた天皇陛下のメッセージである旨説明？）



天皇御訪中の段取り（案）

平成3年12月19日

中 国 課

1. 宮内庁の了解取付け

大臣訪中の前に。

2. 中国への通報

(1) 大臣訪中（1月）

○10月10日訪中を仮定した場合の中国側の受入れ可能性の打診。

最終決定には暫く時間がかかることを指摘（中国側に食い逃げされない

ため、最終決定の前に「おことば」を含め、我が方の考え方を中国側に

理解、受入れさせることが得策）。

○なお、大臣訪中の際に、4月中旬の万里全人代委員長の訪日（国会賓客）、

6月下旬の江沢民総書記の訪日について合意し、発表するとのラインで

要調整。）

(2) 万里全人代委員長訪日（4月中旬）

このタイミングでの発表も検討。但し、出来れば6月下旬の江沢民総書記訪日の際に発表するとのラインで処理。

3. 対韓国

総理訪韓に先立ち、大使（次官、局長）より説明。

4. 対米国

(1) 大臣訪中

予め米国の関心事項（天皇御訪中の件を除く）を照会し、米国に対し対米配慮を印象づける。大臣訪中前に対米通報は不要。

(2) ブッシュ大統領訪日

「20周年に天皇御訪中の可能性を検討している。」とのラインで伝達。
その際、93年の御訪米（御訪欧）を検討中であることを併せ伝達（以上は何れも対外秘とすることを確認）。

(3) 御訪中の正式決定の段階で改めて通報。

~~(4) (サミットでは御訪中を念頭に対中問題につき対応)~~

~~(注ふ、)~~

5. ~~国内対策~~

~~(1) 国会~~

~~(イ) 竹下元総理、(伊東正義議員)、三塚会長、金丸会長、河本会長の
了解取付（大臣訪中前、可能なら大臣から直接お願いする）。~~

~~(ロ) 外務委員長その他の関係議員(総務会、政調)に説明(1～2月)。~~

~~(2) マスコミ~~

~~発表前の然るべき時点でブリーフ。~~

~~(3) オピニオン・リーダー~~

6. 対台湾

発表のタイミングで、例えば日華議懇より通報。（台湾の人々にも向けられた天皇陛下のメッセージである旨説明？）

21/8/21

✓ In die 1e en 4e Lila

(三八〇字)

○ 異律の答ふに

「責任を」

4 4 4 4 4

72, 2, 1, 1

[illegible]

1. 7. 0. 3

$\sqrt{1234}$ $\sqrt{5678}$
 $\sqrt{91011}$ $\sqrt{121314151617181920}$

中區與1區區界之17區界之區界

h. m. $\frac{1}{2}$ m. $\frac{1}{2}$ m. $\frac{1}{2}$ m. $\frac{1}{2}$ m.

正在检查中

अ. १५४ व ५५५

天皇陛下に対する訪中招請

12/20

91. 12. 20

亜 中

今上天皇の御即位以降の中国側よりの訪中招請アプローチ（公式・非公式）をとりまとめたところ、次の通り。

1. (89. 4. 13) 訪日中の李鵬総理より、天皇陛下に対し、「将来、適当な時期に、天皇陛下が中国を訪問されるよう希望いたします。天皇陛下より、「そのような機会があれば嬉しく思います。ただ自分の訪問については、政府との相談が必要です。」

2. (90. 7. 6) 江沢民総書記より毎日新聞社訪中国に対し、「もし天皇に中国訪問の御希望があれば、いつでも歓迎する。」（報道）

3. (90. 11. 12) 即位の礼の出席のため訪日中の呉学謙副総理より、（饗宴の儀の開始前に）天皇・皇后両陛下に対し、「楊尚昆国家主席、中国人民に代わり、天皇に御挨拶を送る。天皇・皇后両陛下の御都合の良い時に中国を訪問されるよう招請する。」

天皇陛下は「ありがとう。」と回答。

（呉副総理が我が方接判員に対し内話したところによれば、食後のレセプションで、呉より陛下に英語にて直接、重ねて訪中を招請したところ、陛下は「政府が決定するでしょう。」と回答。呉より「具体的なことは今後外交ルートで協議することとしたい。」旨述べた由。）

4. (91. 4. 6) 李鵬総理より、訪中した中山大臣に対し、「中日双方の努力により、この20年間、中日関係は順調に発展してきた。89年に訪日し、天皇陛下にお会いした際に両陛下の訪中を招請したところ、訪中の機会があることを期待しているが、具体的には政府の同意が必要であると言われた。明年は国交正常化20周年でもあり、

天皇・皇后両陛下に訪中していただく好機である。もし訪中されるならば中国人民、日本人民の歴史の傷口を治す上からも、友好関係を強固にする上からも重要である。」

中山大臣より、「李鵬総理の招請の言葉を心にとめて政府として検討させていただきたい。両陛下は即位が終了するまでは外国訪問をされなかったこともあり、外遊日程が立て混んでいる。訪中が実現できれば日中関係が進展するであろう。」旨回答。

5. (91. 4. 7) 銭其琛外相より、訪中した中山大臣に対し、「来年は国交正常化20周年で、一つの重要な年。両国の歴史の中で重大かつ記念すべき年である。20周年の際に天皇・皇后陛下の御訪中が実現すれば極めて意義深いことである。必ずや中国人民の歓迎を受けるであろう。善隣関係の発展を大きく促進するものと考ええる。これまでも中国の首脳が貴国を訪問した際、都合の良い時期の天皇の御訪中を歓迎する旨伝えている。天皇からもそのような機会があればとの発言をいただいている。日本政府が積極的に考慮されることを期待。」

中山大臣より「天皇訪中については政府として今後検討していきたい。」旨回答。

6. (91. 6. 26) 訪日中の銭其琛外相より、中山大臣に対し、

「明年の国交正常化20周年には両国の要人の相互訪問を考えたい。中国として天皇・皇后両陛下が明年の御都合の良い時期に訪中されることを大変歓迎する。中国指導者はこれまで何度も天皇陛下の御訪中を招待しており、本件が実現すれば必ずや中国人民の熱烈な歓迎を受けることであろう。中日関係史の上でも大きな出来事になると考えており、子々孫々の友好のための大きな原動力になり、両国の将来にとって大きな影響を与えるものと信じている。日本政府が積極的に考えていただくことを心から希望する。」

中山大臣より「貴部長の発言を注意深く拝聴した。今後政府において十分検討したい。」旨回答。

7. (91. 8. 10) 李鵬総理主催歓迎宴において、李鵬総理より海部総理に対し「本件は、本来会談の席でお話しようと思ったが、日本

側を困らせることは本意ではないので、また、既に本件については銭 外交部長よりお話していることでもあり、それは止めた。しかし来年の天皇陛下訪中実現にかける中国側の気持ちは非常に強い。改めてこのことを貴総理にお伝えする、」

海部総理より、「本件については、政府内において引き続き検討を進めて参ることと致したい」旨回答。

8. (91.11.13) ソウルで開催された第3回APEC閣僚会議に際しての日中外相会談の席上、銭其琛外相より、「ハイレベル交流についても20周年にあたり実現したく、既に要請している天皇陛下の訪中につき新内閣で早急に検討を願いたい」旨言及。これに対し、渡辺大臣より、「天皇陛下の訪中については海部総理訪中時の話もあり、新内閣においても中国側希望を踏まえ引き続き検討中。但し、皇室のことなので政府の一存では決められない」旨応答。

9. (91.12.3) 訪日中の田紀雲副総理より、宮沢総理に対し、「中国政府及び人民は、明年の日中国交正常化20周年に天皇・皇后両陛下が訪中されることを期待しており、両陛下が訪中された場合には、必ずや中国人民の熱烈な歓迎を受けるので、総理からも本件を促進願いたい。」

宮沢総理より、「両陛下の訪中についての丁寧な言葉を感謝する。我々としても今後、色々な事情をふまえ検討して参りたい」旨回答。

天皇陛下のフツシと米大統領へのお言葉（訪中関連）

北米

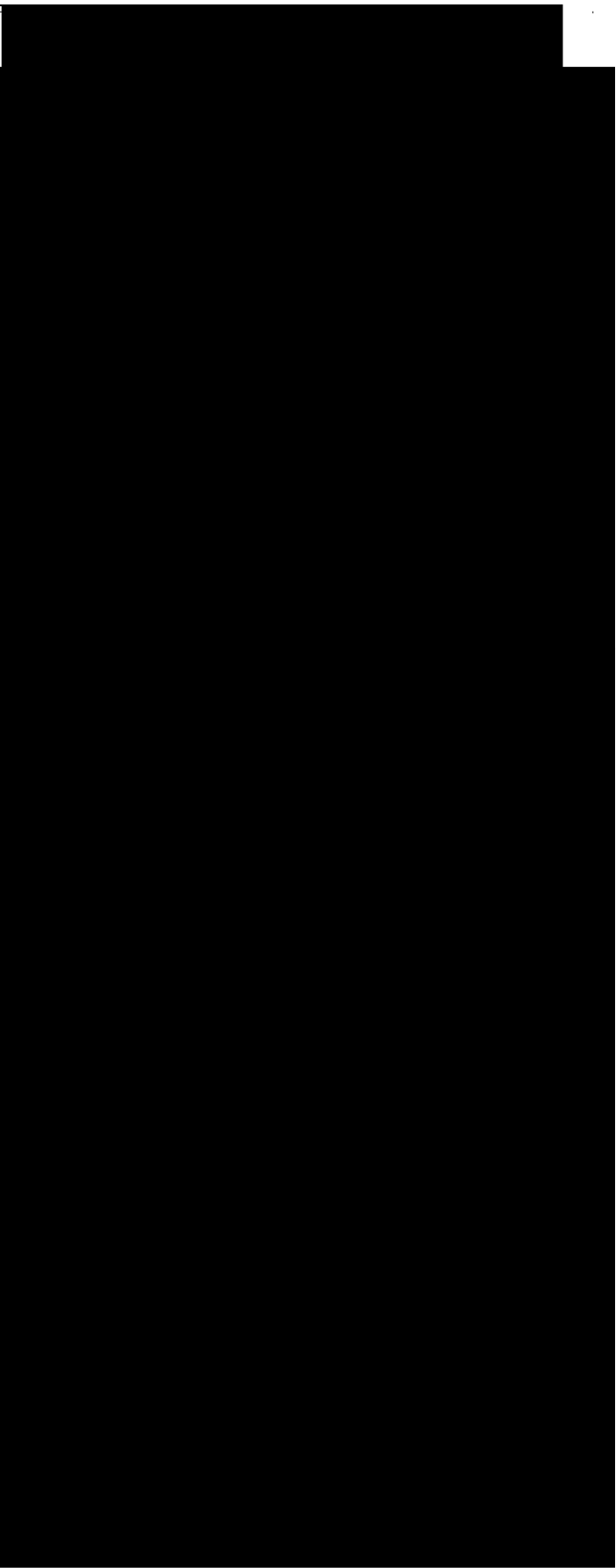
松永

アジア局長
審議官

中国課長
首席事務官

→ 下 泉

極秘第 2 号
極 秘
無 期 限
2000-1 部の内 不可 1 号

10日、ブッシュ米大統領は、お別れのご挨拶に訪問された天皇陛下
に対し、以下の通り述べた。

(北米 - 松永 (通訳) より 聴取)

部内連絡

(保秘注意)

1/6

読了後必返却

※総第

※平成

年時

月分

日秒受付

電信案

極 秘
無 期 限

8 部の内
7 号

Y-Y

電信課長	大臣 秘書官	主管	※発電係 1 2
	政務次官 事務次官 外務審議官 外務審議官 官房長	アジア局長 審議官 中国課長 首席事務官	起案 平成 4 年 / 月 6 日 起案者 電話番号 泉 (山崎氏) 2426
協議先 儀典長 総務課長			

(注意) 1 枚目は、機械で処理しますので、折り曲げない様願います。

(八〇字)

在	中国	大使 総領事	あて	外務大臣 発
件名	(部内連絡)			
主管・文書記号	※電番	大至急 普通	至急 (優先処理)	パターン・コード
アジア局長				
転電 転送 在 転報	※転電番号	大至急 至急 普通 (優先処理)		
橋本大使へ				
アジア局長より				
※				

GB-1

外務省

回覧番号

(※印欄内は電信課記入)

外務省 第三部 第三課

(二八〇字)

天皇陛下御訪中について、今般日中間で御承知の通り外やりこりがありましたが、外務大臣より本件につき、対外発表後以上のこと（特に具体的日程）が漏れることが絶対ないようによろしくの御指示がありました。（新大臣の口グセとして「外務省と日銀は口が軽い。その点大蔵省は口が重い」とへ言あり。）なお、出発前に宮内庁長官から儀典長宛と同様の要請がありました。大臣、長官とも特に右翼、左翼の動きが顕在化することをお心配されていふ事。

本指図においとも十分注意いたしましたので、貴館におかれましても、関係幹部各位へ周知徹底方をうしくお願いいたします。

(3)

官沢総理 ↓ アッパ 米大経領

極 秘
無 期 限
1 部の内
号

報 告 ・ 供 覧

(記録用)

大 臣 秘書官 政務次官 事務次官 外務審議官 外務審議官 官 房 長	主 管	保 存 期 間
	アシア局長 審 議 官 中 国 課 長 首席事務官	1類 2類 3類 4類 (永久) (10年) (5年) (1年)
	許とリ 口頭で 明かし	起案 平成 4 年 2 月 13 日
		完結 平成 年 月 日
		起案者 電話番号
		泉 2426

回 覧 先

以下
下記の件に関し、~~別紙~~のとおり報告・供覧します。

件 名

天皇訪中 (官次総理 → フランス 米大統領)

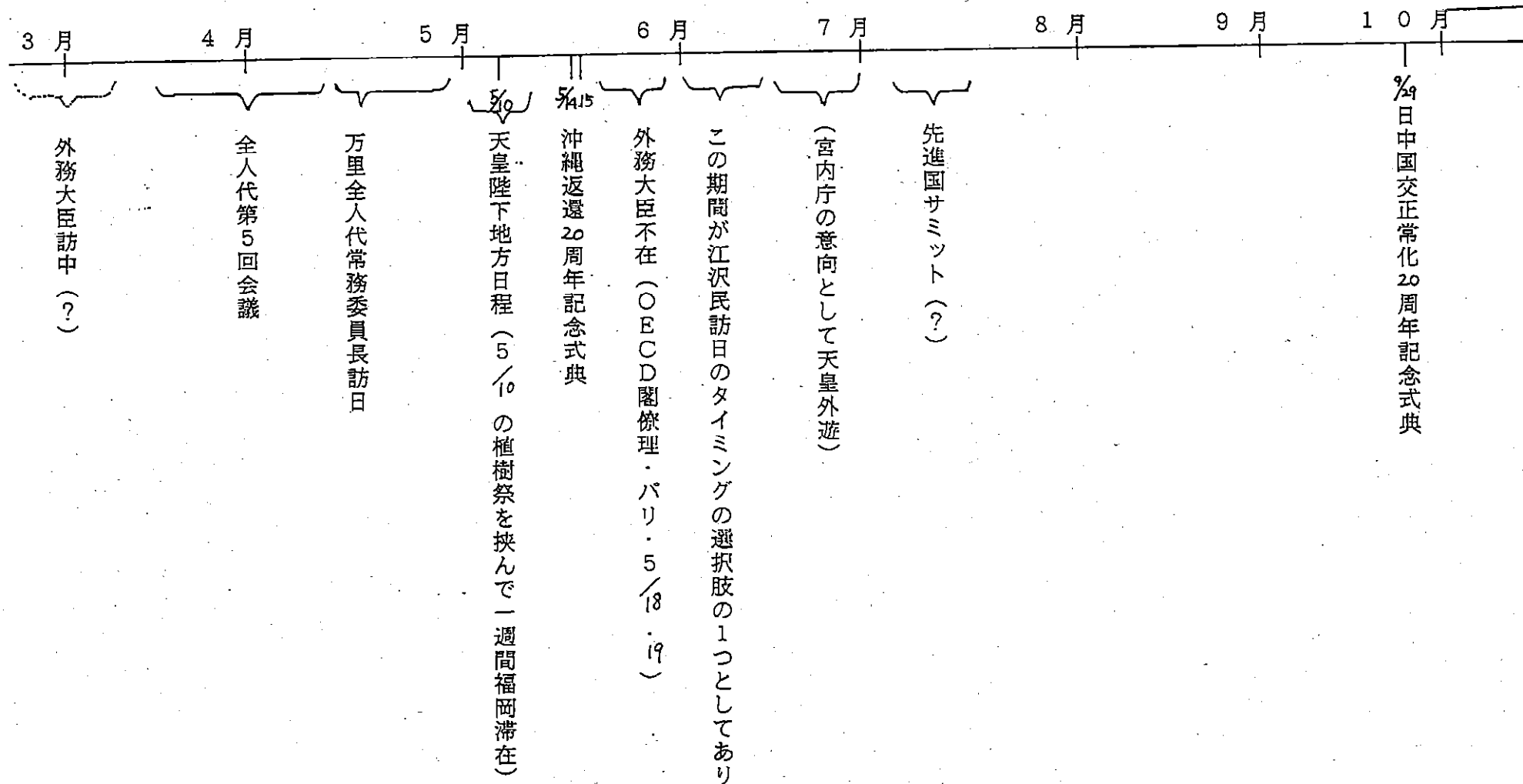
(別紙の要点等)

梅井中国課長に松浦外審より聴取。(本件は1月8日の両館長に於
テラート尾崎の席上話とされたもの。)

1. 官次総理より、「天皇陛下は本年10月に中国を御訪問とされる方向で
準備中である」旨発言。

2. これに対し、フランス大統領より、「それはまだではないか」とた
がねあった。

(3)



エ、
アジア局
ホシエ
ン・ヤ
ー
ハ
ー

3
シ
ア
局
ホ
シ
シ
ョ
ン
・
ペ
ー
ハ
ー

接有牛胆將之如草中 10-110-2 052
 同乐局 221. 221. 221. 221. 221. 221.
 221.

決 裁 書

大臣 秘書官 政務次官 事務次官 外務審議官 外務審議官 官房長	主管 ○ アジア局長 ○ 審議官 参事官 中国課長 首席事務官	保存期間			
		1類 (永久)	2類 (10年)	3類 (5年)	4類 (1年)
		起案 平成 3 年 11 月 28 日			
		決裁 平成 年 月 日			
		起案者	電話番号		
		泉	2426		
協議先 ○ 総括審議官 ○ 総務課長 地域政策課長 北東アジア課長 ○ 儀典長 ○ 儀典官 会計課長					
下記の件に関し、決裁を求めます。(関係文書別添)					
件名 天皇訪中に関するアジア局ホロジション・ハローパー					
GA-1 (昭和163. 4. 1改正)		外務省		回覧番号	

天皇訪中に関するアジア局ポジション・ペーパー（案）

平成3年11月27日

アジア局 中国課

天皇陛下の中国御訪問については、我が国と緊密な関係にある隣邦でありかつ友好国である中国より累次要請が繰り返されてきている（別紙参照）以上、これを拒否する特段の理由無き限り、いつかはこれに応じざるを得ないというのがアジア局の基本的立場。

アジア局に於いては、これまでに、韓国等他の国々との関係での訪問の優先順位の問題、訪問時の過去の戦争責任に関する「お言葉」の問題、二国間外交の文脈で見たタイミングの問題、更には我が国元首の訪問自体の有する国際・国内政治的意味合いの問題等に加え天皇御自身の訪問に対するお考えの問題等の「諸般の事情」について、慎重な吟味を行ってきた。

その結果、アジア局としての結論は、今後天皇訪中を更に5年以上引き延ばす実際上の理由があるのであれば格別、ここ数年内に実現せざるを得ないと考えるのであれば、明年の日中国交正常化20周年のタイミングが訪中の絶好の機会であり、早急に省内の意思統一を行い、右実現に向け省内関係部局に於いて直ちに具体的検討に入るべしというもの。

以上の理由及び訪中実現に向けてのとり進め方は下記の通り。

記

I. 理由

1. 天皇訪中は戦後の日中関係にとって最大の重みを持つものであり、それだけにそのタイミングには細心の注意が必要である。他方、最近の中国側からの熱心な訪中招請は外交儀礼に叶ったものであり、これに対する我が方の回答をいつまでも引き延ばすことは対中外交上の大きなマイナスとなる惧れがあり、本件回答には一定の時間的制限がかかっていると見るべきである。右の一定の時間的制限とはせいぜい数年間と観念すべきものであるが、この間に中国の現体制が崩れることは予想されず、何れにせよ天皇訪中は現体制を前提として検討することが現実的である。そうとすれば、明年の国交正常化二十周年という節目を最大限利用することが得策であり、対内外説明の観点からも処理しやすい。

2. 国交正常化20周年の明年中に天皇訪中が実現すれば、中国側は大いにこれを評価

[REDACTED]

という効果もあり得ると思われる。)

くことを確保する上でも、天皇訪中の意義は大きい。

他方、中国は近時、国際的に「期待」されている行動を理解し、中国に対する反感をな

るべく惹起しないように分別ある行動をとろうとしているやに見られるが、内外に於て「6.4事件」の後遺症は未だ消えてはいないことも事実である。従って、我が国と中国との間の最高レベルでの友好促進が、真に、国際的に、又、中国あるいは我が国の国民の中で、許容され、祝福されるよう、事務方としてグランド・デザインを描き、中

国側との間で訪中実現に向けての環境整備を入念に行っていく必要がある。具体的考え方は次の通り。

1. 日中国交正常化20周年関係の要人往来の文脈での位置づけ

- | | |
|---------|---|
| 91年12月 | <u>田紀雲中国国务院副総理訪日</u> （本年最後の中国要人の訪日であり、明年の20周年につなげるもの。） |
| 92年1～4月 | <u>渡辺副総理兼外務大臣訪中</u> （20周年要人往来の皮切り。91年6月の <u>銭其琛</u> 外相訪日に対する答礼訪問。天皇訪中を内々に伝達。） |
| 4月下旬 | <u>万里中国全人代常務委員長訪日</u> （「6.4事件」で手が汚れておらず、民主・人権問題に理解ありと見られている。） |
| 5～6月 | <u>江沢民中国共産党総書記訪日</u> （中国側が民主、人権、軍備管理・軍縮等の面で実質的進歩を見せれば、サミットに向けてのタマとなる。） |
| 9月 | <u>天皇・皇后両陛下中国御訪問</u> （日中国交正常化20周年の高まりの中での訪中。） |

（注）政府首脳相互訪問については、次は李鵬総理が訪日する順番であるが、明年については、中国側は予定していない模様。中国側は国交正常化20周年記念の要人往来として、（天皇訪中の実現の可能性に拘らず）江沢民総書記及び万里全人代委員長のラインを示してきている。

2. 環境整備

（1）対米配慮

中国国内の人権と民主の問題、通常兵器の国際移転や核技術・ミサイル拡散の問題は、主要先進国の中国に対する共通の懸念として存在するところ、天皇訪中が中国のかかる現状を肯定し、ブレッシングを与えるものであるかの如き誤解を万が一にも生まないように配慮することが肝要である。特に明年は米大統領選挙の年に当たり、中国問題は容易に大統領選のイシュー（特に民主党による共和党攻撃の材料）となり得ると見られるところ、天皇訪中がかかる文脈の中でその是非を論じられるようになることは極めて好ましくなく、是非とも避ける必要がある。

従って、天皇訪中実現に当たっては、中国がこれらの問題への対応に於て大幅の前進を達成し、「6.4事件」の後遺症を minimize することが重要である。我が国としても、万里や江沢民訪日の機会をとらえ、中国側にかかる環境整備の必要性につき理解を求め、人権・民主の問題や軍備管理・軍縮に関わる問題についての中国側の前向きな対応を強く懇望していく必要がある。右タイミングとしてはサミット前の段階で、中国の要人が訪日した際に具体的対応が出されるのがベスト。それをもって我が国は、サミットでG7各国に中国の現状を説明・紹介することが可能。

(注) 米大統領選の日程

92年2月10日～6月5日	各州党大会、予備選挙
7月半ば	民主党党大会
8月半ば	共和党党大会
11月3日	一般投票日（大統領選挙人選出）
12月14日	選挙人による投票
93年1月20日	大統領就任

(2) 中国国民への配慮

天皇訪中は、中国人の国民感情に於て、必ずしも無条件に歓迎されるものではないことは十分に心に銘記しておくべきである。中央政府のグリップの下、それが顕在化するか否かは別として、「天皇」という言葉のもつ響きが過去の日本軍の中国に於ける行為を想起させることは一部に於いては避け難いものと思われる。中国政府は昭和天皇の戦争責任の問題に触れることについては敢えて自制するものと考えられるが、日本の過去の行為について天皇から何等かの「お言葉」を期待していることは否めない。

天皇訪中をもって過去の問題に一応の区切りをつけ、日中関係を21世紀に向け将来を志向した日中関係へと再構築していく出発点とするというのであれば、我が方として、天皇の「お言葉」の問題について出し渋ったかの如き印象を残さないよう細心の注意を払いつつ、戦略的に考え、国内コンセンサス作りの努力を早期のうちから開始すべきである。

この点、天皇が過去の問題について中国国民に率直に語りかける等、天皇と中国国民との直接の交流を演出することも検討に値するものと思われる。（天皇訪中に当たっては、台湾の感情も考慮すべきであるが、大陸の人々のみならず台湾の人々も含むような演出が望ましい。）

(了)

天皇陛下に対する訪中招請－最近の動き

91. 11. 14

亜 中

今上天皇の御即位以降の中国側よりの訪中招請アプローチ（公式・非公式）をとりまとめたところ、次の通り。

1. (89. 4. 13) 訪日中の李鵬総理より、天皇陛下に対し、「将来、適当な時期に、天皇陛下が中国を訪問されるよう希望いたします。
天皇陛下より、「そのような機会があれば嬉しく思います。ただ自分の訪問については、政府との相談が必要です。」

2. (90. 7. 6) 江沢民総書記より毎日新聞社訪中国に対し、「もし天皇に中国訪問の御希望があれば、いつでも歓迎する。」（報道）

3. (90. 11. 12) 即位の礼の出席のため訪日中の呉学謙副総理より、（饗宴の儀の開始前に）天皇・皇后両陛下に対し、「楊尚昆国家主席、中国人民に代わり、天皇に御挨拶を送る。天皇・皇后両陛下の御都合の良い時に中国を訪問されるよう招請する。」

天皇陛下は「ありがとう。」と回答。

（呉副総理が我が方接判員に対し内話したところによれば、食後のレセプションで、呉より陛下に英語にて直接、重ねて訪中招請したところ、陛下は「政府が決定するでしょう。」と回答。呉より「具体的なことは今後外交ルートで協議することとしたい。」旨述べた由。）

4. (91. 4. 6) 李鵬総理より、訪中した中山大臣に対し、「中日双方の努力により、この20年間、中日関係は順調に発展してきた。89年に訪日し、天皇陛下にお会いした際に両陛下の訪中招請したところ、訪中の機会があることを期待しているが、具体的には政府の同意が必要であると言われた。明年は国交正常化20周年でもあり、

天皇・皇后両陛下に訪中していただく好機である。もし訪中されるならば中国人民、日本人民の歴史の傷口を治す上からも、友好関係を強固にする上からも重要である。」

中山大臣より、「李鵬総理の招請の言葉を心にとめて政府として検討させていただきたい。両陛下は即位が終了するまでは外国訪問をされなかったこともあり、外遊日程が立て混んでいる。訪中が実現できれば日中関係が進展するであろう。」旨回答。

5. (91. 4. 7) 銭其琛外相より、訪中した中山大臣に対し、「来年は国交正常化20周年で、一つの重要な年。両国の歴史の中で重大かつ記念すべき年である。20周年の際に天皇・皇后陛下の御訪中が実現すれば極めて意義深いことである。必ずや中国人民の歓迎を受けるであろう。善隣関係の発展を大きく促進するものとする。これまでも中国の首脳が貴国を訪問した際、都合の良い時期の天皇の御訪中を歓迎する旨伝えている。天皇からもそのような機会があればとの発言をいただいている。日本政府が積極的に考慮されることを期待。」

中山大臣より「天皇訪中については政府として今後検討していきたい。」旨回答。

6. (91. 6. 26) 訪日中の銭其琛外相より、中山大臣に対し、「明年の国交正常化20周年には両国の要人の相互訪問を考えたい。中国として天皇・皇后両陛下が明年の御都合の良い時期に訪中されることを大変歓迎する。中国指導者はこれまで何度も天皇陛下の御訪中を招待しており、本件が実現すれば必ずや中国人民の熱烈な歓迎を受けることであろう。中日関係史の上でも大きな出来事になると考えており、子々孫々の友好のための大きな原動力になり、両国の将来にとって大きな影響を与えるものと信じている。日本政府が積極的に考えていただくことを心から希望する。」

中山大臣より「貴部長の発言を注意深く拝聴した。今後政府において十分検討したい。」旨回答。

7. (91. 8. 10) 李鵬総理主催歓迎宴において、李鵬総理より海部総理に対し「本件は、本来会談の席でお話しようと思ったが、日本

側を困らせることは本意ではないので、また、既に本件については銭外交部長よりお話していることでもあり、それは止めた。しかし来年の天皇陛下訪中実現にかける中国側の気持ちは非常に強い。改めてこのことを貴総理にお伝えする、」

海部総理より、「本件については、政府内において引き続き検討を進めて参ることと致したい」旨回答。

8. (91.11.13) ソウルで開催された第3回APEC閣僚会議に際しての日中外相会談の席上、銭其琛外相より、「ハイレベル交流についても20周年にあたり実現したく、既に要請している天皇陛下の訪中につき新内閣で早急に検討を願いたい」旨言及。これに対し、渡辺大臣より、「天皇陛下の訪中については海部総理訪中時の話もあり、新内閣においても中国側希望を踏まえ引き続き検討中。但し、皇室のことなので政府の一存では決められない」旨応答。

了
了
了
局
10
1
10
1

12/16

3. 事務次官室会議

12/2 次官室におりき会議

「皇族の外国御訪問計画」各課コメント

アジア局

1. マレーシアについては、

(1)両陛下の今次訪「マ」に際し、訪問が予定されていたながら気象条件で訪問がキャンセルされたペラ州（マレーカレッジを含む）を訪問して頂く。（両陛下の今次訪問に含まれなかった他のASEAN諸国との兼合いもあり、いずれかの宮様がASEAN以外の国を訪問される際に、途次立寄って頂くのが良い。）

(2)豪・NZ御訪問の途次立寄りも可能。

(3)また、タイ王妃還暦記念行事出席の途次の可能性もある。

2. インドについては、明年は日印国交40周年に当り、各種記念行事も予定されているところ、皇室関係者を含む要人の交流は有意義。

北米局

1. カナダについては、現地より2件の要望があるがこのうち1992年5月クイーンズ大学における名誉博士号授与式への御出席依頼については、同大学は高円宮殿下の御留学先であり、現在に至るまで、同大学のみならず所在地のキングストン市が「わが町のプリンス」として高円宮殿下に対し深い敬愛を抱いていることもあり、是非実現されることが望まれる（同殿下は従前より日加協会の名誉総裁を務められる等、日加関係の推進に御尽力頂いている）。

2. 米国については1992年5月30日、シカゴ美術館アジア・ギャラリーの新装開館式典への [REDACTED] があるが（シカゴ総領事館よりの要望）米国内で他に適当な訪問地、行事がある場合、これらと合わせて訪米頂くことを検討することが望まれる。

経済局

1992年7月のセビリア万博ジャパン・デーへの皇族御出席については、同時期に行われるバルセロナ・オリンピック開会式への御出席（但し、最近の海外におけるオリンピック開会式への皇族御出席の例はない）を考慮する必要がある、主管の問題は別途協議するとして文2及び西欧2と調整の要ありと考える。

皇族の外国御訪問計画について（当課コメント）

平成3年10月18日

西 欧 第 二 課

1. スペイン

92年7月20日にセビリヤ万博ジャパン・デーが予定されており、スペイン側より我が方要人の出席につき強い要請があるところ、皇族の出席を前向きに検討願いたい。なお、たまたま、7月25日にバルセロナ・オリンピックの開会式が予定されているが、右への皇族御出席につき要望が出される場合には、下記の諸要素を考慮に入れ検討する必要がある。

(1)バルセロナ・オリンピック開会式直前の7月23日及び24日マドリッドにおいて、中南米諸国約20カ国の首脳が一同に会する「イベロ・アメリカ・サミット」開催が予定されており、同サミット出席者多数が引続きスペインに滞在し、オリンピック開会式にも出席する可能性大。

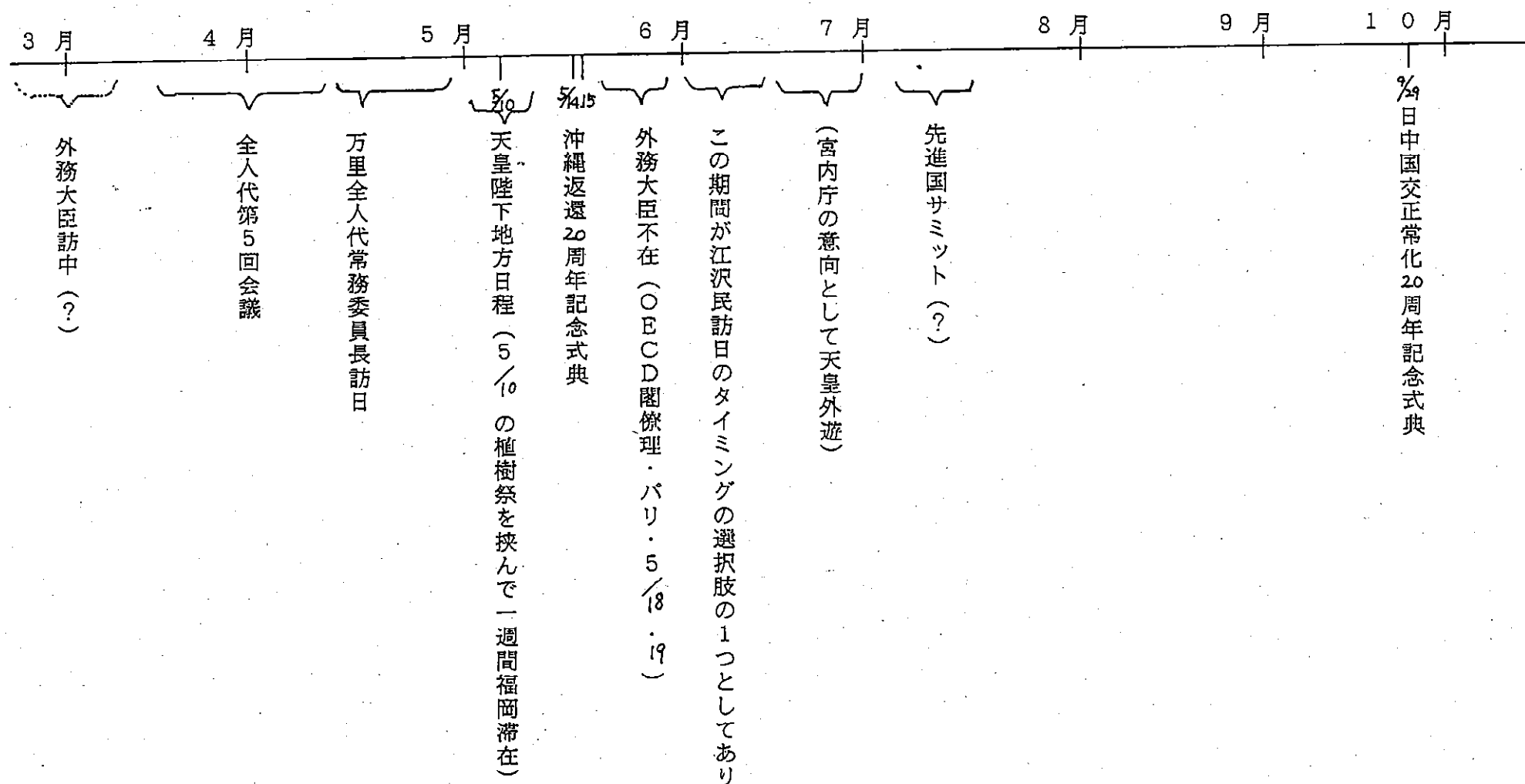
従って、これらの首脳を狙ったテロが行われる可能性も排除できない。これに対し、同サミット出席者多数がセビリヤ万博ジャパン・デーに出席する可能性は日程の関係から比較的少ないものと思料される。

(2)バルセロナ・オリンピック開会式には、中南米諸国の首脳等、多くの国家元首が参加することが予想され、我が国からは天皇陛下御自身が御出席されない限りプロトコルの順位は低くなると思われる。これに対し、セビリヤ万博ジャパン・デーにおいては、スペイン政府側が我が方要人の接遇に万全を期すとしている。

2. ポルトガル

ソアレス大統領より、日・ポルトガル友好450周年にあたる93年に

（了）



平成3年11月27日 儀典官室

	欧 州	中 国
1. 意義付け	- アジアの次の訪問先として米国が明年は不適當である限り欧州が自然 - 王室の存在 - 対欧州外交の推進及び一般的な友好親善の増進として効果大	- 国交正常化20周年、中国訪問にとって最も良いタイミング - 先方は明年の訪問を強く希望。「戦後のけじめ」をバランス良く解決する絶妙なタイミング。 - 先方の歓迎も期待でき、現在の良好な日中関係の健全な基盤を固めることに資する
2. 基本的な問題点	- 大きな問題なし	- 天安門・人権問題（国内外よりの批判の可能性） - 韓国対策（アジア局は対応可能との立場） - アジア2回目
3. 時期及び期間 （宮内庁は秋は困難で6月を主張）	- 6月の場合は準備がかなり大変（特に文化行事等勘案した場合）、また、7月上旬ミュンヘン・サミット開催 - 9月の場合は宮内庁との関係で期間が短くならざるを得ないと思われる	- 欧州に比べ時間的制約は少ない - 但し、6月の場合サミット前の訪問となり欧米との関係で問題はないのか（9月29日が記念日）
4. 国内の要因		- 元総理等、更に大臣が積極派――国内圧力強い - 但し、省内に慎重論
5. 明年訪問しない場合の相手国の反応及び我が国の対応	- 関心国は、早期訪問を希望しているが、明年に固執しているわけではない - 現時点で将来の訪問時期につき感触を伝える必要性は少ない	- 中国側及び国内の一部より失望が予想される - その場合将来の訪問時期につき先方へ何等かの感触を伝えることが不可欠
6. その他	- 国選びを行う必要がある（訪問対象国からはずされた国への説明ぶり）	- 中国要人（楊尚昆）の来日とパッケージで考えられるところ、（予定されている江沢民、万里らの訪日と）これをどう整理するか

皇族の外国御訪問計画（案）

I. 具体的に取り進めるべく、今結論を出す必要があるもの

年 月	皇 族 名	国 名	備 考
1992年10月～12月頃	皇太子殿下	湾岸GCC6カ国（サウディ・アラビア、オマーン、カタール、ア首連、クウェイト、バハレーン）	GCC諸国については、 <u>本年2月の御訪問を検討していたが、湾岸危機の勃発により延期された経緯あり。</u>
1992年5月	高円宮同妃両殿下	カナダ、アメリカ	クイーンズ大学における名誉博士号授与式への御出席 モントリオール市創立350周年記念行事（5月27・28日乃至30・31日）、シカゴ美術館アジア・ギャラリー新装開館式典への御臨席
1992年7月中旬	皇太子殿下あるいは 然るべき皇族の方	スペイン他	セビリア万博ジャパンデー（7月20日）御出席
1992年	秋篠宮同妃両殿下、 紀宮殿下等	オーストラリア、ニュージーランド	90年7月パーマーNZ首相（当時）の陛下謁見の際 先方より招待。また、同年9月、ホーク豪首相よりは 陛下に対し、一般的な形で皇族の訪豪招請あり。

II. 可能な範囲で今後取り進めるもの（注）

年 月	希望越している皇族名	国 名	備 考
1992年		タイ	92年はタイ王妃還暦記念の年。
1992年	皇太子殿下	中南米	ヴェネズエラ、ドミニカ（共）、メキシコ （プライオリティー順）
1992年		インド等南西アジア	インド及びパキスタンより の招待あり
1992年		ブルガリア	即位の礼の際訪日したブルガリア大統領より招待あり （但し、時期については言及なし）
1992年		ハンガリー	ハンガリー大統領よりの正式招待あり
1992年	皇太子殿下	ルーマニア	ルーマニア首相より正式招待あり

（注）今後新たに招待越すケースも含め検討する。

（参考）

年 月	希望越している皇族名	国 名	備 考
1993年		ポルトガル	日ポ友好450周年行事
1993年		アフリカ（タンザニア他）	89年、タンザニア大統領訪日の際を含め、種々の 機会に招待あり。

天皇皇后両陛下の外国御訪問

(参 考 資 料)

平成3年11月1日

儀 典 官 室

1. 未答礼国 (1-6 か国)

(アジア)

ブルネイ、
バングラデシュ、

ミャンマー、

大韓民国、

(欧州)

イタリア、
ソ連

フランス、

ポーランド、

(中南米)

パナマ、

ヴェネズエラ、

(中近東アフリカ)

エジプト、
ニジェール、

カタール、
ジンバブエ、

ガボン、
ア首連、

2. 招請越している国 (30 か国)

(アジア)

[REDACTED]

インド、
中国、

[REDACTED]

(大洋州)

[REDACTED]

(欧州)

フランス、

[REDACTED]

イタリア、
デンマーク、
チェッコ・スロヴァキア、

[REDACTED]

ドイツ、
ハンガリー、
ポーランド、

[REDACTED]

ベルギー、

(北米)

カナダ

(中南米)

[REDACTED]

ブラジル、

[REDACTED]

(中近東アフリカ)

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]

3. 今上陛下が天皇、御名代または皇太子として公式訪問された国（37か国）

（アジア）

インド、	ネパール、	パキスタン、
インドネシア、	フィリピン、	タイ、
マレーシア、	シンガポール、	スリ・ランカ、

（大洋州）

オーストラリア、	ニュー・ジーランド、
----------	------------

（欧州）

英国、	スペイン、	ユーゴスラヴィア、
ルーマニア、	ブルガリア、	アイルランド、
スウェーデン、	デンマーク、	ノールウェー、
フィンランド、		

（北米）

米国

（中南米）

メキシコ、	ペルー、	アルゼンティン、
ブラジル、	パラグアイ、	

（中近東アフリカ）

イラン、	エチオピア、	アフガニスタン、
ヨルダン、	サウディ・アラビア、	ザンビア、
タンザニア、	ケニア、	ザイール、
セネガル、		

皇族の外国御訪問計画（案）

平成3年10月25日
儀 典 官 室

年 月	皇 族 名	国 名	備 考
1992年5月		米国	シカゴ美術館アジア・ギャラリー新装開館式典への御臨席他
1992年9月～11月頃	皇太子殿下	湾岸GCC6カ国（サウディ・アラビア、オマーン、カタル、ア首連、クウェイト、バハレーン）及びジョルダン	GCC諸国については、本年2月の御訪問を検討していたが、湾岸危機の勃発により延期された経緯あり。ジョルダンについては、ハッサン皇太子より招待あり。「ジョ」よりは、国王、皇太子の訪日も公式、非公式に回数を重ねており、答礼の必要あり。
1992年		アフリカ（タンザニア他）	89年、タンザニア大統領訪日の際を含め、種々の機会に招待あり。
1992年	皇太子殿下	ヴェネズエラ、ドミニカ（共）、メキシコ（プライオリティー順）	
1992年	皇太子殿下 又は秋篠宮同妃両殿下	今回両陛下が御訪問されなかったASEAN諸国	
1992年	皇太子殿下 又は秋篠宮同妃両殿下	マレーシア（ペラ州）	
1992年		インド等南西アジア	インド及びパキスタンよりの招待あり
1992年		ブルガリア	即位の礼の際訪日したブルガリア大統領より招待あり（但し、時期については言及なし）
1992年		ハンガリー	ハンガリー大統領よりの正式招待あり

年 月	皇 族 名	国 名	備 考
1992年	秋篠宮同妃両殿下	オーストラリア、ニュージーランド	90年7月パーマーNZ首相（当時）の陛下謁見の際先方より招待。また、同年9月、ホーク豪首相よりは陛下に対し、一般的な形で皇族の訪豪招請あり。
1992年7月中旬	皇族	スペイン	セビリア万博ジャパンデー御出席のため
1992年7月	皇族	カナダ	エドモントンのレスブリッジ日加友好日本庭園開園25周年記念式典への御臨席
1992年5月	高円宮殿下	カナダ	クイーンズ大学における名誉博士号授与式への御出席

12/2 次官室におかし会

秘	極
期	無
部の内 号	

200-20

(様子おたのび)

- 結論あり。次官の御報告より。
一 6月訪欧で英に打診したこととな
た。(欧米局はこれにキツ、その
返答をまちがひ。-----。)
- 次官の上記発言の「含み」として、うまい行けは
9~10月の天皇訪中を予定しているものと見られる。
但し確信あり。米中関係が良からず、そのXという
の。
- 自分から見たところのS-Xというものは、
ソトと見ると、訪欧。その訪欧中に訪欧して、
これは中国は不変との認識。
(S-Xは)
- 次官より、20周年のS-Xをどうするかという
は、うまいと見られるので、行けやけやけの
S-Xという、明確な形に、更なる
は、S-Xも相当なところまで目下にある。

12/16 付次官主簿会合

12月16日は 次室主催会合

(XZ 4)

会合出席の 様々様を。好。

1. 次室より、天皇訪中になるとの噂の欧米の反響は
→ 先下問あり。

(欧米局長 → 反響 悲観的だが、^{長と短} 次室の決意よこせ、
北米局 → 反響 悲観的だが、

2. 経典^長より、AM 17日 320ア局長に之を再合致。
30日 10-110-120 (1. 8-10, 2 欧米, 3.

日本内政, 4. 4-10内政) → 7中10 総務。

12月17日 次字定會議
(配布資料等)

② 審 議 官

↑
① 中国課長

→ 歴中総務班

天皇陛下御訪中に関する次官室会議

極 秘

無 期 限

／ 部の内
／ 号

平成3年12月1

読了後必返却

コピー不可

日時：12月17日、10:50～11:20

出席者：小和田外務審議官

佐藤官房長

中村儀典長

谷野局長アジア局長

兵藤欧亜局長

川島北米局審議官

沼田報道官参事官

同席：木寺中国課首席事務官

三好儀典官室首席事務官

1. 天皇陛下御訪中

(1) アジア局ペーパー（別添1.）の説明

（アジア局長）これまでの説明の繰り返しになるが、陛下訪中については、国交正常化二十周年、先方の強い期待もあり、訪中して頂くのが自然だと思う。これを断り、別の理屈をつけるのは難しい。韓国にも説明しやすい。また、韓国にも[]が期待できる。

国内的には、大仕事であり、韓国大統領訪日の際のように陛下のお言葉に関心が集まろう。他方、党内の工作については大臣の力をお借りできるのではないかと。大臣も積極的である。プレスについては、現時点では止めるべしとの論調はサンケイ以外にはない。不思議だが、これまでのところ右翼の反応がない。但し、本決まりになれば、右及び左から反応があろう。覚悟して当たらなければならない。

中国の内政との関係では問題はないと思う。トウ小平は来年はもたないかもしれないと考えており、この点は五割方我々の頭にいらしておく必要がある。

欧米の反応についてアジア局のペーパーで言及しているのはおかしいが、来年、米国の大統領選挙では国内の経済問題が争点となることが予想され、陛下の訪中が選挙のイシューになることはない。

他方、9月29日の二十周年記念日は外すべきである。そういう形で陛下を利用しては行けない。式典には然るべき人が出席すればよい。天皇のお言葉でプレッシングを与えるのはよくない。訪中は式典の後、北京の秋であれば、10月乃至、11月の初めがよい。

(2) 議論

（次官）中国は9月29日を外しても良いと考えているのか。

（アジア局長）中国と議論したわけではないが説明は可能と考える。

（次官）例えば、92年の二十周年に関連して93年春にでも訪中するとの説明はどうか。

（アジア局長）余り複雑な整理は中国側に理解させることは難しいと思う。

（次官）アジア局ペーパーの1.～4.に書いてあることはその通りと思うが、国内の世論が割れることはないか。

(アジア局長) サンケイのみが条件を付している。

(次官) プレスについてはその体質から反対はないと思う。しかし、オピニオン・リーダーの間では意見が分かれるのではないか。

(北米局審議官) 陛下が行かれること自体には問題がなく、むしろ、お言葉の問題ではないのか。

(欧亜局長) その通りだと思う。

(官房長) 大臣は、大臣に近い有識者(矢山氏他)と本件について議論した際、皆反対であったと話しておられた。

(欧亜局長) 陛下の訪中は機が熟していないとの感があることも事実である。

(次官) 皇室の行事として取り上げること考えれば自分(次官)もそう思う。

(アジア局長) しかし、陛下が訪中され、はっきりとしたお言葉で過去のことについて述べられる、そういう時期がきていることも事実である。三十周年で訪中されるのでは遅すぎる。

(官房長) 二十周年は訪中を実現しやすいきっかけである。政府の立場からは一つの機会である。

(アジア局長) 中嶋嶺雄教授は、本件について、楊尚昆と手を握ることだけは反対だとしていた。衛藤瀋吉は賛成していた。自民党内では、竹下、中曽根両元総理が賛成。宮沢総理、小沢氏については明確な考え方が伝わってこない。

(次官) 4つのファクターがあると思う。

第一は、韓国との関係であるが、アジア局はコンテインできるとの判断であり、それでよいと思う。

第二は、現在の中国との関係である。我々は、日中の歴史、過去を考えれば陛下が中国に行かれることは当然であり、ポジティブと受け止め、二十周年が契機になると考える。しかし、他方では、現在の中国の政権は悪すぎる、もう少し雰囲気がおさまるのを待つべしとの考え方もあろう。陛下に早く行っていただく必要があるとの議論だけで乗り切れるかの問題がある。第三は、欧米諸国との関係である。今までのところ、強い反応はないが、我が国と比べ、歴史の部分がないので、ネガティブな面のみ出てくる惧れがある。

(北米局審議官) 人権、天安門の問題はあるが、陛下の訪中が人権の面ではなく第二次大戦の清算のコンテキストで捕らえられることは、米のオピニオン・リーダーにも分かると思う。

(欧亜局長) そう思う。欧州では人権の視点のみである。だが、陛下が中国に先に行くのはけしからんとの反応はないと思う。

(次官) けしからんとの反応はないであろうが、ロンドン・サミット後も、実務的な訪問はよいが、儀礼的、友好のみを目的とする訪問はよいのかとの問題がある。インテレクチュアルには出てき得る問題である。

(欧亜局長) サミットのガイドラインとの関係で問題が出てくるのは欧州ではなく米国であろう。

(次官) 政府レベルで反対があるとは思わないが、オピニオン・リーダーからは問題が出ないか。

(欧亜局長) 先ほど川島審議官が言われた通りである。

(儀典長) トウ小平が死んだらどう考えればよいのか。

(アジア局長) ポスト・トウ小平について明確に見通せないが、その時点で改めて考えることになる。

(次官) 二十周年で行かれるのであれば、中国国内によほどのことがなければ行かれても差支えないと考える。但し、第二の天安門事件が起きたら止めるとの対応は可能か。

(儀典長) 閣議前であれば止めることにすればよいし、閣議後であっても、取り止めの閣議を行えば可能である。

(儀典長) 韓国に行かれるとすれば、早くても94年、95年になってしまうが、それで差支えないか。

(欧亜局長) 93年に米国と欧州に行って頂くことを含めた全体ををパッケージとして総理他にあげて頂きたい。

(次官) パッケージと言っても、条件、希望としていうのなら良いと考える。

(欧亜局長) リジッドな条件ではないので、それで結構である。

2. 決定及び今後の進め方

(1) 儀典ペーパー(別添2.)の説明

(儀典長) (大方読み上げた後) 陛下の訪中は江澤民の訪日を受けて行う形になる。英国は、93年にはおいでくださいとしているが、米国もある。欧州については、2回に分けて対応するのが現実的と思われる。

(2) 議論

(次官) 基本的にはこのペーパーを宮内庁に渡して説明するのか。

(儀典長) そうだが、若干書き替える。

(次官) それでは、このペーパーのラインでよろしいと思うがどうか(異論なし)。大臣訪中時の先方に対する言い振りはどうするのか。

(儀典長) 何も言わないという訳には行かない。

(アジア局長) 大臣に強いインディケーションを出して頂きたいと思うが、他方で中国側にただ取りされたくないとの気持ちもある。

(儀典長) 大臣に先に説明するのがよいか、宮内庁に先に説明してよいか。

(次官) まず、大臣に先の条件(93年の訪米、訪欧)をつけて説明して欲しい。

(了)

天皇・皇后両陛下の御訪中について

9.1.12.16

ア ジ ア 局

1. 日中国交正常化20周年は訪中のチャンス。強く請われての訪問であり、我が方として処理し易い。また、韓国側との関係でも説明をつけ易い。（中国政府との関係では、韓国に天皇を迎え入れる体制ができないことをいつまでも訪中招請に応じられない理由とすることはできない。韓国については、逆に、
との効果もあり得る。）
2. 天皇訪中を成功させるための国内的支援体制も比較的強固。（党内工作等、大臣の強いリーダーシップの発揮を期待できる。なお、国内の動向については、これだけ明年の天皇訪中がプレスをにぎわせても、当面、これに反対する目立った反響（含右翼の抗議等）がないことも事実。）
3. ソ連の情勢の進展にも拘らず、中国は改革・開放路線を維持しつつ、国内的にも強いグリップを保持。（中国政府はよく国内コントロールをなし得るものと見られる。）
4. 天皇が明年訪中された場合にも、欧米諸国が特に強いリアクションを示すことは想定されず。（米国の大統領選挙前夜であり、国内の関心は天皇訪中どころではない。）

（了）

- 92年秋 中国（9月29日の記念式典とは別の時期）
93年前半 米国
93年後半～94年前半 欧州

(別添2)

但し（1）今後の状況により92年秋の中国が実現されない場合には、
92年秋の欧州の可能性を改めて検討する。

（2）92年秋の中国が実現する場合、米国の状況等により米国と
欧州の順序が逆になる場合もあり得る。

（3）92年秋から94年前半までに中国、米国、欧州の3訪問を
実現する。韓国は何れにしても右3訪問の後となる。

92年秋の中国を固めるに当たっての留意点

欧米諸国の反応

韓国との関係

国内世論、マスコミ、過激派グループの動向

-
- ・大臣の年頭訪中の際の対応振り
 - ・総理年頭訪韓の際に韓国との関係をクリアーできるか
 - ・欧米主要国に対する根廻しのタイミング如何
 - ・中国からの要人来訪との関係

発表のタイミング

3月下旬ないし4月以降（予備費との関係で閣議決定はその頃
以降でないと難しい）

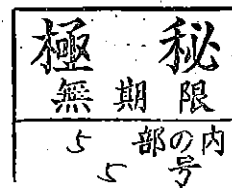
々、各種フリーフ

儀典長々対宮内方護明用ペーパー

12/18

5-1 } 儀典と、儀典と、空内
5-2 }
5-3 }
5-4 中国語
5-5 73511 用

追加 1-1 次



天皇・皇后両陛下の中国御訪問について

91.12.18

○ 天皇陛下を含む皇族の中国御訪問の問題については、昭和天皇時代からの懸案。中国側からは、1978年10月、日中平和友好条約の批准書交換のため訪日した鄧小平副総理より、当時皇太子であられた今上天皇に対し、非公式に訪中招請があったのを初めとして、累次丁重な招請有り。（最近では、91.8の海部総理訪中時に李鵬総理より、また、91.12の田紀雲副総理訪日時に宮沢総理に対して、国交正常化20周年のタイミングでの陛下の訪中招請がなされている。）

○ 天皇陛下の御訪中は、隣国たる中国との関係において積極的に対応すべきものであり、不幸な過去を清算し、日中関係を21世紀に向けて新たな段階に発展させる上で大きな意義を有する。その意味で日中国交正常化20周年は、陛下御訪中の好機。強く請われての訪問であり、中国側も陛下の訪中は中国政府及び中国人民により熱烈に歓迎されるであろう旨述べている。

○ 日中国交正常化20周年のタイミングでの訪中は、韓国側との関係でも説明をつけ易い。（中国政府との関係では、韓国に天皇を迎え入れる体制が出来ないことをいつまでも訪中招請に応じられない理由とすることはできない。）

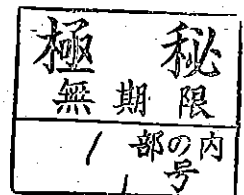
○ ソ連情勢の進展にも拘らず、中国は改革・開放路線を維持しつつ国内的にも強いグリップを保持。（中国政府はよく国内コントロールをなし得るものと見られる。）

○ 明年陛下が訪中されても、欧米諸国が強い反応を示すことは想定されず。（米国は国内で大統領選挙あり、また、欧州はECの統合の年。）

アジア局長
審議官
中国課長
首席事務官

12/8の儀典長の宮内庁送明用レ・ポ・レ

儀典長
儀典官



天皇・皇后両陛下の中国御訪問について

91.12.18

○ 天皇陛下を含む皇族の中国御訪問の問題については、昭和天皇時代からの懸案。中国側からは、1978年10月、日中平和友好条約の批准書交換のため訪日した鄧小平副総理より、当時皇太子であられた今上天皇に対し、非公式に訪中招請があったのを初めとして、累次丁寧な招請有り。（最近では、91.8の海部総理訪中時に李鵬総理より、また、91.12の田紀雲副総理訪日時に宮沢総理に対して、国交正常化20周年のタイミングでの陛下の訪中招請がなされている。）

○ 天皇陛下の御訪中は、隣国たる中国との関係において、~~積極的になさるべきものではない~~
~~のである~~方、不幸な過去を清算し、日中関係を21世紀に向けて新たな段階に発展させる上で大きな意義を有する。その意味で日中国交正常化20周年は、陛下御訪中の~~好機~~。強く請われての訪問であり、中国側も陛下の訪中は中国政府及び中国人民により熱烈に歓迎されるであろう旨述べている。

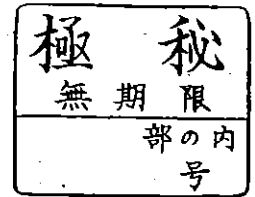
○ 日中国交正常化20周年のタイミングでの訪中は、韓国側との関係でも説明をつけ易い。
（中国政府との関係では、韓国に天皇を迎え入れる体制が出来ないことをいつまでも訪中招請に応じられない理由とすることはできない。韓国については、逆に、
その効果も有り得る。）

○ ソ連情勢の進展にも拘らず、中国は改革・開放路線を維持しつつ国内的にも強いグリップを保持。（中国政府はよく国内コントロールをなし得るものと見られる。）

○ 明年陛下が訪中された場合も、欧米諸国が強い~~リアクション~~を示すことは想定されず。
（米国は国内で大統領選挙あり、また、欧州はECの統合の年。）

山和目次官の政官房長官のりりり

12/20



アジア局長 殿

12月27日行われた事務次官の対官房長官ブリーフの記録中、

貴局（部）関連部分を別添の通り御参考迄お送りします。

しかし、そんな先まで外交関係を結ばないのは不適當であり、むしろ、外交関係設定によって民主化の動きを促進するのが適當である。従って、外務省としては、1月半ば頃に外交関係設定に踏み切りたい考えである。

これまでは、制裁との関係で、総領事館のみブレトリアに置いてきたが、西側諸国の中で大使館を有していない国はほとんどない。デ・クラーク体制自体がアパルトヘイト廃止のための法的措置をとっており、今後我が国としても外交的動きかけの道を強化していくことが大切である。

(長官) はい。

4. (件名外) 天皇陛下の外国御訪問

(次官) 省内で種々事務的に検討してきたが、結局当面の御訪問先として、中国と西欧に絞られた。来年については、2つの理由から、中国御訪問が適當と考えられる。第一は、日中国交20周年という時期であり、中国側も陛下の御訪問を強く期待していること、第二は、欧州の方は明年は間に合わないという事情にあり、特に英国は93年でないと無理だと言っている。

他方、考慮すべき問題としては、第一に中国の体制が、人権などを含む真の民主化にまだ踏みきっておらず、そこへ御訪問されることにより、国内、国外の種々の反響があり得ることである。国内の方は、特に右寄りの勢力からの反発はあり得ようが、これはコントロールできない程のものではないと思う。むしろ、この際訪中され、新しい日中関係の意義付けをやって頂くべきというのが大勢であると考えられる。国際的には、色々な反応はあり得ようが、アルシュ、ヒューストンの両サミットを通じ厳しかった中国に関する論調が、本年のロンドンサミットでは、日本も努力して、中国を孤立させるべきでないということで、ほぼコンセンサスになった。陛下が行かれることにつき若干の批判は生じ得るが、結果として非常に問題になることは無いであろうと思われる。

第二に、韓国との関係がある。

韓国内は、明年3月には国会議員の選挙があり、年末には大統領選が予定されている。

以上のようなラインで、事務的には宮内庁に検討依頼を出している。同庁は陛下に御相談す

る要ありとして回答越してないが、もし間に合えば、渡辺大臣が今度訪中される時、内々にそのようなラインで受け入れられるか否か打診する考えである。もし宮内庁から返事が来なければ、大臣訪中時はもう少し曖昧な表現になろう。いずれにせよ、公式発表までは引き続き検討中ということで通す。

中国の次ぎは、米国の大統領選挙が終わるので、93年前半には米国へ行って頂いた方がよい。その後同年秋、無理であれば翌年の春に欧州へ行って頂くのが適当と考える。

(長官) はい。

5. (件名外) 中国要人の訪日

(次官) 日中国交20周年の関係で中国要人の訪日問題があるが、一つは万里で、もう一つは、江沢民である。「江」は元首ではなく、中国側は陛下が訪中されるのであれば元首の楊尚昆を派遣してもよいと言っている。しかし、そこが明確でない段階では、20周年の使節的な形では「江」を送りたいとしている。明年5月頃の来日で、国賓ではなく政府公賓として来日する。

(長官) なるほど。

6. (立ち話で) 長官の記者会見

(長官) 最近自分の記者会見で外交ものがかなり多くなって、渡辺大臣や報道官の会見の内容と重複する場合も少なく、御二人の立場との関係でどうするのかなと思っている。確かに、自分の方は毎日、夕刊にも良い時間で行っており、テレビ各社が全部入っている。

(次官) 外務省の中では大臣と報道官の会見内容は調整しているが、官邸との間では仲々そうもいかない。どのような形が良いか一度考えた方が良いかも知れない。

(長官) 渡辺大臣には、そういうことで申し訳ないと思っている旨伝えておいて欲しい。

(次官) そうする。

(了)

谷野了シア石長山角谷式部官長

1/9

極 秘
無 期 限
/ 部の内 号

報 告 ・ 供 覧

200-70.

大 臣 秘 書 官 政務次官 事務次官 外務審議官 外務審議官 官 房 長	主 管 アジア局長 審 議 官 中 国 課 長 首席事務官	保 存 期 間								
		1 類	2 類	3 類	4 類					
		(永久)	(10年)	(5年)	(1年)					
		起案 平成 4 年 1 月 9 日								
		完結 平成 年 月 日								
		起案者		電話番号						
		泉		2426						
回 覧 先										
下記の件に関し、別紙のとおり報告・供覧します。										
件 名										
天皇・皇后両陛下の中国御訪問（角谷オ郎室長への説明）										
(別紙の要点等)										
4日、谷野アジア局長、梅井中国課長、 ^{スミヤ} 官内房 角谷オ郎室長 を往訪。標記に因る参訪の説明と行った際の要点。										
GA-7 (昭和63. 4. 1改正)		外 務 省		回覧番号						

(報告メモ)

天皇・皇后両陛下の中国御訪問（角谷式部官長への説明）

92.1.9

垂 中

9日、谷野アジア局長が角谷式部官長を往訪し、渡辺大臣訪中時の本件に関する中国側とのやりとり等につき説明を行ったところ、要点次ぎの通り（樽井中国課長同行）。

1. 谷野局長より北京での中国側とのやりとりを説明。同時に、江澤民総書記と万里全人大常務委員長の訪日の件についても段取りを説明。更に、天皇・皇后両陛下の中国御訪問が実現の運びとなった場合の具体的な訪問地について、宴席で隣り合わせた徐敦信外交部副部長と非公式に意見交換したところ、徐副部長は北京、西安、杭州、上海が最善と考える旨述べていた。他方、局長よりは、

述べるとともに、「政治の中心地」として北京、「歴史の中心地」として西安、「改革・開放の最前線」として広州、そして日帰りで深センを訪問することも一案である旨述べおいた旨説明。

2. 角谷式部官長より、外国元首との相互訪問については、英国のみを例外として、まず外国元首が訪日し、次いで天皇陛下が答礼で訪問するというのが原則である旨発言。これに対し、谷野局長より、現実には陛下のカウンターパートは中国では国家主席であるが、現段階では訪日の話はなく、あっても20周年以後と考えるべき。また、楊尚昆は「6.4天安門事件」の暗いイメージが残っており、必ずしも適切とは思われない旨回答。

3. 角谷式部官長より、韓国及び米国への説明振りをどうするかとの質問があったのに対し、谷野局長より、ブッシュ大統領には対外説明振りより若干踏み込んで、我が国政府としては両陛下の御訪中に向け前向き

真剣に検討中との

に考えているが、これは同大統領限りと願いたいとのラインで総理より御発言願うこととしているが、総理が実際にそのように言われたかは承知しない。韓国には、総理訪韓時に、直接ノテウ大統領に同様のラインで御発言願うことを考えている。いずれにせよ、韓国は今陛下の行かれる状況ではない旨説明。

4. 角谷式部官長より、具体的訪中日程を何時から検討開始するのかとの質問があったのに対し、谷野局長より、早めに開始すると外に漏れる心配が有るので、徐々に詰めて参りたい。訪問日程は、タイトなのも何なので、ゆったりとした日程が良いのではないかと個人的には考えている旨発言。

5. 最後に、角谷式部官長より、韓国訪問が現在無理なのはよく解る。いずれにせよ、今回訪中されることにより、色々なことが整理されるのは大変良いことである旨述べるところがあった。

ハ中国の訪問は
済ませたい

(了)

5. 对外說明 37

中國課長起案ハ1101

未定稿

12/24

未定稿

極 秘
無 期 限
/ 部の内 号

20-73

決 裁 書

大臣 (秘書官) 政務次官 事務次官 外務審議官 外務審議官 官房長	主管 アジア局長 審議官 参事官 中国課長 首席事務官	保存期間 1類 2類 3類 4類 (永久) (10年) (5年) (1年) 起案 平成 3 年 12 月 24 日 決裁 平成 年 月 日 起案者 電話番号 樽井中国課長
協議先 総括審議官 総務課長 (坂 泉 ex2426) 北米局長 川島審議官 ア北長 政経局長 儀典長 儀典官		
下記の件に関し、決裁を求めます。(関係文書別添)		
件 名 天皇・皇后両陛下の御訪中(お外説明振り)		
GA-1 (昭和63. 4. 1改正) 外 務 省		回覧番号

天皇・皇后両陛下の御訪中（対外説明振り）

平成3年12月24日

中 国 課

天皇・皇后両陛下の御訪中については、未だ最終的結論を得た訳ではないが、本件は対外的に関心の高い事柄でもあり、天皇・皇后両陛下の御訪中の意義及び各種の想定される質問への回答について、基本的考え方を事前に擦り合わせておくことが必要と考える。

については、下記のラインで取り敢えずの対外説明振りを準備しておくことと致したい。

記

天皇・皇后両陛下の御訪中（対外説明振り）

平成3年12月24日

中 国 課

1. 意義

- (1) 中国側指導者より繰返し丁重なる招待あり（別添）。これをいつまでも放置しておくことは、友邦隣国たる中国に対して礼を甚だしく失することになる。
- (2) 1992年は国交正常化20周年の節目に当たる。これは、日中間の過去に大きな区切りをつけ、日中関係をより一層将来指向のものとし、更にはアジア・太平洋ひいては世界の平和と繁栄に貢献していくものとする好機会。中国側も20周年を将来の日中友好関係のためのステップにしたいとの認識。
- (3) かかる節目の年に両陛下に御訪中いただければ、中国側の大歓迎を受けることは疑いなく、また上記(2)の如き好ましい日中関係を構築する上でも画期的意義を有する。
- (4) ~~我が国の侵略により中国国民に多大の損害を与えたことは歴史的事実である。両陛下の御訪中は、右によって生じた中国国民ひいては日本国民の心の傷を癒すものとなる。同時に御訪中を通じて、中国国民に開かれた新しい天皇像を強く印象づける絶好の機会となる。~~ ✓

2. 応答要領

(1) （韓国との関係如何）

環境が整えば、韓国を御訪問いただくことを積極的に検討したいが、

明年はたまたま日中国交正常化20周年に当たり、かつ中国側より熱心な招待があることを踏まえ、先ず中国を御訪問いただくこととしたもの。この点については韓国側より理解を得られ³ものとする。

(2) (中国の人権、民主状況との関係で問題ないか)

我が国は、中国の政治、経済の両分野にわたる改革・開放政策のより一層の発展を支援し、懲慚してきた。中国側もこの面で着実に実績を積み上げていく方針と理解。

他方、両陛下御訪中の意義は、上記1.の通りであり、現在の中国の内政状況が重大な阻害要因になるとは考えない。むしろ、~~両陛下の御訪中によって上記の如き中国側の努力を更に促進させる効果もある。~~

(3) (対米、西欧関係で問題ないか)

最近、米中関係及び中国と西欧諸国との関係には一定の改善が見られ、この傾向が更に促進されることを期待。

両陛下の御訪中によって中国の改革・開放政策が前進し、また世界に貢献する日中関係が構築されることとなれば、上記の米中関係及び中国、
(の新しい11 / ページ11) かれらにせよ、我が国としては、
西側諸国関係にとっても有利となる。何れにせよ、我が国としては、
我が国独自の立場に立って日中関係を進めてきており、これが中国と第
三国との関係改善に役立っていると認識。
(我々) (我々)

(4) (明年にも中国の共産党独裁は崩壊する可能性があると思うが如何)

他国の内政に関して云々するのは不適當であるが、中国の現在の指導体制は安定しており、御指摘のようなことはないとする。

(5) (お言葉の問題)

(可能性は前程としていい。)

具体的問題にこそ現時点でふさわしい。
そのことは不適當。

91. 12. 20

並 中

今上天皇の御即位以降の中国側よりの訪中招請アプローチ（公式・非公式）をとりまとめたところ、次の通り。

1. (89. 4. 13) 訪日中の李鵬総理より、天皇陛下に対し、「将来、適当な時期に、天皇陛下が中国を訪問されるよう希望いたします。

天皇陛下より、「そのような機会があれば嬉しく思います。ただ自分の訪問については、政府との相談が必要です。」

2. (90. 7. 6) 江沢民総書記より毎日新聞社訪中国に対し、「もし天皇に中国訪問の御希望があれば、いつでも歓迎する。」（報道）

3. (90. 11. 12) 即位の礼の出席のため訪日中の呉学謙副総理より、（饗宴の儀の開始前に）天皇・皇后両陛下に対し、「楊尚昆国家主席、中国人民に代わり、天皇に御挨拶を送る。天皇・皇后両陛下の御都合の良い時に中国を訪問されるよう招請する。」

天皇陛下は「ありがとう。」と回答。

（呉副総理が我が方接判員に対し内話したところによれば、食後のレセプションで、呉より陛下に英語にて直接、重ねて訪中招請したところ、陛下は「政府が決定するでしょう。」と回答。呉より「具体的なことは今後外交ルートで協議することとしたい。」旨述べた由。）

4. (91. 4. 6) 李鵬総理より、訪中した中山大臣に対し、「中日双方の努力により、この20年間、中日関係は順調に発展してきた。

89年に訪日し、天皇陛下にお会いした際に両陛下の訪中招請したところ、訪中の機会があることを期待しているが、具体的には政府の同意が必要であると言われた。明年は国交正常化20周年でもあり、

天皇・皇后両陛下に訪中していただく好機である。もし訪中されるならば中国人民、日本人民の歴史の傷口を治す上からも、友好関係を強固にする上からも重要である。」

中山大臣より、「李鵬総理の招請の言葉を心にとめて政府として検討させていただきたい。両陛下は即位が終了するまでは外国訪問をされなかったこともあり、外遊日程が立て混んでいる。訪中が実現できれば日中関係が進展するであろう。」旨回答。

5. (91. 4. 7) 銭其琛外相より、訪中した中山大臣に対し、「来年は国交正常化20周年で、一つの重要な年。両国の歴史の中で重大かつ記念すべき年である。20周年の際に天皇・皇后陛下の御訪中が実現すれば極めて意義深いことである。必ずや中国人民の歓迎を受けるであろう。善隣関係の発展を大きく促進するものと考ええる。これまでも中国の首脳が貴国を訪問した際、都合の良い時期の天皇の御訪中を歓迎する旨伝えている。天皇からもそのような機会があればとの発言をいただいている。日本政府が積極的に考慮されることを期待。」

中山大臣より「天皇訪中については政府として今後検討していきたい。」旨回答。

6. (91. 6. 26) 訪日中の銭其琛外相より、中山大臣に対し、「明年の国交正常化20周年には両国の要人の相互訪問を考えたい。中国として天皇・皇后両陛下が明年の御都合の良い時期に訪中されることを大変歓迎する。中国指導者はこれまで何度も天皇陛下の御訪中を招待しており、本件が実現すれば必ずや中国人民の熱烈な歓迎を受けることであろう。中日関係史の上でも大きな出来事になると考えており、子々孫々の友好のための大きな原動力になり、両国の将来にとって大きな影響を与えるものと信じている。日本政府が積極的に考えていただくことを心から希望する。」

中山大臣より「貴部長の発言を注意深く拝聴した。今後政府において十分検討したい。」旨回答。

7. (91. 8. 10) 李鵬総理主催歓迎宴において、李鵬総理より海部総理に対し「本件は、本来会談の席でお話しようと思ったが、日本

側を困らせることは本意ではないので、また、既に本件については銭外交部長よりお話していることでもあり、それは止めた。しかし来年の天皇陛下訪中実現にかける中国側の気持ちは非常に強い。改めてこのことを貴総理にお伝えする。」

海部総理より、「本件については、政府内において引き続き検討を進めて参ることと致したい」旨回答。

8. (91.11.13) ソウルで開催された第3回APEC閣僚会議に際しての日中外相会談の席上、銭其琛外相より、「ハイレベル交流についても20周年にあたり実現したく、既に要請している天皇陛下の訪中につき新内閣で早急に検討を願いたい」旨言及。これに対し、渡辺大臣より、「天皇陛下の訪中については海部総理訪中時の話もあり、新内閣においても中国側希望を踏まえ引き続き検討中。但し、皇室のことなので政府の一存では決められない」旨応答。

9. (91.12.3) 訪日中の田紀雲副総理より、宮沢総理に対し、「中国政府及び人民は、明年の日中国交正常化20周年に天皇・皇后両陛下が訪中されることを期待しており、両陛下が訪中された場合には、必ずや中国人民の熱烈な歓迎を受けるので、総理からも本件を促進願いたい。」

宮沢総理より、「両陛下の訪中についての丁寧な言葉を感謝する。我々としても今後、色々な事情をふまえ検討して参りたい」旨回答。

6. 全見、總談

部分

国会もあるが、閣僚が出席していいか、いいか
 ということは国益の点からみて国内に非常に

大きな影響を及ぼすので、国益優先で今回出
 席させてもらったことは大変良かったと思っている。

○ 総理訪韓

盧泰愚大統領单独表敬において、宮沢総理
 早期訪韓を合意した。

○ 天皇陛下訪中要請

錢其琛中外相より、天皇陛下^の~~も是非~~訪中
~~させよう~~と要請があった。これは持ち帰

り、相談に返すという旨に回答した。

(質疑応答。)

○ 天皇陛下の訪中は検討されているのか。

(訪中するか否か)わかりません。これから話がある。

次官記者会見

渡辺大臣記者懇談

12/2

大政事外外儀官
務務典房
次次
臣官官審審長長

大外査
使研審
博代表

總總(文)會厚情才
括括
審審(入)電在儀警史

外報官
審報内
際外
文長 参一二

領移長
了
審政保对旅外

了
審地(中)原
参北東西
一

北
審一二保地

中
審一二

歐
審西ソ洋
一
西東
二

近
了
参一二アア
一二

經
長
次總經途博
經漁国
一
審經エ国
安ネ二

参海 審準

經協長
審政国開無
参調技有理

条長
審条協規

国長
審政經人
参軍社

科審
科原

情調長
審情析調
審企安

總理大臣秘書官
官房長官秘書官

官房副長官秘書官
外政審議室長

取 扱 注 意
至 急 回 覽

政 務 次 官
事 務 次 官
外 務 審 議 官
外 務 審 議 官
官 房 長
總 括 審 議 官
總 務 課 長
企 画 官
情 報 課 長
企 画 課 長
大 臣 秘 書 官

經 濟 局 長
經 濟 協 力 局 長
条 約 局 長

外 務 報 道 官
文 化 交 流 部 長
報 道 ・ 広 報 担 当 参 事 官
報 道 課 長

国際報道課長
国内広報課長
海外広報課長

一般情報班

(担当 森 内 2679)

大 臣 記 者 懇 談 要 旨

(12月2日)(月)

。天皇陛下の訪中問題

(於 林 閣 議 決 案)

。外交強化懇

。その他

○ 天皇陛下の訪中問題

(問) 天皇陛下の訪中について伺いたい。

(大臣) 前から申し上げている通り、日取りなど一切決って

いない。宮中の話であるし、天皇陛下の方から出かけて
行くという話でもない。何こう(中国)の気持ちも

聞いた上で、宮内庁と相談して決めるという^{でいい。}こと

本件は年内までに決まるものではなく来年になる。

(問) 「この方向(訪中すること)^(でいいのではなか)」というのどういう意味か。

(大臣) ^(中国) 何こうも熱烈歓迎を言っているのだから、
出来ることならそういう方向で、^{いいのではなか} と思っている^{ことだ。}

しかし、(具体的に)働きかける^家はしない。中国側は
そういう(陛下の訪中)提案をしてきているわけ^であり、

握りつぶすわけにもいかないだろう。

(問) 他の国と比べても中国の方がいいのか。

(大臣) 一年365日あるわけだから、一國行ったら他の国

には行かないというわけではな~~い~~。 ~~米田に付いて~~
 (であらう)

~~中国に付いて行かないとか~~ 言うわけではな~~い~~。 ~~米田も~~
 (決まっているわけではな~~い~~) 見(体的)に~~は~~ ~~米田~~ 一切わからない。

~~深達に付いて~~ ~~米田の~~ ~~話に~~ ~~米田~~ ~~米田に付いて~~

○ ~~外交強化懇~~

(問) 報告書通りの実現を指示するのか。

(大臣) 極力、報告書の線を実現するよう、最大限の努力を致す、と言った以上 努力しなければ。
 (はじまり)

(問) 総合政策局など屋上屋 であるとの意見もあるが。

(大臣) 色々あるだろう。
 (はじまり)

(問) 渡辺流に強かに実現させるか。

(大臣) 実現の方向で頑張る。どこ(部署)をどうするか

については、~~仕事の中味に詳しい事務次官を中心とした~~
 スタッフで ~~考えてもらって~~ ~~米田~~ (専門的な仕事の割り
 うにしている)

(仕事の割り ~~にあり~~ ~~米田~~)

1991. 12. 3. (4)

產經 朝刊 (1)

12/3⁵ (i) 陛下の訪中
慎重に検討
外務事務次

外務事務次官

外務省の小和田事務次官は二日の記者会見で、渡辺外相が同日午前の衆院国際平和協力特別委で天皇陛下のご訪中に前向きな考えを示したことについて「中国から正式な訪中要請があり、来年秋が日中国交正常化二十周年ということも承

知しているが、それで（陛下の外遊先の）ひとつの方向がでているわけではない。慎重に検討しているところだ」と述べた。これに関連し、外務省省脳は同日夕、「宮内庁の意見を聞いていないが、中国は熱烈歓迎するといっているのだから天皇陛下は訪中された方がいいと思う」と述べ、来秋の天皇陛下の訪中実現に前向きな姿勢を示した。

次 $\frac{1}{6}$ に $\frac{1}{2}$ を $\frac{1}{2}$
($\frac{1}{2}$)

大正2%選選 (12/2)

西側敵視

和平演説
との闘争

スローガン

④ ⑬

鄧氏が「掲げるな」



鄧小平氏

【香港2日坂東賢治】中国筋が二日明らかになったところによると、中国の最高指導者・鄧小平氏は最近、

共産党指導部に対して西側による「和平演説」(社会主義体制の平和的転覆)工作との闘争というスローガンをこれ以上掲げることとは好ましくないと指示した。米國などを公然と敵視する「和平演説」論が対外関係に悪影響を与え、党内にも

あつれきをもたらしているとの判断からとみられる。同筋によると、指示の内容は「いつまでも和平演説との闘争という論議を続けていても得るところはない。米國の和平演説戦略の重点は依然として欧州(ソ連・東欧)にある。この問

題をめぐる論争をやめ、経済建設に力を注ぐことが最も重要だ」というもの。この指示は十一月二十五—二十九日開かれた共産党中央委員会(第十三期八中全会)の直前に出され、会議の基調にもなったという。会議終了後に出された

「コミニケは国際情勢に翻れておらず、和平演説という言葉も使われていない。ユーゴ・オシエクで激しい砲撃を再開 国連調停難航か

【ウィーン2日高畑昭】ユーゴ・クロアチア共和国のザグレブからの報道によると、クロアチア内戦は一日夜から二日にかけて東部オシエク市を中心に再び激しい砲撃戦が始まった。国連平和維持軍派遣をめぐり年内最後の仲介工作のた

めにベオグラード入りしたフランス国連事務総長特使の調停は難航する見通しとなった。国連による初の停戦合意に基づき戦闘はほぼ小康状態におさまっていたが、停戦の前途ににわかに暗い影を投げている。

12/3
関係
報道振)

中国副首相の 田紀雲氏来日

中国の田紀雲副首相が二日、来日した。六日朝まで東京に滞在し、宮沢首相、羽田蔵相、渡部通産相、野田経企庁長官、田名部農水相、竹下元首相、海部副首相、綿貫自民党幹事長とそれぞれ個別に会談するほか経済界首脳とも懇談する予定。その後、九州、関西に移動し、農業や企業を視察する。外務省と日中経済協会(河合良一会長)の招きで来日した。

「天皇陛下外遊先は いま慎重に検討中」

外務事務次官

外務省の小和田事務次官は二日の記者会見で、渡辺副総理・外相が国会答弁などで天皇の中国訪問実現に前向きな姿勢を示していることに関連して「天皇陛下の外遊先については、いろいろのところについて、いま政府内で慎重に検討している。方向が決まっているわけではない」と述べ、訪中も選択肢のひとつに過ぎないとの立場を強調した。

田紀雲・中国 副首相が来日

中国の田紀雲・副首相が二日午後、成田空港に着の中国民航機で来日した。田氏

は、外務省賓客として十一日まで日本に滞在。宮沢首相、渡辺美智雄外相や財界首脳らと会談する予定。

中国副首相が来日

中国の田紀雲副首相は二日午後三時過ぎ、成田着の中国民航機で来日した。田氏

は、外務省賓客として十一日まで日本に滞在。宮沢首相、渡辺美智雄外相や財界首脳らと会談する予定。

田紀雲中国副首相が来日

中国の田紀雲副首相が二日午後、成田着の中国国際航空機で来日した。外務省

賓客として来日、三日に宮沢首相を表敬訪問するほか、田名部農水相、羽田蔵相、渡部通産相らと会談する予定。十一日に帰国する。

- ◆NY・タイムズ(米) 圧倒的多数が独立支持か——ウクライナ共和国国民投票
- ◆ザ・タイムズ(英) 国民にIRAテロへの警戒を呼びかけ
- ◆ルモンド(仏) ウクライナ独立へ
- ◆ブラウダ(ソ連) ウクライナ、独立国民投票と大統領選挙を実施
- ◆人民日報(中国) 国務院、淮河と太湖の長期治水計画を決定
- ◆朝鮮日報(韓国) 年内の大統領後継者論議は避ける——金泳三民自代表

海外
16
時事
2日

中国投資で提言

JICA

国際協力事業団(JICA)の中国国別援助研究会(座長・大来佐武郎内外政策研究会会長)は新たな対中国経済協力四原則を盛り込んだ中国への援助提言報告書をまとめた。柳谷JICA総裁に提出する。基本原則として掲げたのは①日中友好、世界平和のための協力はするが、軍事面での協力はしない②経済改革、対外開放を支援③経済発展による不均衡の是正④十一億人の人々、広大な国土規模への配慮の四点。

加藤官房長官記者会見

1/7

加藤内閣官房長官・記者会見記録

報道室

1 日時 平成4年1月7日(火) 11:02 ~ 11:08

2 場所 官邸・記者会見室

3 概要

特にこちらからはございませんけれども。

Q 長官。昨日、総理がブッシュ大統領との首脳会談で、自動車その他について具体的な数字を示さなければ駄目だ、というお話をなさったんですけれども。

その具体的な数字というのは決まっていますか。

A ええ、あの、まだ最終的に決まっているという報告も受けておりませんけれども。

あー、それぞれ合野でいろいろ努められていると思います。どの合野で、どういう数字なのか、ということは、詳細に、あの、決めているわけではありませんけれども、五年来に具体的な努力の成果を見えるようにしよう、という意味で総理はおっしゃったと思います。

Q 長官、天皇陛下の中国訪問の時期については現状でどうお考えになっているんですか。

A あ、中国側の招請を受けてそれを前向きに検討しているというわけで、具体的に日数、いつの時期に、というよりは、まだ決まっておりません。

Q 盧泰愚大統領は、韓国がチームスピリットを中止する、というおりに決まっていますか。

今後の、あの朝鮮半島政策、あるいは、また、日本の防衛政策等々についての所見、ご所感は。

A はい、あの、チームスピリットの中止というのは、最新の朝鮮半島を巡る肯定的ないらんを動かすに沿って出されてきたもの、決定されたものと思っております。我々としても、この動きを歓迎したい、と思っております。それで、また、北朝鮮がIAEAの、あの、協定に署名するということも明らかになっているように思われますけれども、我々としては、これが署名、批准、完全履行になっていくことを是非期待したいと思っております。

こういう大きな動きを朝鮮半島を巡る動きというのは、日本の防衛政策にとって、また、肯定的な影響を及ぼすものだと思います。

北東アジア全体を巡る緊張緩和に対して非常に大きなステップになり得るものだと評価したいと思っております。

久、中国との意見交換等

APEC
2009
日中外相
会谈

11/13

注意

1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線2171、2174）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線3169）に連絡ありたい。

電信写

08-058

因 政軍の外務
大務務 典房
臣秘官官審審長長

印経國 査察 外研
大大ア 察括 長
使使大 審審

口対文会厚情研
察人團在(警史オ

報官 内外

審二

参政保对旅外

審二西

審二保地

参一二

審西の洋
西東

参一二アア
一二

次総経途
審経漁国
エ国
安ネ二

審海 審準

審政国開無
参調技有理

審条協規

審政経人
参軍社

科原

審調
安

総番号 R227566

主管

月 13日

韓 国 発

亜 中

平成 3年 11月 13日

本 省 着

外務大臣殿

柳 大 使

APEC閣僚会議（日中外相会談）

第4505号 秘 至急（ゆう先処理）

13日、午前7時30分より約1時間、朝食をはさんで本大臣とセン・キシ中国外交部長との会談が行われたところ、右概要次のとおり（双方出席者別FAX信）。

1. 冒頭セン部長より本大臣就任に対するしゆく意が述べられたのに次いで、本大臣より、今般中国、台湾、ホンコンのAPECへの正式参加はアジア・太平洋地域のダイナミックな経済を21世きに向け発展させていく上で画期的かつ重要なことである旨述べた。

2. セン部長は右に同意しつつ、これにより同地区の経済発展のみならず政治の安定にも寄与することとなり、共同の努力を続ければ前途は明るい旨、また中国の参加はその改革・開放政策の継続と拡大を示すもの、この中で日中間の協力は重要な意義を持つ旨述べた。

3. 日中関係に関連し、セン部長は先般の海部総理訪中を高く評価するとともに、ミヤザワ新内閣におかれてもこれまでの両国指導者間の合意している方針で日中関係を進めていただきたい旨希望した。右に対し本大臣より明年国交正常化20しゅう年において官民挙げた記念行事を行いこれを盛り上げていきたい旨、またイトウ・マサヨシ氏を会長とする日本側民間組織が設立されたところ右に対応する中国側カウンターパートを設立し両者間で連絡・調整をされるよう希望する旨述べた。セン部長は本大臣の上記考え方に同感であるとしつつ、ハイレベル交流についても20しゅう年にあたり実現したく、既に要請しているてん皇へい下の訪中につき新内閣で早急に検討を願いたい旨、また中国側としてはコウ・タクミン総書記訪日という方向で検討中である旨述べた。このほかセン部長は、ミヤザワ総理及び本大臣の訪中もかん迎する旨述べた。本大臣より、てん皇へい下の訪中については海部総理訪中時の話もあり、新内閣においても中国側希望をふまえ引き続き検討中、ただし皇室のことなので政府の一存では決められない旨応答し、本大臣の訪中について

電信写

は機会を見て実現したく時期については相談して参りたい旨述べた。またこれらと関連して本大臣より国際交流基金北京事務所開設につき中国側の協力を要請したところ、先方は右は目下関係部門で検討中である旨応答した。

4. 米中関係について、本大臣より先日のペーカー長官との会談に触れつつ、同長官は米中関係改善に大きな情熱をもっているが、米国議会には人権、武器輸出、核技術移転等をめぐり厳しい空気があることも事実。今次ペーカー訪中において米側ときたない意見交換を行われ、米国（特に中国の良き理解者であるブッシュ大統領）の対中政策が進めやすいようにされることを希望。日本としても米中関係の良否はわが国に対し大きく影響を与えることからこれを重視。日本としてお役に立つことがあればはし渡し等行うのでえん慮なく言つてほしい旨述べた。セン部長はわが国の米中関係に対する関心は十分理解できるものであるとし、中国側としても今次ペーカー訪中に大きく期待しており、その準備のため自分（セン）も同長官と2回会談している。いずれにせよ今次訪中の成功を希望している旨述べた。

5. NPTに関し、本大臣より先般海部総理訪中時に中国がNPT加入を表明したことを高く評価し、本件加入の国内手続きの進展状況を質したところ、セン部長は本件については現在全人代での手続きが開始されており、順調に行けば年内に手続きが完了する見通しであるが、もち論各代表には理解不足や反対意見の者があり調整が必要である旨応答した。

6. 北朝鮮の核査察受け入れについて本大臣より中国から北朝鮮に対し右受け入れ方働きかけを行つてほしい旨希望したのに対し、セン部長は本件については自分（セン）が北朝鮮を訪問した際にもある程度働きかけをした。従来北朝鮮は米の朝鮮半島への核持ち込みを懸念していたが先般のブッシュ提案により確かに状況は変化している。中国としても北朝鮮への働きかけを行うことについては同意するが、それが「国際的圧力」となつてはかえつて事態を複雑化させる旨述べた。またセン部長はこれに関連し日朝交渉の進展を希望したので、本大臣より最大の問題はやはり上記核査察及び北朝鮮の核製造工場の存在でありこれが解決すれば日朝交渉の進展にも大いに役立つ旨述べた。

7. MTCRに関し、本大臣より中国がMTCRガイドラインをじゅん守し、輸出規制に関し具体的措置をとるよう希望したところ、セン部長は本件は国連常任理事国間の協議をふまえ各方面が努力している。中国としてはかかる努力により全ての国が守ることのできる、全面的かつ合理的な解決を得られるよう希望する。

電信写

これには生物・化学兵器を含む大量破かい兵器及びこれらのはん送手段（航空機、ミサイル等）の制限を含むべきものとする旨述べた。

8. 通常兵器の国際移転の国連とう録制度につき本大臣より、日・EC（英、仏を含む）は共同で決議案を国連総会に提出済みで、米・ソもこれに積極的支持を与える意向を表明している。中国も常任理事国として共同提案国となることも含め前向きに検討願いたい旨述べたのに対し、セン部長は本件決議案については国連において修文等が加えられるなど検討が進んでいると承知。中国としては原則的には反対しない。ただし提案国となるか否かは更に検討を要する旨述べた。

中国5公館、米、国連、軍代に転電した。（了）

徐敦信 外交部訓導長

11/20

file 程中 注意

1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線2171、2174）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線3169）に連絡ありたい。

電信写

04-028

極秘

因 政 務 典 房
大 務 務 典 房
臣 秘 官 官 審 審 長 長

北 経 環 査 総 外
大 大 ア 察 括 研
使 使 大 審 審 長

口 対 文 会 厚 情 研

察 人 在 警 史 オ

外 報 官 参 報 際 内 外

文 長 審 一 二

長 参 政 保 対 旅 外

東

長 東 西 一

米 長 二 保 地

中 南 長 参 一 二

欧 審 西 ソ 洋 二 西 東 二

長 参 一 二 ア ア 二 二

次 総 経 途

長 審 経 漁 国 二 経 エ 国 安 ネ 二

審 海 審 準

長 審 政 国 開 無 参 調 技 有 理

長 審 条 協 規

国 長 審 政 経 人 参 軍 社

科 審 科 原

情 調 長 参 情 析 調 企 安

総 番 号 R 2 3 3 5 1 5

主 管

月 2 0 日

中 国 発

亜 中

平成 3 年 1 1 月 2 0 日

本 省 着

外 務 大 臣 殿

橋 本 大 使

日中国交正常化20しゅう年要人相互訪問（ジョトンミン外交部副部長とのこん談）

第4314号 極秘 至急（ゆう先処理）

20日、国交正常化20しゅう年の要人相互訪問につきジョトンミン外交部副部長の求めによりこん談したところ、概要次の通り。

1. 冒頭、ジョ副部長より次の通り発言。

（1）国交正常化20しゅう年の要人訪問につき非公式に意見交換をしたい。現在中国側では党・政府首のうの明年の外ゆうスケジュールを作成しているところであるが、中国側の首のうとしては来年はゆう先的に日本を訪問したいとの考えである。

（2）センキシン外交部長はワタナベ外務大臣との会談の場で、中国側はコウタクミン総書記の訪日を考えている旨申し上げた。要人ということになれば、総書記、総理、国家主席、全人代委員長ということとなるが、実質的な意味あいを考慮する必要があるところ、バンリ委員長の訪日は決まっており、また、リホウ総理は既に訪日したことがあるので、自然にうかんだのは総書記の訪日である。

（3）（総書記と国家主席の2人の訪日の可能性はあるかと問うたところ）

バンリ委員長の訪日が既に決まっていることを考えると合計3人の要人が明年中に訪日するというのはツーマッチだと思える。

国家主席の訪日はてん皇の訪中と関連して考える必要があると思う。中国側としてはてん皇の訪中が決まっていなない現段階では主席の訪日は考えていない。

（4）コウ総書記の訪日時期については、もし日本側がよしとするのであれば、明年上半期としたいと考えているが、その場合バンリ委員長の訪日日程との調整を行う必要があろう。同じ月に、また一カ月くらい前後しての訪日は不自然であらう。これについての日本側の考えをうかがいたく、あわせ日本側よりどなたか

外 務 省

電信写

何時ごろ訪中されるお考えなのかも承知したい。

2. 右に対し、本使より次の通り述べた。

(1) コウタクミン総書記の訪日の時期については早速日本政府の都合を問い合わせるが、バンリ委員長
の訪日と同じ時期にたくないという中国側の考えは理解できるので、22日訪中するサクラウチ議長とも
相談するつもりである。また、明年一ぱいということになれば、ミヤザワ総理の訪中もあり得ない訳ではな
い。

(2) 従来から中国側が強く望んでいるてん皇御訪中の問題については、自分の理解する限り、政府部内に
おける決定はいまだ行われておらず、かねがね説明しているとおり、韓国の問題もあり、また、御訪米の問
題もあつて最終決定には今後なお時間がかかると思う。

3. 本使より、中国要人の訪日については総書記の訪日が最も重要であると考えられるので、まず日中双方
で総書記訪日の時期を確定し、その結果バンリ委員長の訪日時期を確定することとすべきではないかと述べ
た。右に対し、ジョ副部長は、同感の意を表明し、バンリ委員長の訪日が日本側の御意向で4月ない至5月
ということになつているが、もし、日本側で総書記の訪日時期をこの時期にしたいといわれるのであれば、
委員長の訪日時期を変更し、例えば2月というラインで部内の調整工作を進めたいと述べた。

4. なお、先方はてん皇及びミヤザワ総理の御訪中を重ねて強く要望し、何月と言えないまでも明年前半あ
るいは後半ということでもよいから御教示願いたい旨要請越した。

5. ついては、本件につき早急に御検討たまわりたく、何分のき感触なりとも御回示願いたい。(了)

GB-3

(三八〇字)

のとれたものであつて、弱国やあまり
 武器を輸出してゐない国を制限するのはな
 く、まずはじめに武器輸出大国に制限を加へ
 べきであつてと考へてゐる。武器輸出大国の
 第一は米、次はソ連であり、中国はそれ程大
 きな輸出国ではない。それにも拘らず、中国
 は国際社会が合意に達すれば、それを厳しく
 順守する用意がある。又、核兵器の問題に
 ついては、中国は従来より厳格かつ責任ある立
 場をとつてきており、核兵器の拡散防止に核
 開発に協力しないとの義務を今後負つてい
 く所存である。なおNPT条約については、
 現在国内的に加入手続を進めていゝところ
 である。

早急に加入したいと考へてゐる。

最終に、次の点に言及する。

田副総理より、

(1) 中国共産党は最近、中金会を開催した。その結果、全面的、系統的かつ十分に改革を中国の農村に実施せしめてきた改革、開放政策が肯定された。また、中国の農村への改革

(三八〇字)

は今後もしも段々実施され、^{更に}農林^{漁業}及び農産品の
の価格を自由化し、市場経済と^{拡大し}ていくこ
ととなった。

(2) ~~中国の~~ 中国のカットでの締約国
の地位回復に^{ついで}して、日本側の支持と
得たい。

(3) 前述の農業借款に^{新規}ついては、従来の円借
の枠外で追加でもなりかとの話であり、さう
に総理より御返事を頂けなくとも事務しだい
ルでの検討をお願いしたい。

(4) 中国政府及び人民は、明年の日中国交正
常化20周年に天皇、皇后両陛下が訪中され
ことを期待しており、両陛下が訪中される場
合には、必ずや中国人民の熱烈な歓迎を受け
るので、総理からも本件を促進願いたい。

(以上に対し、官沢総理より、上、(2)、(3)に
ついてはよく検討させたい旨述べ、(4)に
ついては、)

~~両陛下の訪中について~~ 両陛下の訪中について丁寧
な言葉を感謝する。我々としても ~~今後~~ 今

(三八〇字)

後、色々な事情と検討して参りたい旨回答。
 更に李鹏総理に答へも宜しくお伝え願いたい
 旨述べ、会見を終了した。)

(3)

1981.12.3

大	政務次官	典房
臣	官官審長	長
大外	査察使	博代表
使研	容	表
総括	対文全	厚情オ
括	審察人	電在(偽)警史
外報	官	参一
文	参一	二
領	審政保	対旅外
一		
一	参一	二
長	参一	二
北米	審	二保地
中南	長	参一
欧	審西ソ	洋
長	二	西東
一	参一	二アア
一	参一	二
長	次総経途博	経通(国)
	参経エ	国安二
	参海	審準
経協	長	密国開無
	参調技	有理
条長	審条協規	
国	審政経人	
長	参市社	
科密	科原	
情調	長	審情析調
		企安

田代雲 中国副総理の官次総理との会談

(梅井中国評議の対応者より)

91.12.3

中国課

会談の()は 9:45am. から 約1時間 行われた。

主なポイントはこの通り。

(官次で)

1. 李朋島総理親書

田副総理より、李朋島総理の官次総理宛親書と手交。内容は、
① 明年の20周年に際しての官次総理の訪中依頼、②

官次総理は中国の旧い人であり、有名な政治家であり、官次総理の為に日中関係は必ず改善されることと期待、確信
している旨表明していた。

これに対し、
官次総理より、訪中依頼に感謝、李朋島総理に呉くも宜しくと述べた。

この関連で、田副総理より、官次総理が就任直後、
中国の改革・開放政策を支持する旨発言したことに対し、中国は心

より感謝している旨述べたところがあった。

2. 天皇訪中

田代総理より、天皇、皇后両陛下が明年の日中国交正常化20周年に訪中されることを期待する旨、又、本が実現されれば、

必ず中国政界、人民の熱烈な歓迎を受けようこととなる、この点、宮沢総理におかれても訪中の実現と促進願いたい旨発言あり。

宮沢総理より、かみはぬいごうな招待と心より感謝する旨述べ、本件については色々な事情を踏まえ、よく検討したい旨発言した。

3. 農業協力

田代総理より、中国は農業、農村政策を大変重視している旨の説明があり、それとの関連で、現在日本がOECFを通じて供与

している円借款の枠外として「農業開発基金の優遇借款」の供与の可能性につき検討されることを期待する、かみは農業面の協力は

日中間の貿易を拡大し、協力の規模の拡大と推進していく上で大変重要なので、総理の配慮を得たい旨述べた。

天皇陛下の訪中招請

宮沢首相に(1)
中国副首相(2)

宮沢首相は三日午前、官邸で、来日中の田紀雲中国副首相と会談した。田副首相は天皇、皇后両陛下の訪中を招請したほか、農業開発を対象にした新たな円借款を要請、日中、米中関係

正式に招請した。首相は「いろいろな事情を踏まえ、いろいろな事情を踏まえ、円に上る第三次円借款の枠外として農業基金借款の検討を要請。日中間の貿易拡大へ協力求めた。これに対し、首相は訪中の李鵬中国首相からの親書招請への感謝を表明した上

で、あらたな借款については「第三次円借款の組み替えをするのかどうかを含めて事務レベルで話をしている」と応じた。また首相は先のベーカー米國務長官訪中を踏まえ、米中関係の進展に期待を表明。田副首相は「米中両国間には基本的な利害の対立する問題はないと思う」と述べ、同長官訪中を「両国関係改善への重要なステップだった」と評価した。

またこの後、田副首相は同日午前、都内の事務所に竹下元首相を訪ね、約三十分会談。竹下氏の訪中を招請する李鵬首相の親書を手渡し、日中国交正常化二十周年にあたる来年に天皇、皇后両陛下の中国訪問実現に尽力を要請。これに対し竹下氏も「訪中されれば非常にいい、というのは政府も同じ気持ちだ」と述べ、政府が具体的に日程調整に着手していることを示唆した。

両陛下訪中を招請

中国副首相が首相と会談

来日中の田紀雲副首相は三日午前、首相官邸で宮沢首相と約一時間会談した。宮沢首相は誕生以来、首相と中国首脳クラスが会談するのは今回が初めてで、席上、田副首相は、日中国交回復二十周年に当たる来年の天皇、皇后両陛下の中国訪問を正式に招請した。【関連記事3面に】会談の中で田副首相は「両陛下の中国訪問は必ずや中国の人民から熱烈な歓迎を受ける。促進してほしい」と述べた。首相は「招請を心から感謝する。よく検討したい」と、前向きに検討する意向を示した。田副首相はさらに、宮沢首相の来年中の訪中を招請する李鵬首相の親書も手渡し、首相も、感謝の意を表明した。また田副首相は、現在の日本政府の円借款とほぼ同等で、「農業開発基金借款」(仮称)の検討を要請した。これに対し首相は、事務レベルで検討していく考えを伝えた。

天皇陛下訪中 来年実現を要請

田副首相、首相に

宮沢首相は三日午前、中国の田紀雲副首相(共産党政治局員)と官邸で約一時間会談した。この中で田副首相は、宮沢首相の訪中を

招請する李鵬首相からの親書を手渡しとともに「日中国交正常化二十周年の来年、天皇・皇后両陛下が訪中されることを期待する」と実現を要請した。また田副首相は第三次円借款(九〇―九五、計八千億円)の枠外で、新たな農業優遇借款として「農業開発基金借款」を検討するよう要請した。

竹下氏とも会談

中国副首相

中国の田紀雲副首相は三日午前、都内の事務所を訪ね、首相と会談し、天皇、皇后両陛下の中国訪問を招請する意向を伝えた。田副首相は「日中国交正常化二十周年の来年に訪中していただければ熱烈かつ友好的なおもてなしをしたい」と述べたのに対し、竹下氏は「適当な時期を政府が検討しているのではないかと、実現の見通しを示した。」



中国の田紀雲副首相(左)と会談する宮沢首相―首相官邸で

12/3 (7期)

中国関係

報道振)

注意

1. 本電の取扱いには慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線2171、2174）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線3169）に連絡ありたい。

電信写

08-035

大 政事外外儀官
大務務 典房
臣秘官官審審長長

①経②査 外
大③大 大 研
使使大 察 長
審審審 審 長

③口対文会厚情研
察人④在儀警史オ

④報官 参報⑤内外

文長 審一二

④長 参政保対旅外

④④④④
④④④西
長 一

④米長 審①二保地

中南長 参一二

④ 審西⑦洋
一
西東
一

④ 参一二アア
一 二

④ 参一二アア
一 二

④ 次総経途
一
審経漁国
一
経エ国
安ネ二

④ 密海 密準

④ 審政国開無
一
参調技有理

④ 審条協規

④ 審政経人
一
参軍社

④ 科原

④ 参④紛調
一
④安

総 番 号 R 2 4 3 9 0 2

主 管

月 4 日

中 国 発

重 中

平成 3 年 1 2 月 4 日

本 省 着

外 務 大 臣 殿

橋 本 大 使

日中関係（4 日付人民日報報道振り）

第 4 4 8 8 号 至急（ゆう先処理）

（以下 F A X 送信 PK 7 8 5 8 - 0 2）

PK7858 /

4日付人民日報等の日本関係記事要旨以下の通り。(末尾()内は掲載面)

(1)「李端璽、日本の客人と会見」《人民日報》

中共中央政治局の李端璽常務委員は、3日午前、日中文化交流協会の代表理事で著名な作曲家である団伊玖磨率いる同協会代表団と会見した。李端璽は、同協会が長年にわたり中日両国人民の友好促進、特に、両国の文化交流事業の発展のために行ってきた努力に対して賞賛の意を表するとともに、中日双方が文化交流に関し、共通の関心を有する協力分野をさらに拡大することを希望した。(1)

(2)「宮沢首相、田紀雲副総理と会見」《人民日報》(別FAX信)

宮沢首相は、3日午前、首相官邸で田紀雲副総理一行と会見し、友好的な雰囲気の中で、両国関係及び共通に関心を有する問題について意見を交換した。

会見中、宮沢首相は田副総理の来訪に対し歓迎の意を表明し、田副総理は宮沢氏の首相就任に対し祝辞を述べた。田副総理は、「宮沢首相は中国人民の良き友人、名前の知られている政治家であり、中日の友好協力のために重要な貢献をされた」と述べ、宮沢首相の在任期間中に、中日関係がさらに大きく発展することを確信している旨を表明した。田副総理は、宮沢首相に李鵬総理が同首相に宛てた親書を手渡した。李鵬総理は、親書の中で、宮沢首相が適当な時期に訪中するよう招請し、宮沢首相は李鵬総理の招請に対し感謝の意を表明した。

田副総理は、宮沢首相に中共13期8中全会の状況を紹介し、「今回の全会において、農村改革の基本政策は全面的に肯定され、今後とも農村改革を継続的に推進する必要がある。今回の訪問を通じ、日本政府及び経済界の人士と、中日両国の農業分野の協力を如何に強化するかという問題について検討したい」と述べた。

会話の中で、宮沢首相は、中国は現在まだ幾つかの困難を抱えているが、指導者がしっかり改革開放政策を堅持していることに対して感服している旨を表明した。

田副総理は、「中国の政府と人民は、中日国交正常化20周年に当り、明仁天皇と皇后が訪中されることを歓迎する」と述べ、宮沢首相は中国側の招請に感謝の意を表明した。

米中関係に話が及んだ際に、田副総理は、「中国は米中関係の発展に対して積極的な態度を持っており、平和共存5原則及び米中共同コミュニケの基礎の上に立って、協力関係を発展させたい」と述べた。

田副総理は、本日、桜内義雄国貿促会長、竹下登前首相、平岩外四経団連会長、河合良一副会長、羽田孜大蔵大臣、田名部匡省農林水産大臣、渡部恒三通産大臣等の人士をそれぞれ訪問した。(6)

(3)「日本衆議院派兵法案を可決、審議期間中様々な反対活動」《北京日報》

日本国会衆議院は、3日午後本会議を開催し、国連平和維持活動協力法案と国際緊急援助隊派遣法修正案を可決した。

国連平和維持活動協力法案は自衛隊の海外派遣を趣旨としているため、人々は派兵法案と称している。3日の会議では、記名投票方式による表決が行われ、社会党、共産党、民社党等の野党が反対に票を投じたが、自民党と公明党が衆議院において多数の議席を占めているため、派兵法案は可決され、参議院へ送付された。

国会で派兵法案が審議されている間、全国各地で労働者、学生、婦人、僧侶等がつぎつぎと集会、デモ、座込み、署名等により、日本政府が憲法に違反する派兵法案を制定したことに対する強烈な反対活動を展開した。(4)

別FAX付と矢(2)
香港に転電した。(了)

天皇陛下

FAX信

総番号 R243904

月 4日

平成 3年 12月 4日

中国 発着
本省

主管
亜 中

外務大臣殿

橋本大使

日中関係（4日付人民日報等報道振り）

FAX信 至急

（以下FAX送信 PK7859-0.1）

PK7859

往電第 4488 号別FAX信

宫泽首相会见田纪云副总理

就两国关系和共同关心的问题交换意见

本报东京12月3日电 记者于霄报道：日本首相宫泽喜一今天上午在首相官邸会见了田纪云副总理一行，在友好的气氛中，双方就两国关系和共同关心的问题交换了意见。

会见中，宫泽首相对田纪云副总理来访表示欢迎，田纪云副总理祝贺宫泽就任日本首相。田副总理说，宫泽首相是中国人民的老朋友、知名的政治家，为中日友好合作做出了重要贡献。他表示相信，在宫泽首相任职期间，中日关系能够取得更大发展。田副总理向宫泽首相转交了李鹏总理写给宫泽首相的信，李鹏在信中邀请宫泽在适当的时候访华，宫泽首相对李鹏总理的邀请表示感谢。

田副总理向宫泽首相介绍了中共13届中全会的情况，田纪云说，这次全会全面充分肯定了农村改革的基本政策，今后要把农村改革继续进行下去，他希望通过这次访问，能同日本政府和经济界人士探讨如何加强中日两国在农业方面的合作问题。

在谈话中，宫泽首相表示，中国目前虽然还有一些困难，但中国领导人扎扎实实地坚持改

革开放政策，他本人对此钦佩。

田纪云副总理说，中国政府和人民欢迎日本明仁天皇和皇后在中日邦交正常化20周年之际访问中国，宫泽首相表示感谢中国方面的邀请。

谈到中美关系时，田纪云说，中国对发展中美关系持积极态度，愿意在和平共处五项原则、中美联合公报的基础上发展合作关系。

今天，田副总理还分别拜会了日本国际贸促会长樱内义雄、日本前首相竹下登、日本经团联会长平岩外冈和副会长河合良一、大藏大臣羽田孜、农林水产大臣田名部匡省、通产大臣渡部恒三等人士。



田記雲朝日イニシムル心と邊上外相地元癸言

(對外ニ応答重鎮)

注意

1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線2171、2174）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線3169）に連絡ありたい。

電信写

08-035

大 政事外外儀官
大 務務 典房
次次
臣秘官官審審長長

①②③ 査総 外
大 大 ア 察括 研
使 使 大 審密 長

④⑤ 対文会厚情研

察人⑥在儀警史オ

⑦ 報 官 参報⑧内外

文 長 審一二

参長 参政保対旅外

⑨⑩⑪⑫

長 ⑬⑭⑮⑯

⑰ 米 長 審⑱二保地

中 南 長 参一二

⑲ 番 西 ⑳ 洋

西 東

近 了 長 参一二アア

経 途 次総経途

密経漁国

経エ国

安ネ二

審海 審準

経協長 審政国開無

参調技有理

⑳ 長 審条協規

国 審政経人

長 参軍社

科 審 科原

㉑ 調 長 参㉒㉓調

㉔ 安

総 番 号 R 2 4 2 8 7 5

月 3 日

平成 3 年 1 2 月 3 日

中 国 発

本 省 着

主 管

重 中

外 務 大 臣 殿

橋 本 大 使

日中関係（てん皇皇ごう両へい下御訪中：報道）

第 4 4 7 9 号 至急（ゆう先処理）

3 日付当地英字紙「チャイナ・デイリー」は東京発でデンキウ副総理の訪日に関連して、「ワタナベ外務大臣が昨日、「日本政府は日中国交正常化 2 0 しゅう年を記念しててん皇皇ごう両へい下の来秋御訪中を考慮している」と発言した」旨報じているところ、右記事を別 F A X 信申し上げる。

中国 4 公館（別 F A X 信は転報）に転電した。（了）

3
FAX信

総 番 号 R242877

月 3日

平成 3年 12月 3日

外 務 大 臣 殿

中 国 発
本 省 着

橋 本 大 使

主 管

亜 中

日中関係

FAX信 至急 (ゆう先処理)

(以下FAX送信 PK7845-01)

11.4429

(三八〇七)

Economics tops talks in Tokyo

TOKYO (Xinhua) — Chinese Vice Premier Tian Jiyun, heading a 15-member government delegation, arrived here yesterday afternoon on a 10-day official visit to Japan.

It will be the first visit by a high-level Chinese Government delegation since Japanese Prime Minister Kiichi Miyazawa came to power early last month.

Tian, who is in charge of China's external economic and agricultural affairs, will hold talks with Miyazawa and a number of incumbent and former Japanese officials. He will also meet business leaders, and tour several cities.

Before the delegation leaves Tokyo on December 6, Tian is scheduled to deliver a speech on the current situation in China and China's view on its relations with Japan.

Meanwhile, Japanese Foreign Minister Michio Watanabe said yesterday that the Japanese Government would consider a visit by Emperor Akihito and Empress Michiko to Beijing next autumn to mark the 20th anniversary of the restoration of diplomatic relations between the two countries.

(17)

5

※総第 21866号005公館宛

平成 3 年 12 月 2 日 12 時 43 分 秒 受付

電 信 案

印 主
Y — Y

電信課長

大臣 秘書官 政務次官 事務次官 外務審議官 外務審議官 官房長	主管 中国課長 首席事務官	※発電係 起案 平成 3 年 12 月 2 日 起案者 電話番号 泉 2426
協議先		

(注意) 1 枚目は、機械で処理しますので、折り曲げない様願います。

(八〇字)

在 中国	天 使 総領事	あて	外務大臣 発
件 名 天皇陛下の御訪中 (対外応答要領)			
主管・文書記号 亜 中	※電番 第 3 5 7 9 号	大至急 普通 (優先処理)	パターン・コード [REDACTED]
転電 転送 在 香港 [REDACTED] 瀋陽、上海、杭州	※転電番号 合第 2 2 3 5 4 号	大至急 普通 (優先処理)	大使・総領事あて
※			
12186618 優先 TYUUGOKU 等005 漢			

GB-1

外 務 省

回覧番号 1262

(※印欄内は電信課記入)

(昭和六三・六・三十改正)

(三八〇字)

標記に因り、対外応答要領以下の通り。

問、1日付本邦各紙（朝刊）によれば、2日訪日予定の田紀雲中国國務院副総理は重ねて天皇陛下の訪中を招請する趣であり、又、渡辺副総理兼外務大臣も、明年の日中国交正常化20周年の折に天皇陛下が訪中されるよう前向きに検討中である旨述べているところ、外務省の考え方如何（関連記事別）。

(FAX送)

答、本件については、中国側からの重ねての招請を踏まえつつ、政府内において引き続き検討を進めているところである。

（更問、検討状況は「前向き」ということか。）

答、中国側からの重ねての招請を踏まえて、検討を進めているということである。

（更問、田副総理より天皇訪中について重ねて招請ある場合、前向きの回答を行うのか。）

答、仮定の質問にはお答えできない。

（これ以上の問に対して）

答、検討中の段階であり、事柄の性質上コメントは差控えさせて頂きたい。

別FAX送といたし、に標記し、本電の対

本電のみ香港、上海、瀋陽、広州に転

電した。

(3)

GM:6430-01

※総第21867号002公館宛 GM6430-04

平成 16 年 12 月 2 日 午後 2 時 48 分 日 秒 受付

電 信 案

FAX

電信課長

大臣 秘書官 政務次官 事務次官 外務審議官 外務審議官 官房長	主管 中国課長 首席事務官	※発電係 1 2
		起案 平成 3 年 12 月 2 日 起案者 泉 電話番号 2426
協議先		

(注意) 1枚目は、機械で処理しますので、折り曲げない様願います。

(八〇字)

在 中国	大使館 総領事	あて	外務大臣 発
件 名 天皇陛下の御訪中 (対外応答要領)			
主管・文書記号 亜 中	※電番 FAX信	大至急 普通 (優先処理)	パターン・コード
※電 転送 在 西 港 転報 済 港 上海 云々	※転電番号 FAX信	大至急 普通 (優先処理)	大至急 普通 (優先処理)
往電亜中才3579号別FAX信。			
※			
2186731 優先 TYUUGOKU 等002 F信			

GB-1

外 務 省

回覧番号

1262 FAX

(※印欄内は電信課記入)

(昭和六三・六・三十改正)

GM:6430-02

12/2 14 渡辺外相

天皇訪中前向きに

渡辺外相は二日前の衆議院
際平和協力特別委員会で、中国
が日中国交正常化二十周年にあ
たる来年の天皇陛下訪中を招待
していることについて「国交正
常化二十周年の節目ということで
(中国側の)気持ちもよくわか
るから、そういう方向で話して
みるのがいいのかなあという感
じをもっている」と述べ、訪中
実現に前向きな考えを示した。
沢藤礼次郎氏(社)への答弁。

12/2 14 渡辺副総理

来年中の天皇陛下
訪中に前向き答弁

渡辺副総理・外相は二日
のPKO特別委で天皇訪中
について、「中国からぜひ
訪中してほしいという話
があって、(来年が国交)正
常化二十周年の節目である
という気持ちも分かるの
で、できることならそうい
う方向でお話してみるのが
いいのかなあ、という程
度の感じは持っている」と
述べ、九二年中の実現に前
向きな姿勢を示した。沢藤
礼次郎氏(社会)の質問に
答えたもの。

中国・田副首相

あす訪日控へ会見

GM:6430-03

12/1 ④

天皇訪中を再招請

【北京30日＝横堀克己、和気靖】中国の田紀雲副首相（共産党政治局員）は三十日、北京の人民大会堂で朝日新聞記者と会見した。田副首相は十二月二日から、宮沢政権が誕生して以来迎える初の中国首脳として訪日するが、宮沢首相との会談で天皇陛下の訪中を改めて招請することにも、これまでの対中経済協力とは別枠で中国の農業開発を対象とした新たな円借款の提供を要請することを明らかにした。

田副首相は、外務省と日中経済協会の招きで日本を訪問する。李鵬首相からの宮沢首相への親書を携え、来年の日中国交正常化二十周年の記念行事などについて具体的に話し合う。天皇陛下下の訪中について、田副首相は「中国政府として、すでに招請しているが、宮沢首相に会って、中国側が心から訪問に期待している気持ちを重ねて伝えたい」と述べ、国交正常化二十周年の来年中の訪中に強い期待を表明した。



朝日新聞記者と会見する田紀雲副首相
＝30日、北京の人民大会堂で、和気靖写す

中国政府で、農業と対外経済貿易分野の責任者である田副首相は、「今回の訪日の具体的な目的は、両国の農業分野での協力を拡大することにある」と表明。日本政府に対し、これまでの円借款や資源開発ローンとは別に、「農業開発ローン」の形で農業に的を絞った協力を求める考えだ。田副首相は「農村の発展と安定は中国の基礎であり、日本の支援を期待したい。ロインが実現すれば波及効果は大きく、日本に対する農産加工品や野菜、大豆などの提供も拡大できる」と日中双方の利益になることを強調した。

また八中全会で農業重視が決まったことも、農業ロイン要請の背景となっているとみられるが、田副首相は農業重視について「中国の安定と発展は農村にかかっている、この認識からだ」と説明。会議で「農民が土地経営の自主権を得た八〇年代の農村改革を全面的に肯定する一方、一農家だけでは解決出来ない、水利や科学応用、産品販売などの分野で集団経済の力を利用する方向が決まった」と紹介した。今回の日本訪問では農協を見学して「農村部の社会的サービスシステムを確立する参考にしたい」と語った。

農業開発円借款 要請へ

12/1

天皇訪中関係

報道振り

GM:6430-04

国交回復20年目
天皇訪中実現を

① 渡辺外相
渡辺副総理・外相は三十日、宇

都宮市内のホテルで記者会見し、
天皇陛下の訪中問題について「(中
国は)来年、天皇陛下にきてもら
いたい」と言っており、そういう
方向がいいのではないかと考えて
いる。過去のことは言わずに前を
向いた関係を作っていきたい」と
述べ、来年の日中国交回復二十周
年を機に天皇陛下の訪中を実現す
べきだとの考えを示した。

② 両陛下の来年
訪中望ましい
渡辺外相

渡辺美智雄外相は三十
日、日中国交正常化二十周
年にあたる来年、天皇陛下
が中国を訪問されるよう中
国側から招請があることに
ついて「中国は昔のことは
言わず、一つの区切りにし
たいと言っている。宮内庁
は返事をしていないが、私
はそのほうがいいと思う」と
述べ、天皇、皇后両陛下
の来年の中国訪問が望ま
しいとの見解を表明した。
政府は今年九月から十月
にかけての両陛下の東南ア
ジア諸国連合(ASEAN)
三か国歴訪に続く、来年の
海外訪問先の検討を進め
ており、中国のほか西欧、
韓国などが候補に挙がっ
ている。政府内には中国に
ついては、同じアジア地域の
ご訪問が続くこと、同地域
では韓国との関係もあるこ
となどから消極論もあり、
具体的調整にはなる時間
がかりそつだ。

③ (1) 天皇訪中を
前向き検討
渡辺外相

渡辺外相は三十日、宇都宮
市内で開かれた会合で講演
し、来年の中国との国交回復
二十周年に天皇陛下の中国訪

問を検討していることを明ら
かにした。
渡辺外相は「中国は天皇に
来てもらいたいといっている
ので、その方向で考えてい
る。過去のことは言わずに、
前を向いて関係をしっかりと
くつていきたい」と述べた。

(対外応答要領)

天皇陛下の中国御訪問

平成3年12月2日

中国課

問、1日付本邦各紙（朝刊）によれば、2日訪日予定の田紀雲中国國務院副総理は重ねて天皇陛下の訪中を招請する趣であり、又、渡辺副総理兼外務大臣も、明年の日中国交正常化20周年の折に天皇陛下が訪中されるよう前向きに検討中である旨述べているところ、外務省の考え方如何（関連記事別添）。

答、本件については、中国側からの重ねての招請を踏まえつつ、政府内において引き続き検討を進めているところである。

（更問、検討状況は「前向き」ということか。）

答、中国側からの重ねての招請を踏まえて、検討を進めているということである。

（更問、田副総理より天皇訪中について重ねて招請ある場合、前向きの回答を行うのか。）

答、仮定の質問にはお答えできない。

（これ以上の問に対して）

答、検討中の段階であり、事柄の性質上コメントは差控えさせて頂きたい。

中国・田副首相 あす訪日控え会見

12/1 ①

天皇訪中を再招請

【北京30日＝横堀克彦、和気靖】中国の田紀雲副首相（共産党政治局員）は三十日、北京の人民大会堂で朝日新聞記者と会見した。田副首相は十二月二日から、宮沢政権が誕生して以来迎える初の中国首脳として訪日するが、宮沢首相との会談で天皇陛下の訪中を改めて招請することにも、これまでの対中経済協力とは別枠で中国の農業開発を対象とした新たな円借款の提供を要請することを明らかにした。

田副首相は、外務省と田首相は「中国政府として、中経協会の招きで日本を訪問する。李鵬首相からの宮沢首相への親書を携え、来年の日中国交正常化二十周年の記念行事などについて具体的に話し合う。天皇陛下の訪中について、田副首相は「中国政府として、すでに招請しているが、宮沢首相に会って、中国側が心から訪問に期待している気持ちを重ねて伝えたい」と述べ、国交正常化二十周年の来年中の訪中に強い期待を表明した。



朝日新聞記者と会見する田紀雲副首相
＝30日、北京の人民大会堂で、和気靖写真

中国政府で、農業と対外経済貿易分野の責任者である田副首相は、「今回の訪日の具体的な目的は、両国の農業分野での協力を拡大することにある」と表明。日本政府に対し、これまでの円借款や資源開発ローンとは別に、「農業開発ローン」の形で農業的を絞った協力を求める考えだ。田副首相は「農村の発展と安定は中国の基礎であり、日本の支援を期待したい。ローンが実現すれば波及効果は大きく、日本に対する農産加工品や野菜、大豆などの提供も拡大できる」と日中双方の利益になることを強調した。

また八中全会で農業重視が決まったことも、農業ローン要請の背景となっているとみられるが、田副首相は農業重視について「中国の安定と発展は農村にかかっている、この認識からだ」と説明。会議で「農民が土地経営の自主権を得た八〇年代の農村改革を全面的に肯定する一方、一農家だけでは解決出来ない、水利や科学応用、産品販売などの分野で集団経済の力を活用する方向が決まった」と紹介した。今回の日本訪問では農協を見学して「農村部の社会的サービスシステムを確立する参考になりたい」と語った。

田副首相は、中国共産党の十四人いる政治局員の一。二十九日開幕した第十三期中央委員会第八回全体会議（八中全会）の後、党幹部として初めて外国人記者のインタビューに答えたが、党の人事が見送られたことについて「指導部の安定は、中国の発展

農業開発円借款 要請へ

12/1

天皇訪中関係

報道振り

国交回復20年目 天皇訪中実現を

渡辺副総理・外相は三十日、宇都宮市内のホテルで記者会見し、天皇陛下の訪中問題について「(中国は)来年、天皇陛下にきてもらいたい、と言っており、そういう方向がいいのではないかと考えている。過去のこととは言わずに前を向いた関係を作っていきたい」と述べ、来年の日中国交回復二十周年を機に天皇陛下の訪中を実現すべきだとの考えを示した。

② 両陛下の来年 訪中望ましい

渡辺外相

渡辺美智雄外相は三十日、日中国交正常化二十周年にあたる来年、天皇陛下が中国を訪問されるよう中国側から招請があることについて「中国は昔のことは言わず、一つの区切りにしたいと言っている。宮内庁は返事をしていないが、私はそのほうがいいと思う」と述べ、天皇、皇后両陛下の来年の中国訪問が望ましいとの見解を表明した。政府は今年九月から十月にかけての両陛下の東南アジア諸国連合(ASEAN)三か国歴訪に続く、来年の海外訪問先の検討を進めており、中国のほか西欧、韓国などが候補に挙がっている。政府内には中国については、同じアジア地域のご訪問が続くこと、同地域では韓国との関係もあることなどから消極論もあり、具体的調整にはなお時間がかかりそうだ。

① 天皇訪中を 前向き検討

渡辺外相

渡辺外相は三十日、宇都宮市内で開かれた会合で講演し、来年の中国との国交回復二十周年に天皇陛下の中国訪問を検討していることを明らかにした。渡辺外相は「中国は天皇に来てもらいたいと言っているので、その方向で考えている。過去のことはいわずに、前を向いて関係をしっかりとつづけていきたい」と述べた。

アジア局長
審議官
中国課長
首席事務官

機 密 官

取扱注意

(対外応答要領)

天皇陛下の中国御訪問

平成3年12月2日

中国課

中国国総務

問、1日付本邦各紙(朝刊)によれば、2日訪日予定の田代副総
理は重ねて天皇陛下の訪中を再招請する趣であり、又、渡辺副総理兼

外務大臣も、^{明年の}日中国交正常化20周年の折に天皇陛下^下訪中される前向き
に検討中である旨述べているところ、外務省の考え方は如何。(同産

記事別添。)

答● 本件については、中国側からの重ねての招請と踏まえて、
政府内において引続き検討を進めているところ●である。

(更内、●検討●状況は「前向き」といふこと。)

答、中国側からの重ねての招請を踏まえて、検討を進めているといふ
こと。いふ。

より天皇訪中については重ねて

(更内、田代総理●招請と踏まえて、前向きの回答とするもの。)

答、 伝達の質問にはお答えできない。

(これ以上 ~~お答えできません~~)

答、 事柄の性質上 コメントは差控えておきたい。

(検査中の段階であり)

(3)

連見上海總領事

事務連絡

12/4

下程中
file

注意

1. 本電の取扱いには慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線2171、2174）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線3169）に連絡ありたい。

電信写

02-003

大 政事外外儀官
大務務 典房
次次
臣秘官官審審長長北経環 査総 外
大大ア 察括 研
使使大 審審 長

総口対文会厚情研

察人(在)儀警史オ

外 報 官
参 報 際 内 外文 長
密 一 二

参 政 保 対 旅 外

審 地 ④ 東
参 北 東 西北 米 長
審 一 二 保 地中 南 長
参 一 二欧 長
審 西 ソ 洋
西 東参 一 二 ア ア
一 二次 総 経 途
審 経 漁 国
経 エ 国
安 ネ 二

審 海 審 準

経 協 長
審 政 国 開 無
参 調 技 有 理条 長
審 条 協 規国 長
審 政 経 人
参 軍 社科 審
科 原情 調 長
参 情 析 調
企 安

総 番 号 R258361

主 管

月 24日

上 海 発

亜 中

平成 3年 12月 24日

本 省 着

外 務 大 臣 殿

蓮 見 総領事

事務連絡

第524号 秘 至急 (ゆう先処理)

タリイ中国課長へ

ハスミより

最近当地でも市政府関係者の間で、へい下御訪中の可能性につき話題にする者がおり、小官としては応答要領のラインでのみ返答しています。先日、市政府関係者の一人は内部で聞いた話として、本件訪中招へいは、本来トウ小平の指示によるもので「トウ」は自分の目の黒い内に実現して対日関係にけじめをつけたいとして、そのためにも早い時期（明年の20しゅう年）を期待していること、またそのはい景には「トウ」がてん安門事件以降の中国の困難な時期に、日本政府が中国に対してとつた好意的対応振りを高く評価していることにある旨内々に述べました。

本件微みような事からの性格上、更にソースを追及すべきでしょうが（あるいは、他に同様の情報があるかも知れませんが）、御参考までにかかる形で報告いたします。（了）

唐家璇公使記者會見口述對外公關要領

12/28

対外応答要領

91. 12. 28

中国課

〔27日、在京中国大唐家セン公使は記者とのインタビューにおいて、万里全人代常務委員長、江沢民総書記、楊尚昆主席の訪日等につき語った由。右に関し外部より照会ある場合の応答要領は以下の通り。〕

問1. 万里中国全人代常務委員長が4月に訪日する由であるが、右事実関係如何。

答、国会の招待で訪日する予定と聞いているが、具体的な日程等については現在なお調整中と承知。

問2. 国交正常化20周年記念の要人往来として中国は江沢民総書記の訪日を予定しているとのところ、事実関係如何。

答、国交正常化20周年記念祝賀行事の一環として行われることとなっている要人往来に関し、いつの時点で中国側より誰を招待するか、また、今後日本側より誰が訪中するかについては、現在中国側と事務的な打合せを行っているところであり、未定。

問3. 天皇陛下の訪中が行われれば、答礼として楊尚昆主席の訪日が行われることとなる由であるが、事実関係如何。

答、天皇・皇后両陛下の中国御訪問については、累次の中国側招請を踏まえ、現在政府内で検討中。また、仮りに両陛下の訪中が行われることとなった場合に、中国側より誰が来日するかについては、未定。

(了)

ア中長

大 臣
秘書官

外務報道官
報道課長

アジア局長
審議官
中国課長
首席事務官
総務課

唐家璇在京中国大公使への
邦人記者インタビュー (X電)

平成3.12.27

ア中

大田訪中国行

27日午前、在京中国大公使について、邦人記者に付き唐家璇公使への共同インタビューが行われたこと、興味ある
次の通り発表した。

~~以下~~ (要ラフの読売新聞記者が) 中国課長
が聴取したもの。
に語った)

1. 万里全人代委員長は4月に訪日予定。
2. 日中国交正常化20周年記念の要人作来にて

中国は江沢民総書記の訪日を考えている。

3. 更に明年 天皇陛下の御訪中があれば、中国側

は答礼として楊尚昆主席の訪日 ^{行方}を考えている。

4. 北朝鮮の核の問題については、中国は、北朝鮮

に就き、中国もIAEAの査察を受けようが、右は
原子力の平和利用の妨げにはならぬ首肯している。(?)

中國人民の反応

(共青団員内証)

1/8

注意

1. 本電の取扱いには慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線 2 1 7 1、2 1 7 4）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線 3 1 6 9）に連絡ありたい。

電信写

08-035

大政事外外儀官
大務務典房
臣秘官官審審長長

外研長
總括審
査察審
（環）了大
經大使
北大使

◎口对文会厚情研
察人◎在儀警史才

報官 參報際內外

文長 審一二

參政保對旅外

長

米長 審二保地

中南長

審西	洋
西	東
長	

参一二アア
一→二

經 次總經途
寧經二海國

長

審海	審準
----	----

無開國政審
有理技調參

審條協規

国	参政經人
長	参軍社

科審	科原
----	----

調長 調參 安企

総 番 号 R 0 0 4 0 6 3

月 10 日

平成 4 年 1 月 10 日

中 国 發
本 省 着

主 管

外務大臣殿

橋本大使

中国内政（共せい団員内話）

第98号 秘

(以下FAX送信 PK8264-02)

秘

8日昼、懇意にしている共青団員（某外資系ホテルにて勤務）が石川に内話せるところ次の通り。何ら御参考まで。

1. 党による政治学習実施状況

（1）中国の他の単位と同様に外資系ホテルである我が単位でも総経理をトップとする経営陣がホテルの運営を、党委書記をヘッドとする党委員会が従業員の思想教育をそれぞれ分担している。経営陣と党委員会の関係は良くないが、これは北京の他の外資系ホテルにおいても同様であると聞いている。

（2）当ホテル従業員総数約1300名のうち共青団員は100名余りで、共青団が組織する政治学習に参加している。最近では「7・1江沢民講話」、「平和演説反対」について学習が行われ、後者は秋に1ヵ月間程なされた。また2週間前から「ソ連・東欧の激変の原因と教訓」というテーマで政治学習が始まった。

「ソ連・東欧の激変の原因と教訓」を勉強するための文献は、右激変の原因として①経済改革より政治改革を優先させたこと、②民族間の矛盾が大きかったこと、③権力の移譲に失敗したこと、を挙げている。③については、アンドロポフからチェルネンコに至る権力の移譲は的確になされたが、ゴルバチョフには権力が誤って移譲されてしまい、これがエリティンの台頭に繋がってしまったとしている。即ち、ゴルバチョフ時代になってエリティンが重用されるようになり、このことが去年の「8・19」政変から僅か半年足らずでソ連邦が解体される事態の伏線となったのである。上記文献はまた、教訓として①経済改革の深化、②共産党独裁の強化、③汚職・腐敗の撲滅等を挙げている。

2. ポスト鄧小平

中国は御存知のように権力の集中がなされており、²⁰小平が死んだあと政治的安定が保たれるのか、また改革・開放政策が堅持されるのか、我々若者の間にも若干の不安はある。個人的には²⁰小平が死んだあと動乱が起こるかもしれないと考えている。その場合、軍に影響力を有する楊尚昆、王震あたりが江沢民と袂を分かつか、あるいは楊尚昆と王震が直接対立することがありえよう。王震は現政権において影響力を有する人物のうち、最も保守的な考えの持ち主である。また、日頃の言動から野心が大きいと見られる彭真が要注意であろう。彭真は軍内での基盤はあまり無いが、党・政府には基盤を有している。

秘

3. 日中関係

報道によれば渡辺大臣の訪中で江沢民総書記の訪日、天皇陛下の訪中が検討されているそうであるが、党総書記は総理・国家主席と違い通常西側先進国に行くことは少ないことから注目される。また、天皇訪中については、一般人民の反応は無関心（中文：無所為）であろう。

香港に転電し、中国3公館に転報した。

（了）

8. 廣迎外語大臣中國訪問

極 秘
無 期 限

部の内
号

決 裁 書

大臣 秘書官 政務次官 事務次官 外務審議官 外務審議官 官房長	主管 アジア局長 審議官 中国課長 首席事務官	<table border="1"><thead><tr><th colspan="4">保 存 期 間</th></tr><tr><th>1類</th><th>2類</th><th>3類</th><th>4類</th></tr><tr><td>(永久)</td><td>(10年)</td><td>(5年)</td><td>(1年)</td></tr></thead><tbody><tr><td>起案</td><td>平成 3 年 12 月 19 日</td><td></td><td></td></tr><tr><td>決裁</td><td>平成 年 月 日</td><td></td><td></td></tr><tr><td>起案者</td><td>電話番号</td><td></td><td></td></tr><tr><td>泉</td><td>2426</td><td></td><td></td></tr></tbody></table>	保 存 期 間				1類	2類	3類	4類	(永久)	(10年)	(5年)	(1年)	起案	平成 3 年 12 月 19 日			決裁	平成 年 月 日			起案者	電話番号			泉	2426		
保 存 期 間																														
1類	2類	3類	4類																											
(永久)	(10年)	(5年)	(1年)																											
起案	平成 3 年 12 月 19 日																													
決裁	平成 年 月 日																													
起案者	電話番号																													
泉	2426																													
協議先 総括審議官 総務課長 儀典長 儀典官																														
下記の件に関し、決裁を求めます。(関係文書別添)																														
件 名 日中外相会談用資料(天皇・皇后両陛下の中国御訪問)																														
GA-1 (昭和63. 4. 1改正) 外 務 省		回覧番号																												

(日中外相会談用)

天皇・皇后両陛下の中国御訪問

91.12.20

亜 中

(発言要領)

1. 天皇・皇后両陛下の御訪中については、責任を持って努力する。

仮定の問題として、本年10月乃至11月の御訪中を念頭に置いた場合の貴方の御都合如何。

2. なお、本件は、まだ先のこともあり、慎重に取り扱う必要があるので、~~発言ぶりとしては~~、『引き続き検討中』とのラインとしたい。

(参考) 最近の中国側の天皇陛下御訪中招請経緯 (国交正常化20周年での招請)

- (91.4.6) 李鵬総理→中山大臣 (中山大臣訪中時)
- (91.4.7) 銭外相→中山大臣 (中山大臣訪中時)
- (91.6.26) 銭外相→中山大臣 (銭外相訪日時)
- (91.8.10) 李鵬総理→海部総理 (海部総理訪中時)
- (91.11.13) 銭外相→渡辺大臣 (APEC閣僚会議出席時)
- (91.12.3) 田紀雲副総理→宮沢総理 (田副総理訪日時)

極秘

クーラー

松本通訳

天皇、皇后両陛下の御訪中

○ 天皇、皇后両陛下の御訪中については、

貴国からの累次にわたる熱心な

要望を踏えて真剣に検討してまいりました。

○ 今般の訪中に先立ち、

10月22日から

27日までの日程の訪中を

○ この御日程は、他の行事との関係

で変更可能なところが困難。よって是非

このラインで検討願いたく、その結果を

2
可能な限り速やかに橋本大使を

通して御連絡願いたい。

○ 又、本件は我が国国内手続上も

極めて慎重に取り扱う必要がある

ので、対外発表等については次を通りて

したい。

「中国側より、国交正常化20周年の

本年秋に両陛下の中国御訪問を

歓迎するとの丁寧な招請があった。

日本側より、中国側からの果敢に

亘る招請を多岐しつゝ、これを踏まえ

更に政府部内で真剣に検討してゆく

所存である旨、回答した。」

本稿は作成済
929-10月発行済

天皇

(発言要領) 天皇・皇后両陛下の中国御訪問

- 天皇・皇后両陛下の御訪中については、貴国の希望を十分踏まえて
充分考慮する旨の意図

責任を持って検討する。

有責任地加以研究

仮定の問題として、本年10月乃至11月の御訪中を念頭に置いた
作為一個仮定問題、如果考慮今年10月或为11月实现访华的话、

場合の貴方の御都合如何。

貴方情况如何？

- なお、本件は、まだ先のことであり、慎重に取り扱う必要がある
因此件事是将来的事情，有必要慎重对待，对外方面担任作为
ので、『引き続き検討中』とのラインとしたい。

"正に検討中"

(参考) 最近の中国側の天皇陛下御訪中招請経緯 (国交正常化20周年
での招請)

- (91.4.6) 李鵬総理→中山大臣 (中山大臣訪中時)
○ (91.4.7) 銭外相→中山大臣 (中山大臣訪中時)
○ (91.6.26) 銭外相→中山大臣 (銭外相訪日時)
○ (91.8.10) 李鵬総理→海部総理 (海部総理訪中時)
○ (91.11.13) 銭外相→渡辺大臣 (A P E C 閣僚会議出席時)
○ (91.12.3) 田紀雲副総理→宮沢総理 (田副総理訪日時)

91. 12. 20

亜 中

今上天皇の御即位以降の中国側よりの訪中招請アプローチ（公式・非公式）をとりまとめたところ、次の通り。

1. (89. 4. 13) 訪日中の李鵬総理より、天皇陛下に対し、「将来、適当な時期に、天皇陛下が中国を訪問されるよう希望いたします。
天皇陛下より、「そのような機会があれば嬉しく思います。ただ自分の訪問については、政府との相談が必要です。」

2. (90. 7. 6) 江沢民総書記より毎日新聞社訪中国に対し、「もし天皇に中国訪問の御希望があれば、いつでも歓迎する。」（報道）

3. (90. 11. 12) 即位の礼の出席のため訪日中の呉学謙副総理より、（饗宴の儀の開始前に）天皇・皇后両陛下に対し、「楊尚昆国家主席、中国人民に代わり、天皇に御挨拶を送る。天皇・皇后両陛下の御都合の良い時に中国を訪問されるよう招請する。」

天皇陛下は「ありがとう。」と回答。

（呉副総理が我が方接判員に対し内話したところによれば、食後のレセプションで、呉より陛下に英語にて直接、重ねて訪中招請したところ、陛下は「政府が決定するでしょう。」と回答。呉より「具体的なことは今後外交ルートで協議することとしたい。」旨述べた由。）

4. (91. 4. 6) 李鵬総理より、訪中した中山大臣に対し、「中日双方の努力により、この20年間、中日関係は順調に発展してきた。89年に訪日し、天皇陛下にお会いした際に両陛下の訪中招請したところ、訪中の機会があることを期待しているが、具体的には政府の同意が必要であると言われた。明年は国交正常化20周年でもあり、

天皇・皇后両陛下に訪中していただく好機である。もし訪中されるならば中国人民、日本人民の歴史の傷口を治す上からも、友好関係を強固にする上からも重要である。」

中山大臣より、「李鵬総理の招請の言葉を心にとめて政府として検討させていただきたい。両陛下は即位が終了するまでは外国訪問をされなかったこともあり、外遊日程が立て混んでいる。訪中が実現できれば日中関係が進展するであろう。」旨回答。

5. (91. 4. 7) 銭其琛外相より、訪中した中山大臣に対し、「来年は国交正常化20周年で、一つの重要な年。両国の歴史の中で重大かつ記念すべき年である。20周年の際に天皇・皇后陛下の御訪中が実現すれば極めて意義深いことである。必ずや中国人民の歓迎を受けるであろう。善隣関係の発展を大きく促進するものと考えている。これまでも中国の首脳が貴国を訪問した際、都合の良い時期の天皇の御訪中を歓迎する旨伝えている。天皇からもそのような機会があればとの発言をいただいている。日本政府が積極的に考慮されることを期待。」

中山大臣より「天皇訪中については政府として今後検討していきたい。」旨回答。

6. (91. 6. 26) 訪日中の銭其琛外相より、中山大臣に対し、「明年の国交正常化20周年には両国の要人の相互訪問を考えたい。中国として天皇・皇后両陛下が明年の御都合の良い時期に訪中されることを大変歓迎する。中国指導者はこれまで何度も天皇陛下の御訪中を招待しており、本件が実現すれば必ずや中国人民の熱烈な歓迎を受けることであろう。中日関係史の上でも大きな出来事になると考えており、子々孫々の友好のための大きな原動力になり、両国の将来にとって大きな影響を与えるものと信じている。日本政府が積極的に考えていただくことを心から希望する。」

中山大臣より「貴部長の発言を注意深く拝聴した。今後政府において十分検討したい。」旨回答。

7. (91. 8. 10) 李鵬総理主催歓迎宴において、李鵬総理より海部総理に対し「本件は、本来会談の席でお話しようと思ったが、日本

側を困らせることは本意ではないので、また、既に本件については銭
外交部長よりお話していることでもあり、それは止めた。しかし来年
の天皇陛下訪中実現にかける中国側の気持ちは非常に強い。改めてこ
のことを貴総理にお伝えする、」

海部総理より、「本件については、政府内において引き続き検討を
進めて参ることと致したい」旨回答。

8. (9 1. 1 1. 1 3) ソウルで開催された第3回APEC閣僚会議
に際しての日中外相会談の席上、銭其琛外相より、「ハイレベル交流
についても20周年にあたり実現したく、既に要請している天皇陛下
の訪中につき新内閣で早急に検討を願いたい」旨言及。これに対し、
渡辺大臣より、「天皇陛下の訪中については海部総理訪中時の話もあ
り、新内閣においても中国側希望を踏まえ引き続き検討中。但し、皇
室のことなので政府の一存では決められない」旨応答。

9. (9 1. 1 2. 3) 訪日中の田紀雲副総理より、宮沢総理に対し、
「中国政府及び人民は、明年の日中国交正常化20周年に天皇・皇后
両陛下が訪中されることを期待しており、両陛下が訪中された場合に
は、必ずや中国人民の熱烈な歓迎を受けるので、総理からも本件を促
進願いたい。」

宮沢総理より、「両陛下の訪中についての丁寧な言葉を感謝する。
我々としても今後、色々な事情をふまえ検討して参りたい」旨回答。

注意

1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線2171、2174）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線3169）に連絡あり。

限定配布

極秘

電信写

総番号 R000340

主管

月 5日

中国 発

平成 4年 1月 5日

本省 着

アジア局長

外務大臣 殿

橋本 大使

ワタナベ副総理兼外務大臣の訪中（セン外交部長とのテタテート会談：てん皇・皇ごう両へい下の御訪中）

第14号 極秘 至急（ゆう先処理）

（限定配布）

4日午前11時40分より約50分間行われたワタナベ外務大臣とセン・キシソ外交部長とのテタテート会談における本件に関するやりとり概要次の通り（先方ジョ・トンシン副部長、武ダイイ日本処長参事官、当方本使、タニノ・アジア局長、クルイ中国課長同席）。なお、本電の配布は極力限定願いたい。

1. ワタナベ大臣より次の通り述べた。（1）てん皇・皇ごう両へい下の御訪中については、中国側より度重なる招請をいただいているがこれに対し感謝する、（2）貴国のご要望をふまえわが方としても真げんな検討を行ってきた、（3）今般の訪中に先立ち、XXXXXXXXXX 10月22日から27日、5はく6日の日程で訪中をXXXXXXXXXX（4）他方皇室には各種行事も多くこの日程はいろいろと調整を経たものであり変更は困難、（5）についてはこのラインで中国側において極秘りに所要の検討を行っていただき、その結果を出来るだけ早急にハンモト大使を通じてご連絡願いたい、（6）なおわが国国内には右よく、左よくを含め本件につき大きな関心があり、これが早々に公になると例えば右よくからはてん皇へい下を訪中させて過去を謝罪させるつもりか等大きな反ばつと国内的問題を生じる恐れあり、従つて極めてしん重に取り扱う必要があり、対外発表振りとしてはとりあえず次のラインとすることとしたい。即ち「中国側より国交正常化20しゅう年の本年秋に両へい下の中国御訪問をかん迎する旨てい重な招請があつた。日本側より中国側のるい次にわたる招請を多としつつ、これをふまえ更に政府部内で真げんに検討していく所存である旨回答した」、（7）もち論秋ということが外に出ればいろいろとおく測も出ようが当面は時期等を含め検討中ということで行きたい。

2. 以上に対しセン外交部長は、ワタナベ大臣のご提案に大変感謝する旨述べ、対外発表振りについても基

外務省

大 政事外外儀官
大務務典房
臣秘書官審審長長

北経環 査総 外
大大ア 察括 研
使使人 審審 長

総口対文会厚情研
察人電在儀警史オ

外報官 参報際内外

文長 審一二

移長 参政保対旅外

長 地中東
参北東西

北米長 審一二保地

中南長 参一二

欧 審西ソ洋
西東

長 参一二アア
二二

経 次総経途
審経漁国
長 経エ国
安ネ二

審海 審準

経協長 審政国開無
参調技有理

条長 審条協規

国 審政経人
長 参軍社

科 科原
審

情調長 参情析調
企安

注意

1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線2171、2174）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線3169）に連絡ありたい。

極秘

電信写

本的には上記に同意する、具体的時期については事務的に打ち合わせていきたい旨述べた。また、セン部長は本件については直ちにヨウ・ショウコン国家主席、リ・ホウ総理にもあげて、中国側として早急に検討を行い出来るだけ早い時期に回答を行うべく努力するとともに今後ハシモト大使と連絡を密にして参りたい旨述べた。

3. なお、ワタナベ大臣より、中国側の検討には多少時間がかかるものと思うが、今後具体的な御訪問の場所についても協議していきたい旨述べた。（了）

注意

1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線2171、2174）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線3169）に連絡ありたい。

電信写

02-003

大 政事外外儀官
大務務 典房
臣秘官官審審長長

北経環 査総 外
大大ア 察括 研
使使大 審審 長

総口対文会厚情研

察人團在儀警史オ

外 参報際内外
報 官

文 審一二

領 参政保対旅外
移 官

審地田東
参北東西
長 一

北米 審一二保地
長

中南 参一二
長

欧 審西ソ洋
西東
二

近 参一二アア
二二

次総経途
審経漁国
経エ国
安ネ二
長

審海 審準

審政国開無
参調技有理
長

審条協規
長

審政経人
参軍社
長

科原
科密

参情析調
企安
情調長

総 番 号 R000337

月 5日

平成 4年 1月 5日

中 国 発
本 省 着

主 管
亜 中

外 務 大 臣 殿

橋 本 大 使

日中外相会談（てん皇・皇ごう両へい下御訪中）

第11号 秘 大至急

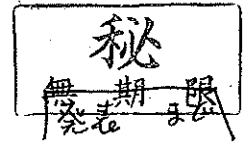
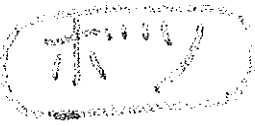
往電第8号別電3.

外相会談の席上、国交正常化20しゅう年の要人往来との関連で、セン部長よりワクナベ大臣に対し、てん皇・皇ごう両へい下の御訪中について招請がなされたところ、中国側の発言以下の通り。

「中日国交正常化20しゅう年の本年、もしてん皇・皇ごう両へい下の御訪中が実現できれば、両へい下は必ずや中国政府及び人民の熱れつなかん迎を受けるであろう。日本政府におかれては、両へい下の年内の御訪中の実現に向け検討願いたい。仮に、実現されれば、中日両国の間の2000年の歴史に新たな一ページを付け加えることとなろう。そして、必ずや両国の関係に取り、前向きな積極的な効果をもたらすものとなる。」

米、英、ホンコン、上海、広州、シンヨウに転電した。（了）

日中外相会谈 対外発表振り(但し麻案)



日中外相会談（天皇・米中・朝鮮）対外発表振り（案）

1. 天皇訪中

中国側より、国交正常化20周年の本年に天皇・皇后両陛下の中国御訪問を歓迎する旨丁重な招請あり。

日本側より、中国側よりの累次に亘る招請を多としつつ、これを踏まえ、更に政府部内で引き続き検討していく所存である旨回答。

2. 米中関係

日本側より、米中両国が国連安保理常任理事国として、世界の平和と安全について有している特別の責任を指摘、又、良好な米中関係は日中関係の安定的発展にとっても重要である旨指摘。中国が人権問題等で前向きの措置をとることが米中関係を含めた中国の対外関係の改善に資することとなる旨述べた。

中国側はこれに対し、……………

3. 北朝鮮の核開発

日本側より、昨年末の韓国と北朝鮮との間の「朝鮮半島の非核化に関する共同宣言」は大きな前進であり、喜ばしい旨、又、今後は同宣言の内容が逐一実現され、北朝鮮が I A E A 保障措置協定を早期に締結し、完全履行することが緊要であり、その確保に向け日中を含む関係国が更に役割を果たしていくことが重要な旨発言。

中国側より、.....

9. 韓国への対応

焼却

追1-1

10-10

10-2

10-3

10-7

10-5

10-6

当面の汚染・対策説明あり

1/7

天皇・皇后両陛下の御訪中
(対米、韓説明ぶり)

平成4年1月7日
ア ジ ア 局

当面の対米、韓説明ぶりを次の通りとする。

1. ブッシュ大統領

今次首脳会談において次の通り宮沢総理より御発言いただく。

「本年は日中国交正常化20周年を迎えることでもあり、かつ、中国側の度重なる強い要請があったことを受け、日本政府は両陛下の御訪中を実施する方向で内々検討を開始した。

但し、本件は国内的に極めて微妙な問題であり、外部に出ることは一切避ける必要があるので、厳に貴大統領限りとしていただきたい。」

2. 総理訪韓

別途検討する。

総理訪韓前に韓国より照会超す場合は、次の対外発表ぶりのラインで応答する。

「中国側より、国交正常化20周年の本年秋に両陛下の中国御訪問を歓迎するとの丁重な招請があった。

日本側より、中国側よりの累次に亘る招請を多としつつ、これを踏まえ、更に政府部内で真剣に検討していく所存である旨回答した。」

[配布先]

大臣(10-1)、小和田事務次官(10-2)、官房長(10-3)、
総務課長(10-7)、儀典長(10-4)、儀典官(10-8)
アジア局長(10-5)、アジア局審議官(10-6)、
中国課長(10-9)、北東アジア課長(10-10)

韓国側の反心

1/8

注意

1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会検問班（内線2171、2174）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会検問班（内線3169）に連絡ありたい。

限定配布

極秘

電信写

(大)	政事	外外儀官
大務次	典房	
臣秘官官審審長長		
北経環	査総	外研
大大ア	察括	長
使使大	審審	
(総)	対文会厚情研	
察人電在儀警史オ		
外報官	参報際内外	
文長	審一二	
移長	参政保対旅外	
(審)	地中東	
長	参北東西	
北米長	審一二保地	
中南長	参一二	
欧	審西ソ洋	
近ア長	西東	
経長	参一二アア	
	次総経途	
	審経漁国	
	経エ国	
	安ネ二	
	審海	審準
経協長	審政国開無	
条長	参調技有理	
国長	審条協規	
科審	参政経人	
	参軍社	
情調長	科原	
	参情析調	
	企安	

総 番 号 R002339

主 管

月 8 口
平成 4 年 1 月 8 日

韓 国 発
本 省 着

アジア局長

外 務 大 臣 殿

柳 大 使

ミヤザワ総理の韓国訪問

第75号 極秘 大至急

(限定配布)

往電第74号に関し、

8日、本使がパク・チュンギョ国会議長と会談（冒頭往電参照）した際に、先方が個人的な考えではあるが
としつつ、再度にわたりへい下の御訪韓問題に言及したところ次の通り。

今回自分（パク議長）が、国会でミヤザワ総理に演説をしていただくことを積極的に推進して来たはい景に
ある考えとしては、総理に国会で演説をしていただくことは日韓関係が真の意味で正常化したということを
韓国国民に示すこととなるとの意義を持つものであり、ノ・テウ大統領の任期中である今年の秋にてん皇へ
い下御訪韓を実現するための、いわばはな道を作つていただくことにもなるというものである。（了）

外 務 省

在日韓国大より照会

1/8

午後三時以降受付往電案

極 秘
無 期 限

部の内
号

※総第 001759号002公館宛
平成 4年 1月 9日
※平成 22年 1月 9日 秒受付

電 信 案

限定配布

電信課長

大臣 秘書官
政務次官
事務次官
外務審議官
外務審議官
官房長

主管
アジア局長
審議官
中国課長
首席事務官

※発電係

起案

平成 4年 1月 9日

起案者

電話番号

本寺

2424

協議先

儀典官 200-正部39
儀典官 200-正部39

北東アジア課長

在 韓国 大 使 総領事 あて 外務大臣 発

件名

天皇陛下の御訪中 (在京韓国大使館との意見交換)

主管 文書記録
中

※電番

第69号

大至急

普通

至急

(優先処理)

パターン・コード

転送

在 中国

転報

※転電番号

第47号

大 使 ・ 総領事あて

大至急

普通

至急

(優先処理)

※

00175932

優先

KANKOKU

等002 漢

自暗

GB-1

外 務 省

回覧番号

極秘第

21

(注意) 1枚目は、機械で処理しますので、折り曲げない様願います。

(八〇字) V

(※印欄内は電信課記入)

(昭和六三・六・三十改正)

8日、在京韓国大使館の李桂欽（リー・ジュヒュム）書記官が渡辺大臣訪中のデブリーフィングを求めて中国課木寺を来訪越したところ、天皇陛下の御訪中及び御訪韓についてのやりとり次の通り。貴館参考まで。

1. 天皇陛下の御訪中について先方の質問に答え、渡辺大臣と^{センキシノ}銭其琛外交部長との間で次の発言があったと紹介。

「中国側より、国交正常化二十周年の本年秋に両陛下の中国御訪問を歓迎するとの丁重な招請があった。

日本側より、中国側よりの累次に亘る招請を多としつつ、これを踏まえ、更に政府部内で真剣に検討していく所存である旨回答した。」

2. 李書記官より、天皇陛下の御訪韓について、全くの個人的な見解であると前置きの上、次の通り述べた。

（1）自分（李）は長い間日韓関係を担当してきたので、天皇陛下の韓国御訪問についてはかねてから強い関心を持っている。

本年の大統領選挙後、新政権が発足



中国に転電した。

(了)

天皇皇后両陛下の御訪中（発言要領）

本年は日中国交正常化20周年を迎えることでもあり、かつ、中国側の度重なる強い要請があったことを受け、日本政府は両陛下の御訪中を実施する方向で内々検討を開始した。

但し、本件は国内的に極めて微妙な問題であり、外部に出ることは一切避ける必要があるので、厳に貴大統領限りとして頂きたい。

廃案

極秘
無期限
部の内 号

決 裁 書 (局内用)

本件決裁書は局内用とし、決裁終了後、北東アジア課の省内関係課に回すこととした。

大臣 秘書官 政務次官 事務次官 外務審議官 外務審議官 官房長	主管 アジア局長 審議官 中国課長 首席事務官	保存期間											
		1類 (永久)	2類 (10年)	3類 (5年)	4類 (1年)								
		起案 平成	4	年	1月9日								
		決裁 平成		年	月 日								
協議先		起案者	電話番号										
		木寺	2424										
		(北東)	2426										
		北東アジア課長											
下記の件に関し、決裁を求めます。(関係文書別添)													
件 名													
日韓首脳会談用発言用資料 (天皇訪中)													
GA-1 (昭和63. 4. 1改正)		外 務 省		回覧番号									

日韓首脳会談

(発言要領)

~~貴大統領には一昨年5月に訪日された際、天皇、皇后両陛下に御丁寧な貴国訪問の御招待を頂いており、御礼申し上げます。~~

両陛下の^{本年の}外国御訪問^をについては政府部内で^{年内}随時検討しているが、本年は日中^{に当たりと見られ}閣^内交正常化二十周年を迎え、かつ、中国側の度重なる^{強心}要請があったことを受け、日本政府は両陛下の御訪中を実施する方向で内々検討を開始した。

但し、本件は国内的に極めて機微な問題であり、外部に出ることは一切避ける必要があるので、厳に貴大統領限りとして頂きたい。

~~貴国への御訪問よりも中国御訪問が先になる可能性もあるが、両陛下の貴国御訪問の環境が双方の努力によりできるだけ早く整ってくることを願っている。~~

貴国より[✓]天皇、皇后両陛下に~~丁寧~~御招待をいたしていることもあり、右を内々お話しする次第である。尚、陛下の外国御訪内は年1回が原則であり、本年内に^{貴国}貴国という内^にいたたくことは困難であることを御理解願いたい。

注意

1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線2171、2174）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線3169）に連絡せられた。

限定配布

極秘

電信写

大 政 外 外 儀 官
大 務 務 典 房
臣 秘 官 官 審 長 長

北 経 環 査 総 外
大 大 ア 察 括 研
使 使 大 審 審 長

綴 口 対 文 会 厚 情 研
察 人 電 在 備 警 史 オ

外 報 官 参 報 際 内 外

文 長 審 一 二

参 政 保 対 旅 外

審 地 中 東
参 北 東 西

北 米 長 審 一 二 保 地

中 南 長 参 一 二

欧 審 西 ソ 洋
西 東

参 一 二 ア ア
一 二

次 総 経 途
審 経 漁 国

経 一 経 エ 国
長 安 ネ 二

審 海 審 準

経 協 長 審 政 国 開 無
審 調 技 有 理

条 長 審 条 協 規

国 審 政 経 人
長 審 軍 社

科 審 科 原

情 調 長 参 情 析 調
企 安

総 番 号 R005087

月 12 日

平成 4 年 1 月 12 日

韓 国 発

本 省 着

主 管
アジア局長

外 務 大 臣 殿

川 島 臨時代理大使

ミヤザワ総理訪韓

第167号 極秘 大至急

(限定配布)

1. 11日午前、当地出張中のタニノアジア局長が外務部のユ次官を往訪した際、同次官より、「今回のミヤザワ総理訪韓の際には、

年末には大統領選挙を迎えるという本年の韓国の

政治状況

「今年は選挙があり、

なお、別途、ちゅう食を共にしたイ・ウオンギョン元

外務部長官（前駐日大使）も同様のことを述べていた。（了）

外 務 省

日経

天皇訪中前向きに

12/2 渡辺外相

渡辺外相は二日前の衆議院
際平和協力特別委員会で、中国
が日中国交正常化二十周年にあ
たる来年の天皇陛下訪中を招請
していることについて「国交正
常化二十年の節目ということで
(中国側の) 気持ちもよくわか
るから、そういう方向で話して
みるのがいいのかなあという感
じをもっている」と述べ、訪中
実現に前向きな考えを示した。
沢藤礼次郎氏(社)への答弁。

日経

来年中の天皇陛下
訪中に前向き答弁

12/2 渡辺副総理

渡辺副総理・外相は二日
のPKO特別委で天皇訪中
について、「中国からぜひ
訪中してほしいという話が
あって、(来年が国交) 正
常化二十周年の節目である
という気持ちも分かるの
で、できることならそうい
う方向でお話してみるのが
いいのかなあ、という程
度の感じは持っている」と
述べ、九二年中の実現に前
向きな姿勢を示した。沢藤
礼次郎氏(社会)の質問に
答えたもの。

12/5

時事

「世目」

05AB18

J5A413 AB18

274

56行

(メモ③)

★

◎渡辺外相、1月10日すぎ訪中へ

両陛下の初ご訪問で詰め

国際協調路線堅持を要請

渡辺外相は五日、来年一月に訪中する意向を固めた。中国側と近く日程調整に入るが、ブッシュ米大統領の訪日(同七日・十日)が終了する一月十日すぎから、二三日間となる見込み。外相はこの訪中で、中国が引き続き国際協調路線を堅持するよう改めて要請するとともに、来年の日中国交回復二十周年を機に両国最高首脳相互訪問、特に九月に予定される天皇、皇后両陛下の訪中日程について詰めたい考えだ。

外相は一月の訪中で、李鵬首相、江沢民中国共産党総書記ら要人と会談したい意向で、その際、日本側からは中国が一昨年六月の天安門事件以降、日本を含めた欧米各国との関係改善に努めていることを高く評価、今後とも改革・開放、国際協調路線を維持するよう申し入れる。また、西側各国の関心が高い①核拡散防止条約(NPT)への早期加入②人権問題③通常兵器移転の国連報告制度などについて、これまで以上に積極的に取り組むよう促す方針だ。

国際情勢では、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)の核開発疑惑などの朝鮮半島情勢やカンボジア復興、中越関係の改善問題などが取り上げられる見通し。特に北朝鮮の核問題については、北東アジアの安全確保の観点から、核開発を中止し、早急に国際原子力機関(IAEA)の核査察を受け入れるよう中国側からも、北側へ再度働きかけるよう強く申し入れることにしている。

一方、来年九月二十九日が日中国交正常化二十周年に当たることに伴い浮上している天皇、皇后両陛下の初めての中国ご訪問や、楊尚昆国家主席ら中国要人の訪日日程についても協議したい意向だ。

渡辺外相は、外相就任前の昨年四月と今年三月にも訪中、李鵬首相らと会談している。

12/16

ロイター報道

(北条発)

泉

27944 大坂中 ②

中国政府は来年の秋に天皇陛下の御訪中を準備中。

南京大虐殺記念日の抗議活動も予定。

a1159ALL r

u i BC-CHINA-JAPAN 16-12 0232

BC-CHINA-JAPAN

CHINA BANS ANTI-JAPANESE PROTEST MARKING RAPE OF NANJING

BEIJING, Dec 16, Reuters - China banned a protest on the anniversary of a 1937 massacre by the Japanese army in the city of Nanjing, possibly fearing it might scuttle Beijing's hopes for an official visit by Japanese Emperor Akihito next year.

The December 13 protest, organised by a New York-based Chinese-American organisation, was cancelled because it was a "sensitive issue," a Nanjing police official said on Monday by telephone. She declined to give further details.

Demonstrators were set to mourn the many thousands of civilians killed during the Japanese army's brutal occupation of the city, an incident now known as the "Rape of Nanjing."

China's communist leaders, once quick to use memories of the struggle against the Japanese invaders to drum up nationalistic sentiment, are playing it more cautiously this year as Tokyo takes the lead in thawing ties strained by the 1989 Tiananmen killings.

Toshiki Kaifu, who was then Japanese prime minister, went to China in August, becoming the first leader of a major democratic power to visit China since troops crushed pro-democracy demonstrations in Beijing's Tiananmen Square on June 4, 1989.

Diplomats say China is now lobbying hard to secure a visit by Akihito next year -- a major diplomatic coup which would set the final seal of approval on booming Japanese trade and investment in China.

REUTER AQ MEF MS

Reut11:11 16-12

218 -

中

21:00

{ 天皇訪中の実現にF1. 日本の対中投資意を高める最大の
手段と見られており、中国側は目論み通り好日になる
と見られており、

12/28

12/31

報道振り

天皇・皇后両陛下

来秋、中国へ訪問

政府は三十日、天皇、皇后の歴史や、この問題での両陛下の中国訪問を来秋に実現する方向で最終調整に入る方針を固めた。

①来年は日中国交正常化二十周年に当たり、この節目の時期に、天皇陛下が初めて訪問されることは歴史的意義がある。中国側はこれまで再三にわたり天皇陛下の訪中を招請、歓迎する意向を示しており、過

去の歴史や、この問題での両陛下の中国訪問を来秋に実現する方向で最終調整に入る方針を固めた。

一昨年の天安門事件後、中国と西側諸国との関係が冷た化し、人的交流が制限されたが、その後、海部首相の訪中時期は、これからの日程も動向を待たせられるが、正常化記念事業が行われる来年九月前後を検討している。

政府は、アメリカが中国の民主化、人権をめぐる政

治状況に懸念を示していること、また、中国訪問を優先させることへの韓国の反応などを見極める必要があるとしており、宮内省は来月中旬の訪韓などを通じて内外の環境づくりを進めた上で、最終決断することとしている。

中国のGNP伸び7%見通し

【北京30日＝藤野彰】中国国務院の袁木スポークスマンは三十日、北京市内で今年の経済状況について記者会見し、今年の中国の国民総生産（GNP）の伸び率が当初計画の四・五%を上回る約七%となる見通しを明らかにした。さらに、工業生産に際しても伸び率が三・二%と計画値の六%を上回ると指摘、農業の豊作や社会需要の回復、物価安定を背景に経済情勢が好転していると強調した。

外貨準備400億ドル突破

今年の成長率7%前後

1/31 NK (7)

【北京30日＝飯野記者】中国の袁木・政府スポークスマンは三十日の記者会見で、年初来の輸出の好調な伸びによって外貨準備高が急増、建國後初めて四百億ドルを突破したことを明らかにした。このうち、国家保有分が二百億ドルで、九〇年末の百億ドルに比べ倍増した。今年一月から輸出補助金の撤廃と同時に実施した外貨管理制度が国家の外貨準備に大きく貢献した格好だ。

同スポークスマンはまた、今年の中国の経済成長率が七%前後に達すると発表した。政府計画の四・五%より高く、昨年の五・二%も上回った。食糧生産が四億三千五百万トンを超え過去二位の豊作となるなど、夏の記録的な水害にかかわらず、農業

が好調だった。農業総生産額は三%（九〇年は七・六%増）、工業総生産額は一三・二%（前年同七・七%増）伸びの見通しである。

さらに同スポークスマンは、九二年は六%成長を目指す述べ、経済効果の引き上げに重点を置いた安定成長路線をめざすと表明した。

中国の証券市場積極育成を強調

李鵬首相の側近

【北京30日＝飯野記者】中国共産党機関紙「人民日報」は三十日、株式制度を含む証券市場の育成に際し、袁木・政府スポークスマンが最近行った演説の要旨を掲載した。その中で袁氏は、「証券市場の発展は社会主義商品経済の発展の重要な内容」と位置づけ、積極的に発展させるべきだとの考えを示した。保守派の李鵬首相の側近と言われる同氏が積極論を鮮明にしたことで今後、証券市場の整備に拍車がかかりそうだ。

袁氏は、沿岸戦争やソ連・東欧の激変、中国自身の対外債務の増大などの理由から、「九〇年代は外債を借り入れる余地が小さい」と指摘。同時に、タンス預金も含む中国国民の預金総額が一兆元（二億約千四百億）に達したことを踏まえ、証券市場によって資金不足を補うことができるという見方を表明した。

中・韓がきょう貿易協定調印

【北京30日＝三森記者】中国筋によると、中国と韓国は三十日、北京で貿易協定と投資保護協定に調印する。これにより、中国は非友好国として韓国製品に課していた高率の輸入関税を廃止、相互に最恵国待遇を与え、また二重課税防止条項も盛り込まれる見通し。

中国とロシア友好覚書調印

【中国通信】モスクワ二十九日発新華社電によると、中国とロシアは同日モスクワで、両国関係発展のための基本的諸原則を盛り込んだ覚書に調印した。この覚書には田富首相、クナゼ・ロシア外務次官が署名した。田次官は「双方は二国間関係の重要な諸問題について意見を交わし、合意に達した」と述べ、覚書に盛り込まれた主な基本原則として、①両国関係は平和共存五原則を基礎に確立されるべきだ、②一九八九年と九一年の中ソ共同コミュニケに盛り込まれたすべての原則は引き続き将来の両国関係を導く一なることを挙げた。

中国関係報道振り

①議員交流 来年も活発に

中国の万里全中国人民代表大会常務委員長が来年四月に訪日するのを始め、活発な議員交流が来年も展開される見通しだ。

万里氏の来日は、桜内義雄衆院議長らが訪中した際の招きに応じるもので、万里氏をはじめ三千人程度になる見込み。

また、昨年七月、桜内議長が訪中した際、ソ連最高会議の議員団を招待したのを受け、来年一二月にも議員団が来日する予定だったが、ソ連邦の消滅に伴いロシア連邦から議員団が来日する可能性も出てくる。

このほかフランス、パングラデシュからの議員団来日も計画されている。

一方、日本側からの外国訪問では、春にカメルーン、秋にスウェーデンでそれぞれ開かれる列国議会同盟（IPU）会議に衆参両院の議員団を派遣することなどが予定されている。

来月訪中の渡辺外相

来月一月三日から中国を、を改善させたいという気持ち訪問する渡辺外相は二十七日、中国側も日、同行記者団とのインタビューに答えている。中国側も「中国は北、重要な」と指摘し、錢中国朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）と最も良い関係にある外相らとの会談で主要な議題の一つとして取り上げ、友人として核査察を受けようとした。さらには、中国側から強い「要請がある天皇陛下の訪中」と述べ、国際原子力機関問題については「目下検討中である旨を（中国側）に入れ、中国側から北朝鮮に伝えてある」と述べた。同時に「訪中の際、特定したし入れる意向を明らかにし、トップの訪日を要請することもあり得る」と、楊尚昆また、外相は人権問題、国家主席の来日を招請することをめぐってきくし考えを示唆した。

「プッシュ米大統領は、米、二十七日に行われた渡辺外相とのインタビューの要請が強いなかで、米中関係は次の通り。」

楊主席の来日招請

「北」に核査察で助言も要請



渡辺外相

訪中の狙いは。と伝えられるが、仮にそうだとすればアジアの平和と安定のために撤去を求めなされる。来月は日中国交回復二十周年を迎え、一つの区切りを迎えるので日中関係について率直な話し合いを行いたい。国際情勢については、とくにソ連邦崩壊している。

「米中の関係改善の橋渡し役に意欲的だが、渡辺氏、外相就任前からこの問題には重大な関心を持っていた。プッシュ米大統領は、議会に中国に対する制裁措置を引き続き要求する声があるなかで、米中関係を悪化させずに改善させたい気持ちを持っていて、これに対し、中国は譲るべきことは譲り、米国も理解を深めていくことが重要だと思ふ。訪中後、プッシュ大統領が来日するので、中国側の考えを伝えたい。」

「要人往来については、渡辺氏、訪中の際、特定したトップの訪日を要請することになるかもしれない。天皇陛下の訪中については、国会で中国から度々要請があると答弁しており、それに対して目下検討中である旨を伝えてある。それ以上のごときは中国に行つての話だ。」

「カンボジアと平和についての意見交換は、渡辺氏、カンボジアと平和が達成されるには、それだけの勢力を裏で支援している勢力の排除が必要だ。中国とベトナムの関係正常化問題など話し合いを行いたい。」

1/5 本邦各所鉄道振り

← 読む (1面)

産経 (2面)

両陛下訪中

実現へまだ曲折も

中国側、新時代へ環境づくり

【北京四日＝北村経夫】 渡辺外相と銭其琛中国外相との四日の日中外相会談で、中国側がことしが日中国交正常化二十周年にあたることから天皇、皇后両陛下の「今秋訪中」を招請したが、政府はこれを受けて具体化に向けて本格検討を進める方針だ。両陛下の訪中が実現すれば、二十一世紀へ向けて「日中新時代」を画すものになるが、結論までには曲折が予想される。

中国にとって天皇、皇后両陛下の中国訪問は、両国関係をさらに緊密にし、天安門事件以来、冷却化している欧米諸国との関係改善の呼び水になるとの狙いがある。同時に日本からの経済協力が促進されるきっかけにしたい、との意思もある。

日本にとっても、米国にもあるだけに、中国訪問もあって、中国訪問を先に実現することの是非も検討しなければならぬ。外務省筋の考えだ。しかし、外務省内にも「昨年九月に東南アジアを訪問された際、日中双方で国交回復二十周年に合わせ両国首脳が相互訪問することで合意。中国側から重ねての陛下訪中の招請に対して、日本側も「検討する」旨を伝進めている。

両陛下今秋訪中国まる

外相会談で中国側招請 李首相も歓迎表明

【北京四日＝黒河内豊】 中国を訪問中の渡辺美智雄外相は四日、北京市内で、銭其琛外相に続いて、李鵬首相、江沢民・共産党総書記と相次いで会談した。この中で、銭外相が「国交正常化二十周年にあたる本年秋の両陛下のご訪中を歓迎する」として、初めて時期を特定して、天皇、皇后両陛下の中国訪問を招請したのに対し、渡辺外相は「招請を進めているが中国側にも、民は心から歓迎する」と述べた。日本側はこれまで、

中国の招請に、「検討中」と答えてきたが、今回、渡辺外相は「真剣に」という表現で一歩踏み込み、わが国として前向きに迎じていく姿勢を示したものだ。政府はすでに、天皇陛下の今年の外遊について、中国に絞って詰めの調整に入っている。中国の人権、民主化問題への懸念を示しているアメリカまた、天皇陛下が皇太子時代に訪問を検討した韓国と連絡をとったうえ最終決定する方針だ。また、外相会談では、江沢

状況変わらず
宮内庁は冷静
中国の銭其琛外相が四日、訪中している渡辺外相に天皇陛下のご訪中の中国訪問を正式に招請し、同外相が「真剣に検討する」と答えたことについて、宮内庁は、「陛下の訪中の可能性が強まったことは確かだが、両国政府が正式に合意したわけではなく状況はこれまでと変わっていない」と冷静に受け止めている。
宮内庁は訪中に消極的姿勢を示していたが、中国側の再三にわたる招請や、陛下自身が昨年十二月、五十八歳の誕生日を前にした記者会見で「(韓国、中国の訪問は) 政府が関与する問題だが、隣国と交流を深めることは大事だ」と述べている」と前向き発言をされたこともあって宮内庁も検討を始めており、外相招請後の動向が注目される。

天皇訪中 A2

関係重視で思惑一致

日中 交流盛り上がり狙う

【北京4日】三浦俊堂「四日の日中外交相会談で、天皇、皇后両陛下の今秋訪中の方向が固まった背景には、江沢民・中国共産党総書記の来日と合わせ、両国政府が日中国交正常化二十周年を要人交流を通じて盛り上げようとする狙いがある。日米関係と同時にアジア各国との関係重視を打ち出した宮沢政権と、日本の経済協力をテコに改革・開放政策の推進を狙う中国側の思惑が一致した形だ。」

日本政府にとって天皇訪中は、昭和天皇以来の課題。実現すれば、政府レベルを超えた次元での日中戦争の清算を行うことができるとの期待感の一方、民衆レベルの反日感情はまだまだ根強いことから期待通りの成果を生み出せるかどうか危惧（きく）する声もある。こうしたことから、今後は訪問時の天皇の「お言葉」をどういうものにするかが大きな焦点となる。

政府が今回、天皇訪中の方向をほぼ固めたのは、国交正常化二十周年の年に当たる一方、中国と並んで天皇の外遊先として検討してきた韓国が秋の大統領選まで各種選挙が続き、韓国側としても今年の訪問は必ずしも望んでいないと見られるなどの読みからだ。

一方、中国側は八九年の天安門事件後、西側ではい

外相と中国指導部の主な発言

【北京支局4日】四日行われた渡辺外相と中国指導部との一連の会談での主な発言は次の通り。

【渡辺外相】国際社会は依然として民主と人権に強い関心を持っている。積極的な対応をとることが中国の対外関係発展に寄与する。（銭外相に）

【銭其琛外相】国によって異なる発展段階がある。中国にとって生存権、発展権がきわめて重要だ。極力混乱を避けて着実にやってくることで国際社会の友人の理解を得たい。

南北朝鮮の緊張緩和の動きを評価する。日朝交渉をさらに加速させることを期待する。

【李鵬首相】江沢民総書記の訪日は日中関係をさらに進めることとなる。天皇皇后両陛下の訪中は、中国の自信につながっている。

【江沢民総書記】国家関係では、平和共存五原則、

日経 (2)



▽四日、どこ声がかかると一瞬たじろぎ、首相に代わって傍らの近藤官房副長官が「蔵相、コメ頼むぞだ」と蔵相に助言した。初もうで緊張

伊勢神宮を参拝した宮沢首相は参道を埋め尽くした人たちに「おめでとう」と何度も手をあけて新年のあいさつを繰り返して、笑顔で振り返り、小さな女の子にも自ら近づいていって両手の握手するなど大サーピス。

ただ「宮沢さん、コメを頼むしたね。あの時は大蔵大臣で」。 (北京・前田記者)

「そこもあつたかな」などと分かったような分らないような説明に李鵬首相は「」。 (北京・前田記者)

ていような発展段階がある。中国にとって生存権、発展権がきわめて重要だ。極力混乱を避けて着実にやってくることで国際社会の友人の理解を得たい。

南北朝鮮の緊張緩和の動きを評価する。日朝交渉をさらに加速させることを期待する。

【李鵬首相】江沢民総書記の訪日は日中関係をさらに進めることとなる。天皇皇后両陛下の訪中は、中国の自信につながっている。

【江沢民総書記】国家関係では、平和共存五原則、

なかんずく内政不干渉が大切だ。中国は平和的国際環境を求めている。

「天皇訪中、今秋で調整」

江総書記に5月来日要請

渡辺外相

【北京4日＝前田幹（記者）】
渡辺副総理・外相は四日、北京
市内で江沢民共産党総書記、李
鵬首相、錢其琛外相と相次いで
会談した。渡辺外相は外相会談
で、今年の日中国交正常化二十
周年を記念する天皇陛下の訪中
は今秋実現の方向で日本政府内

の調整を進めていく考えを示し
た。天皇陛下の訪中について錢
外相が「二十周年の今年秋の中
国訪問を歓迎する」と、初め
て「秋」という具体的時期を指
して招請したのに対し、「中国
側からの要請にわたる招請を多
くの年内訪日でも含意した。渡

を踏まえて政府内で真剣に検討
していく所存だ」と表明した。
また渡辺外相は江総書記に五月
下旬に来日するよう要請した。
（関連記事2面に）

外相会談では、万里・全国人
民代表大会（全人代）常務委員
長の年内訪日でも含意した。渡
辺外相としては、中国側が天皇
陛下の今秋訪中を強く要望して
いる点を重視し、「真剣に検討
する」との表現で政府内の調整
を積極的に進めていく考えを伝
えたものだ。

二十周年を機とした具体的な
協力案件では①各国との文化交
流を進める国際交流基金（外務
省の外郭団体）の北京事務所設

かけ橋」と位置付け、これを機
に国際政治問題をはじめ、文化、
経済、環境などで協力関係を二
層進展させることを確認した。
錢外相は日中関係について
「大変明るい」と評価したうえ
で「両国が世界平和、アジア太
平洋の平和と発展に尽くすこと
が大変重要だ。国際問題でも両
国の協議、協調をますます強め
ていきたい」と強調、渡辺外相
も同意した。

「大変明るい」と評価したうえ
で「両国が世界平和、アジア太
平洋の平和と発展に尽くすこと
が大変重要だ。国際問題でも両
国の協議、協調をますます強め
ていきたい」と強調、渡辺外相
も同意した。

日経 (7)

江総書記「鄧小平氏は元気」
【北京4日＝飯野記者】中国
共産党の江沢民総書記は四日、
中国訪問中の渡辺外相と会談し
た際、最高実力者の鄧小平氏の
健康状態について日本語で「大
変よろしい」と述べた。江総書
記は「鄧小平氏には大変な特質
がある。いったん人に（仕事を）
渡したらもう関与しない」と語
り、鄧氏が権限を委譲している
ことを確認した。さらに「鄧小
平氏は大変高い所に立ってもの
を見ているので、遠くまでよく
見える」と述べた。

産経 (3)

「鄧氏は大変健康」
渡辺外相に江総書記
【北京四日＝北村経夫】
渡辺外相が四日の江沢民中
国共産党総書記との会談
で、鄧小平氏の健康状態に
ついてたずねたところ、同
総書記は日本語で「大変よ
ろしい」と述べた。

「今秋」実現に前向き

相外 天皇訪中で渡辺外相
銭に表明

【北京4日福島良典】北
京市内の釣魚台迎賓館で四

日行われた日中外相会談
で、銭其琛・中国外相は日
中国交正常化二十周年にあ
たる「今年の秋」と時期を
指定して天皇陛下の中国訪
問を招請、渡辺外相は「真
剣に検討していく」と訪中
実現に前向きに調整を進め
る考えを示した。また渡辺
外相は同市内の中南海で李
鵬首相、江沢民共産党総書
記とも相次いで会談、江総
書記の五月下旬訪日を招請
した。

(2面に関連記事)

両外相は、二十周年の今
年を国際社会に貢献する日
中関係の二十一世紀への架
け橋と位置付けることで一
致した。天皇訪中問題で渡
辺外相は、銭外相の招請に
対し「累次にわたる招請を
多としつつ、これを踏まえ
さらに政府部内で真剣に検
討していく」と答えた。招
請に対し政府はこれまで
「検討中」と返答していた
が、渡辺外相発言は、政府
が天皇訪中実現に向け本格
的な検討に着手したのを受
けたものだ。

朝鮮民主主義人民共和国
(北朝鮮)の核問題などに

報日(1)

天皇訪中、今秋に

総書記来日5月で調整

中国首脳・外相
会談で固まる

【北京4日三浦俊章】
中国を訪問中の渡辺副総理
・外相は四日午後、銭其琛
外相との会談に続いて、李
鵬首相、江沢民共産党総書
記と個別に会談した。一連
の会談の中で、天皇、皇后
両陛下の訪中については、

銭外相が「今年秋の訪問を
歓迎する」と初めて時期を
特定して招請、渡辺外相は
「累次にわたる招請を多と
し、政府部内で真剣に検討
する」と回答し、基本的な
受け入れる考えを表明し
た。政府はすでに両陛下の

訪中実現に向けて内々の調
整を進めており、これで今
秋の訪問はほぼ固まった
と見られる。また江総書記
の来日は五月ごろで調整す
ることになった。

(北朝鮮)の核兵器開発疑
惑については、渡辺外相が
李首相との会談で、国際原
子力機関(IAEA)の核
査察の速やかな無条件受け
入れを求めている日本の立
場を説明した上で、「友人
として(北朝鮮に)助言し
ていたきたい」と要請し
たのに対し、李首相は「北
朝鮮を孤立させるのはよく
ない。最も重要なのは信頼
感の醸成だ」と影響力の行

ついで銭外相は、昨年末の
「朝鮮半島の非核化共同宣
言」合意など一連の動きを
歓迎し、緊張緩和推進へ日
中協力が可能との見解を示
した。

一方、渡辺外相は李首相
に対して、日中国交正常化
二十周年を機に国際社会に
貢献する日中関係を強めて
いく意向を示した宮沢首相
の親書を手渡した。

外相は北朝鮮がIAEA
の検査を受け入れること
の重要性を指摘するととも
に、フッシュミ大統領来日
を控え、人権問題への中国
の積極的取り組みを求め、
米中関係改善に期待を表明
した。

使に慎重な姿勢を示した。
江総書記との会談では、
江氏が米中関係に關連し
て、「押し付けは避けるべ
きだ。各国のおかれている
伝統、現実を尊重すべき
だ」として、人権問題を重
視する米政府の対応をけん
制した。

中国 両陛下の今秋訪中を招請

外相「真剣に検討」

江沢民総書記 5月下旬に来日

【北京四日】北村経夫（中国を訪問中の渡辺外相は四日、北京市内で銭其琛外相、李鵬首相、江沢民・中国共産党総書記と相次いで会談した。この中で銭外相は日中国交正常化二十周年にあたって天皇、皇后両陛下の中国訪問について「本年秋の訪問を歓迎する」と初めて具体的な時期を明示して招請した。渡辺外相は「政府部内で真剣に検討していきたい」と前向きな姿勢を示した。北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の核査察問題では、渡辺外相が国際原子力機関（IAEA）の査察受け入れを北朝鮮に助言するよう求めたが、中国側は「北を孤立させるべきでない」と原則論を主張するにとどまった。

（2面に関連記事と会談要旨）

日中外相会談は北京市内の釣魚台（迎賓館）で約三時間四十分行われた。両外相は、国交正常化二十周年にあたる今年を「二十一世紀のかけ橋」と位置づけ、国際社会の平和と安定のために協力関係を強化していくことで一致。具体的には、カンボジア和平問題や環境問題などで両国が協力していくことを確認した。「二十周年」の要人交流としては、天皇、皇后両陛下の中国訪問問題のほか、江沢民・中国共産党総書記の来日と万里・全国人民代表大会常務委員長、楊尚昆副委員長招待による年内来日で合意した。中国共産党総書記の来日は、昭和五十八年十一月の胡耀邦総書記（当時）以来九年ぶり。

両国関係では渡辺外相が中国の改革・開放路線を引き続き支援していく考え、表明。さらに軍縮・軍備管理問題でミサイルの拡散防止をねらいとするミサイル関連技術輸出規制（MTCR）への早期加盟と、西側諸国で関心の強い人権問題や軍備管理・軍縮問題について中国側の一層の努力を求めた。

これに対し、中国側はMTCR加盟については「すでに参加の意思は表明しており、約束は守る」と表明。人権問題については銭外相が「国によって発展段階が異なり、生存権と発展権が守られることが極めて重要」と原則論を強調しながらも、「着実に発展を進め理解を得たい」と述べるにとどまった。

北朝鮮の核査察問題に關連して、銭外相は韓国と北朝鮮が「非核化宣言」に合意するなど緊張緩和の動きが活発化していることを高く評価し、「中国はこれまでも朝鮮半島の非核化を主張しており、実現すること」を期待している」と強調、

日朝国交正常化交渉の早期妥結を促した。これに関連、渡辺外相が北朝鮮がIAEAの査察を受け入れることが最も重要だと指摘、北朝鮮に影響力を持つ中国側の協力を求めたが、銭外相は言及を避けた。

このほか、中国側が七千億円のぼろの第三次エネルギー借款（輸出入銀行資源開発ローン）を求めたのに対し、渡辺外相は「近いうちに結論が出るだろう」と前向きな姿勢を示した。

両国関係では渡辺外相が中国の改革・開放路線を引き続き支援していく考え、

1/6 サウス・エイト・モーター・ホスト 第五

(材料元 監製 仁田 氏)

注意

1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線2171、2174）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線3169）に連絡ありたい。

電信写

08-018

大 政事外外儀官
大 務務 典房
臣秘官官審審長長

北経環 査総 外研
大大ア 察括 長
使使大 審審

総口対文会厚情研

察人團在儀警史オ

外 報 官
参報際内外

文 長
密一二

参政保対旅外

審④東
参北東西

北米長
審②保地

中南長
参一二

欧 長
審西②洋
西東

参一二アア

次総経途
審経漁国
経エ国
安ネ二

審海 審準

経協長
審④国開無
参調技有理

条長
審条協規

国 長
審政経人
参軍社

科 審
科原

情調長
参④調
企安

総 番 号 R000672

主 管

月 6日
平成 4年 1月 6日

香 港 発
本 省 着

亜 中

外 務 大 臣 殿

久保田 総 領 事

大臣訪中（てん皇訪中問題：報道振り）

第4号 至急（ゆう先処理）

（以下FAX送信 HN1344-01）

6日付当地英文有力紙「サウス・チャイナ・モーニング・ポスト」は、ウィリー・ラム記者の署名記事で、「天皇の訪中が暗礁に乗り上げた」と題し、本大臣の訪中につき報じているところ、要旨次のとおり。（当館より同記者に質したところ、AP、AFP他の外電をベースに書いた由）

1. 北京と東京はお互いの特別な関係を歌い上げることには成功したが、天皇アキヒトの訪中に合意することには失敗した。渡辺大臣に同行した外務省のスポークスマンの森本せいじは、日中国交正常化20周年のクライマックスにおける天皇訪中という中国側の招待については、誠実に検討していると語った。

2. 天皇訪中の決定が遅れている理由の一つとして、森本はこの訪問が国際的な非難を浴びることを懸念しているからであると述べた。東京の外交筋は、北京との関係改善において、日本は西側諸国よりあまりに先を歩きたくないと思っているようだと語った。

3. また、天皇の訪中が中国における反日反応を点火するのではなかろうかと日本側は心配していると分析筋は語った。さらに反体制知識人らが、日中の20周年の機会を利用して、日本側に戦争賠償を求めたり、日本政府に公開の謝罪を求めたりする動きがあることを中国筋は明らかにした。

中国に転電し、瀋陽、上海、広州に転報した。（了）

天皇訪中 file

S. C. M. Post - 6 JAN 1992

2/2

Deadlock over trip by emperor

By WILLY WO-LAP LAM and agencies

BEIJING and Tokyo have pledged a special relationship with each other but failed to come to an agreement on the visit to China by Emperor Akihito.

On the third day of his visit to Beijing, Japanese Deputy Premier and Foreign Minister Mr Michio Watanabe indicated both sides considered the year 1992 to be "a bridge to the next century" for bilateral ties.

However, Mr Watanabe, who held talks with Vice-Premier Mr Wu Xueqian yesterday morning, did not give his hosts a definite reply concerning Beijing's invitation to the emperor.

Japanese Foreign Ministry spokesman Mr Seiji Morimoto said Tokyo was "seriously considering" the invitation, which the Chinese hope would be the climax to festivities surrounding the 20th anniversary of

the establishment of relations with Japan.

He said yesterday "concerns about international condemnation of such a visit" were one reason for the lack of a decision.

During talks with leaders including Chinese Communist Party General Secretary Mr Jiang Zemin on Saturday, Mr Watanabe had extended invitations for Mr Jiang and National People's Congress Chairman Mr Wan Li to visit Japan later this year.

Diplomats in Tokyo said Japan did not want to be seen as moving too far ahead of its Western allies in promoting ties with Beijing.

"During the China visit by [former Japanese premier] Toshiki Kaifu last August, the Chinese also pressed for invitations for [Premier] Li Peng and [President] Yang Shangkun," a diplomatic source said.

"However, Tokyo has settled for Jiang and Wan,

both of whom are not directly tainted with the Tiananmen Square massacre."

Analysts said Tokyo was also concerned the emperor's visit might ignite anti-Japanese reactions in China.

Chinese sources said a handful of dissident intellectuals planned to take advantage of the 20th anniversary of Sino-Japanese ties to lobby for Japanese compensation for war-time damages.

They also wanted their Government to press Tokyo for an open apology for atrocities committed during World War II.

Diplomats said, however, ties between the two neighbours should continue to improve.

During Mr Watanabe's visit, the Chinese pressed Tokyo on a new loan of 700 billion yen (HK\$43.4 billion) for infrastructural projects.

The Japanese Deputy Premier asked for Beijing's help in persuading North

Korea to put its nuclear development programme on hold.

Mr Morimoto indicated the two countries agreed on the need for regional nuclear controls, adding: "We shared the view that the nuclear policy of North Korea is of common concern."

Chinese leaders assured Mr Watanabe that Beijing would follow through on its pledge to join the Missile Control Technology Regime.

Another Japanese diplomat said while Mr Watanabe "touched on" human rights, Tokyo did not believe in putting direct pressure on the Chinese.

"We do not throw Beijing's shortcomings in its face," he said, "not just because of Japanese pragmatism but because we think the best way to support China's reform and opening is to work with the current leadership".

(3)

1/7 朝日報道 (政府筋)

中国とタジクが貿易協定 (A)

【中国通信＝東京】ドゥシャ
ンベ発新華社電によると、中国
と旧ソ連のタジクは5日、経済
貿易協定に調印するとともに、
それぞれの国に通商代表事務所
を設置することで合意した。

中国主席、シンガポール訪問

【シンガポール 6日＝時事】中国の楊尚昆国家主席は7日から4日間の日程でシンガポールを公式訪問する。中国国家主席のシンガポール訪問は初めてで、ゴー・チョクトン首相ら首脳との会談を通じ、2国間の経済協力や東南アジアの安全保障問題などについて意見を交換する。

①T
海外
時事
6日

- ◆NY・タイムズ(米) 「北」との和解は慎重に——ブッシュ大統領が韓国首脳に警告
- ◆ザ・タイムズ(英) 滅絶が総選挙の争点に
- ◆ルモンド(仏) 米大統領、アジアでの軍事プレゼンス維持を望む
- ◆プラウダ(ロシア) トビリシの紛争、死者84人
- ◆人民日報(中国) 安徽省幹部、農村で思想教育展開
- ◆朝鮮日報(韓国) 南北首脳会谈実現に向け協力要請——盧大統領が米大統領に

訪中の渡辺外相帰国

三日から中国を訪問して渡辺美智雄外相は六日午後、成田着の中国国際航空機で帰国した。

渡辺外相は、「帰路立ち寄った上海で黄菊・上海市長と会談。この中で、外相は、今回の訪中に関連し、「米中関係改善について江沢民・共産党総書記や李鵬首相らと率直に意見交換した。米中両国それぞれの事情を理解できるので、プッシュ

米大統領来日の際、中国側の考えを米側に伝達する」と述べた。

外相、中国から帰国

渡辺外相は六日午後、中国訪問を終え、成田着の中国国際航空機で帰国した。

天皇訪中

9月29日前後
日程を調整へ

政府筋は六日夜、天皇皇后両陛下の訪中問題について「日中国交正常化二十周年にあたる九月二十九日の前後をめどとして、二月から宮内庁、首相官邸、外務省間の調整を始める」と語り、今秋実現の方向で、政府として具体的な検討に入ったことを確認した。先の渡辺副総理・外相の訪中の際、銭其琛外相が「今年秋の訪中を歓迎する」と招請、渡辺外相も「真剣に検

討する」と応じたことで、
今秋実現の方向がほぼ固ま
ったと見られていた。

【北京6日＝飯野記者】中国の貿易額は五十五億^がに達した。前年比四四％の伸びで、中国にとつては旧ソ連を抜いて六番目の貿易相手になった模様。

中韓貿易額が44%増
91年

昨年未だ調印された貿易協定によつて、両国は九二年から相互に最恵国待遇を供与することが決定、今後中韓貿易は一段と拡大する見通し。中国と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の貿

易が五億^{ドル}前後で伸び悩んでいるのとは対照的な動きとなっている。

中国にとって最大の貿易相手は香港で、以下日本、米国、ドイツ、という順になってきた。

日本商社筋は「最恵国待遇がなかったのに五十五億ドルまで拡大したのは格異。九二年からは韓国製品が日本製品の市場を相奪うだろう」と指摘している。

【香港6日】北代記者「台湾當局が発表した九一年の貿易統計（速報）によると、同年の貿易黒字額は、前年比五・三三％増の百三十一億九千万米ドルに達した。台湾の労働集約型産業の生産拠点の海外シフトに伴う東南アジア諸国への輸出増や、香港経由の对中国間接輸出が増えたのが主因。一方、台湾ドル高がこのまま続く場合、九二年の貿易黒字は七十九億米ドル程度に縮小すると予想している。

(12) 91

11.
参考

1/8
イズヴェスチヤ紙
報道振り

10/05:42

5885 01/08 P01 R003705

丁

注意

電信写

本館の取扱いは標準を所せられたい。
 本館の内容に関する照会には検閲班（内線2171、2174）
 その他本館の取扱、等に関する照会には調整班（内線3169）
 に連絡ありたい。

08-036

大 政事外外儀官
 大 務次 英房
 臣 秘書官 審審長 長

北 経 環 査 総 外
 大 大 ア 察 括 防
 使 使 大 審 審 長

③口対文会厚情研

察人⑥在儀警史オ

④報官
 ④④④④④

④④ 審一二

④④ 順移長
 参政保対旅外

④④ 審地中環
 参北東西

④④ 長

④④ 水長
 審二二保地

④④ 中南長

④④ 参一二

④④ 西⑦洋
 西東

④④ 近ア

④④ 参一二アア

④④ 次③経途

④④ 審経海區

④④ 経エ區

④④ 安ホ二

④④ 審海 審海

④④ 審二國調無

④④ 参調技有理

④④ 審条協規

④④ 参政総人

④④ 参軍社

④④ 科原

④④ 科原

④④ 審二

④④ 安

総 番 号 R003705

月 9日

平成 4年 1月 10日

ソ 速 発
本 省 着

主 管 報 際

外 務 大 臣 殿

枝 村 大 使

黄大臣訪中（海外報道より）

第127号 至急（ゆう先処理）

（以下FAX送信 MW1970-01）

読電客年報聯合第23494号に関し、

1. 1月8日付け、イズヴェスチヤ紙、第5面

2. サヴェンコフ在北京同紙特派員

3. 渡辺（外相）の北京訪問は終わった。

4. 要約（300字）

江沢民総書記の訪日に関する合意は今次訪問の重要な成果となった。中国側は渡辺外相の最初の外遊先が北京となったことを満足をもって受けとめた。中国側は天皇陛下御夫妻の訪中招待を再度行ったが、これに対して渡辺外相は「日本側はこれを真剣に検討する」として慎重な態度を示した。渡辺外相は李鵬首相との会談において中国における人権問題に言及したが、そのソフトなトーンは他の西側諸国からの訪問者のこの問題に関する厳しい態度と対照的であった。旧ソ連邦の崩壊に関して、江沢民総書記は中国は独立国家承認のための政治的指図をとる、連邦の崩壊は中国には影響しないと述べたのに対し、渡辺外相は核兵器管理問題に対する懸念を強調した。

(3)

(1) 報道に関する对外応答要領

天皇陛下

中国課長

西欧第一課長

儀典長

儀典官

儀典官

首席事務官

事務官

(対外応答要領)

天皇陛下の御外遊

平成3年12月25日

儀典官室

(10
2089)

問. 25日付東京新聞は、政府は天皇皇后両陛下の来年の御外遊先を中国または西欧諸国のいずれかとする方針を固めた旨報じているところ、事実関係如何。(関連記事別添)

答. 天皇皇后両陛下の明年の外国御訪問計画については、全く未定である。

(更問. その他の問いに対し)

答. 未定の外国御訪問計画を前提とした仮定の質問には、事柄の性質上コメントは差し控えさせて頂きたい。

12月25日

東京新聞

1991年(平成3年)

両陛下、来年の外遊先

中国か西欧諸国

年内に決定

政府は二十四日までに、来行事などを考慮すると、一年の天皇、皇后両陛下の外遊先を中国、西欧諸国のいずれかとする方針を固めた。年内に最終的に決め、新年早々から相手国との間で準備に着手する。外遊時期は、どちらの場合も来秋になるとみられる。

このため、政府は原則として「一年一回程度」とすることにした。来年の外遊先としては、来年が国交正常化二十周年に当たり、楊尚昆国家主席ら各要人から両陛下への招待が既に行われている中国と、一九七一年の故昭和天皇のご訪問以来、日本の天皇が訪問されていない西欧諸国のいずれかを選択する方針だ。しかし、宮内庁から「日本を訪問する外国元首の歓迎

王室から「来年は日程的に両陛下をお迎えすることは難しい」との意向が非公式に伝えられており、来年訪問されるとなれば「英国抜き」となる。

政府部内には、皇室と英国王室の伝統的な友好親善関係から、英国抜きのご訪問は好ましくないとの考えもあり、二つの候補地の中では中国が有力となっている。ただ、中国についても天安門事件以来の人権問題が完全解決していないことを理由に、時期尚早との考えが政府部内にあり、流動的要索が残っている。

1/4 サインケイ報道 日仏対外応答要領

1/4 夜に共同電 日仏 天皇退位中 日 報に 一 日

日 皇 退 位 中 日 皇 退 位 中 日 皇 退 位 中

1/4 の日中外相会談 日 皇 退 位 中 日 皇 退 位 中 日 皇 退 位 中

日 皇 退 位 中 日 皇 退 位 中 日 皇 退 位 中

対外応答要領

平成4年1月4日

アジア局中国課

問1. 4日、北京で行われた日中外相会談の報道には、一部に天皇陛下、皇后陛下の御訪中の今秋実施が固まった旨報じているものもあるが、事実関係如何。

答 今次日中外相会談において、中国側より、本年秋に天皇、皇后両陛下の御訪中を歓迎する旨の招請が行われ、渡辺大臣より、日本政府として中国側の招請を踏まえ、真剣に検討すると述べたことは事実であるが、本件はまさに、目下検討中であり、政府として結論に達している訳ではない。

問2. 江澤民総書記、万里全人代常務委員長の訪日は何時になるのか。

答 中国側とは江澤民総書記が本年前半中に訪日することで合意した。具体的時期については今後検討されることとなる。渡辺大臣より、江澤民総書記に対して訪日は5月下旬との発言があったが、右は日本側の案を述べたものであり、今後中国側と調整を行っていく予定である。なお、万里全人代常務委員長については我が国国会の賓客として年内に訪日予定であり、時期は未定である。

両陛下訪中で調整

経産 (1)

渡辺・銭外相会談始まる

【北京四日＝北村経夫】中国を訪問中の渡辺外相は四日午前九時（日本時間同十時）から、北京市内の釣魚台（迎賓館）で銭其琛外相と会談した。両外相は今年が日中国交正常化二十周年にあたり、両国関係の一層の強化を確認するとともに、これを記念する要人の相互訪問、行事などについて意見調整。江沢民・中国共産党総書記の今年前半の来日で合意した。また、渡辺外相は北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の核査察問題を取り上げたほか、米中関係改善に向けての中国側の努力を要請した。

江沢民総書記来日 今年前半で合意

会談の冒頭、銭外相は「両国」に対し、渡辺外相は「両国」と語った。「国交正常化二十周年にあたり、それぞれ立場は協力し、それぞれの立場で国際社会の平和と安定の念すべき年」と強調。これ

また、渡辺外相は中国側が繰り返し強く求めている「天皇、皇后両陛下の中国訪問について、銭外相から改めて両陛下の訪中招請を確認したうえで、今後外交ルートを通じて調整をはか

訪中問題について、銭外相から改めて両陛下の訪中招請を確認したうえで、今後外交ルートを通じて調整をはか

産経 (1面)

諸にこたえる方向になつてい。天皇陛下訪中が実現すれば、「二十周年記念」を飾る最大の行事になる。北朝鮮の核問題について渡辺外相は、十二月三十一日に韓国と北朝鮮が非核化共同宣言に合意したことを「朝鮮半島の緊張緩和、平和と安定に資するもの」と評価する一方、宣言に北朝鮮の国際原子力機関（IAEA）の査察受け入れについて言及がなかったことを

指摘。そのうえで、査察の早期・無条件実施と核燃料再処理施設の廃棄に向け、北朝鮮に大きな影響力を持つ中国の協力を要請。さらに、渡辺外相は、フツシュ米大統領の来日を踏まえ、米中関係の改善を強く要請。具体的には人権問題など民主化、武器拡散防止で中国側の努力を求めた。特に武器拡散問題では、通常兵器移転に関する国連報告制度について、中国が創設を決めた国連総会での投票に参加せず態度を明確にしていなかったため、全面的な参加を促した。

1/6 時事「独自」な「対外」要領

(此「信賴」を「主」)

対外応答要領

平成4年1月¹⁵/₄日

アジア局中国課

問、6日、時事は、先に北京で行われた日中外相会談に関連して、北京の信頼すべき筋が明らかにしたとして、天皇陛下の御訪中は10月上旬の5日間であると報じているところ、事実関係如何。

(記事別添)

答、本件記事はその全体が完全な推測記事であり、事実無根である。

天皇陛下の御訪中については、今次日中外相会談において、中国側より、本年秋に天皇、皇后両陛下の御訪中を歓迎する旨の招請が行われ、渡辺大臣より、日本政府として中国側の招請を踏まえ、真剣に検討すると述べたことは事実であるが、本件はまさに、目下検討中であり、何等結論に達している訳ではない。

(了)

(メモ②⑧)

★**独自**

◎天皇訪中は10月上旬の5日間

||日中両政府が原則合意||

〔北京六日時事〕当地の信頼すべき筋が六日明らかにしたところによると、日中両国政府は天皇、皇后両陛下の訪中を今年十月上旬に実施することで原則的に合意した。期間は天皇陛下の意向もあつて長めに設定することにしており、五日間となる見通しだ。

天皇陛下の訪中については、先の渡辺外相の訪中の際、中国の銭其琛外相が「国交正常化二十周年に当たる今年秋の両陛下訪中を歓迎する」と初めて時期を特定して招請し、渡辺外相が「真剣に検討する」と答えている。同外相が招請の受け入れを明確にしなかったのは手続きを重視したためで、日本側は招請を事実上、受け入れた。しかも、両外相は公式会談のあと、両国外務省高官を含めて非公式の話し合いを行い、訪中の具体的な日程について意見を交換し、十月上旬の五日間という線が出たという。

天皇陛下の訪中を十月上旬に設定しようとしているのは、九月二十九日が日中国交回復二十周年の当日で、その前後に政府および民間による各種の記念行事が行われることになっており、訪中を一連の記念行事の最後にもってくることを考えたためだ。

日本政府は今後、この線で中国政府とさらに具体的日程調整を進めていくことにしている。また、戦前に日本の植民地とされ、被害を受けた韓国に対し、日本政府が天皇陛下の訪中を先に実施することについて意見を求めたところ、韓国側から「今年は大統領選挙などがあつてご訪問は受け入れる状況にはない」との回答があり、反対しないとの感触を得たという。このため、日本政府としては国内での手続きが終了した段階で、特使を韓国に派遣し、事情説明を行うことにしている。

(了)

ノリサ、ノイ報道、且、対外、応答、要領、

（外務省筋）

GM0897

3

※総第 002385号003公館宛 GM0897-022
 平成 4年 1月 11日 15分 5秒 受付

FAX

電 信 案

取 注

5—9

電信課長

大 臣 秘書官 政 務 次 官 事 務 次 官 外務審議官 外務審議官 官 房 長	主管 3月11日	※発電係 1 7 2 8 起 案 平成 4 年 1 月 11 日 起案者 電話番号 泉 2426
協議先		

(※印欄内は電信課記入)

(注意) 1枚目は、機械で処理しますので、折り曲げない様願います。

(八〇字)

在 中 国	佐 田 総領事	あて	外務大臣 発
件 名 天皇・皇后両陛下の中国御訪問 (対外応答要領)			
主管・文書記号 亜 中	※電番 第60号	大至急 普通	至急 (優先処理)
※転電 転送 在 香港・韓国(谷野局長)	※転電番号 合第484号	大至急 普通	至急 (優先処理)
大使・総領事あて			
※			
00238587 優先 TYUUGOKU 等003 F電			

(昭和六三・六・三十改正)

GB-1

外 務 省

回覧番号

(三八〇字)

11日付サンケイ(夕刊)は、第1面トッ
プで天皇、皇后両陛下の御訪中に關し、本年
10月22日から27日までの日程で、日中兩國政
府が原則的に合意した旨報いており、こ
う、因にそのほかの要領と別FAX信す。

別FAX信と共に香港に韓国(外務省)に転送した。

(3)

3

GM0900

FAX

※総第 002388号003公館宛 GM0900-03

平成

4年

12月

11日

午後5時5分受付

FAX信

電信案

取注

子-子

電信課長

大臣秘書官
政務次官
事務次官
外務審議官
外務審議官
官房長

主管

了中

※発電係

1

2

起案

平成 4 年 / 月 / 日

起案者

電話番号

泉

2426

協議先

(※印欄内は電信課記入)

(注意) 1枚目は、機械で処理しますので、折り曲げない様願います。

(八〇字)

在 中 国

大 使 館
総領事

あて

外務大臣 発

件 名

天皇・皇后両陛下の中国御訪問 (対外応答要領)

主管・文書記号

座 中

※電番

FAX信
FAX信

大至急

普通

至急

(優先処理)

パターン・コード

転電

転送

転報

在 香港、韓国(釜山)

※転電番号

FAX信

大 使 館
総領事あて

大至急

普通

至急

(優先処理)

往電座中第 60 号別 FAX 信。



※

00238829

優先

TYUUGOKU

等003 F信

GB-1

外 務 省

回覧番号

(昭和六三・六・三十改正)

取扱注意

対外応答要領

平成4年1月11日

アジア局中国課

問、11日付サンケイ新聞（夕刊）は、第1面トップで天皇、皇后両陛下の御訪中に関し、本年10月22日から27日までの日程で行われることが日中両国政府間で原則的に合意したこと等について報じているところ、事実関係如何。

答、本件記事は完全な推測記事であり、本件については政府部内で検討中である。

1月11日
サニケイ
(夕刊)
オ1通

GM0900

天皇陛下訪中、10月22—27日

原則合意明らかに

自民内に、なお慎重論

天皇、皇后両陛下がことし十月二十二日から二十七日の日程で中国を訪問されることになった。日中兩國政府が十一日までに原則的に合意したもので、外務省筋が明らかにした。両陛下の中国訪問は、かねて中國が強く要請しており、ことが日中外交正常化二十周年にあたることから、政府もこれにこたえることを決断した。この訪問が実現すれば、二十一世紀へ向けて「日中新時代」を画するものになる。

国交正常化20周年で

天皇、皇后両陛下の中国になった経緯があることな
この訪問については、今月四
日北京で行われた日中外
相会談の際、渡辺外相が中
國の錢其琛外相が改めて両
陛下を招請したのにこたえ
る形で、「時期については
十月二十二日から二十七日
で調整したい」と伝えた。
この問題は、昨年八月に
海部首相(当時)が訪中し
た際に、中国側が国交正常
化二十周年に合わせて両陛
下の中国訪問を招請すると
ともに、最高首脳の日目を
提案。日本側も原則的にこ
れを了承。これを受けて政
府は検討を進めてきた。今
月初めの渡辺外相の訪中
で、江沢民・中國共産黨總
書記が五月下旬に、万里・
全國人民代表者大會常務委
員長が年内にそれぞれ訪日
することが決まっている。
政府部内には、昨年九月
の東南アジア訪問に次ぐ
両陛下の中国訪問には
「アジア地域が続く」との
声や、天皇陛下が皇太子時
代にいったんは韓國訪問
が決まり、その後取りやめ

とはしない」(徐外務次)を示しており、日本側は
「官」と柔軟に対応する考え「障害にはならない」とし

ている。

日米自動
協議が来月再
【テトロイト十日AP
DJJ共同】米自動車メ
カー関係者が十日明らか

対外応答要領

平成4年1月11日

アジア局中国課

問、11日付サンケイ新聞（夕刊）は、第1面トップで天皇、皇后両陛下の御訪中に関し、本年10月22日から27日までの日程で行われることが日中両国政府間で原則的に合意したこと等について報じているところ、事実関係如何。

答、本件記事は完全な推測記事であり、本件については政府部内で検討中である。

（了）

天皇陛下訪中、10月22—27日

1月11日
サニケイ
(夕刊)
オ1通

原則合意明らかに

自民内になお慎重論

天皇、皇后両陛下がことし十月二十二日から二十七日の日程で中国を訪問されることになった。日中兩國政府が十一日までに原則的に合意したもので、外務省筋が明らかにした。両陛下の中国訪問は、かねて中國が強く要請しており、ことしが日中外交正常化二十周年にあたることから、政府もこれにこたえることを決断した。この訪問が実現すれば、二十一世紀へ向けて「日中新時代」を画するものになる。

国交正常化20周年で

天皇、皇后両陛下の中国になった経緯があることなど訪問については、今月四日から消極的な意見が強く、自民党内にはなお慎重論がある。しかし、国交正常化二十周年で日中関係が新たな段階に入ることや、韓国がことしは大統領選挙が行われるため、両陛下の中国訪問が先に実現すること、特に特に対していらないなどの理由から両陛下の中国訪問を決断した。この訪問を十月下旬の六日間に設定したのは、①九月二十九日が国交正常化二十周年の当日で、その前後に各種記念行事が行われる②十月上旬には山形で国民体育大会が開かれ、陛下が出席される③陛下はできるだけ長期間の滞在を希望されている④などの点を配慮したものだ。

日中兩國政府は、この日程に沿ってさらに具体的日程の調整を進める。天皇陛下が訪問されれば、過去の不幸な歴史に対する「お言葉」が焦点となるが、中国側は「中国は礼儀の国であり、客を困らせるようなこと

ている。

日米自動車
協議が来月再開
【デトロイト十日AP・
DJJ共同】米自動車メー
カー関係者が十日明らかに

オペレーションルーム送信資料			
件名	対外応答要領の送付	送信日時	1月1日(土) 時 分
		送信枚数	カヴァリングを含め 全 枚
		送信課	局(部) 課(室)
連絡事項			

送信先 (○印)	短縮番号
☒ 外務大臣	
FAX 設置事務当局全幹部	
☒ 総理秘書官	01
☒ 官房長官秘書官	02
☒ 官房副長官秘書官	03
内閣外政審議室長	04
☒ 外務大臣秘書官	05
☒ 事務次官	06
☒ 次官秘書官	07
☒ 外務審議官(政)	08
☒ 外務審議官(経)	09
国際経済担当大使	10
☒ 官 房 長	11
☒ 総括審議官	12
☒ 総務課長	13
☒ 外務報道官	14

☒ 報道課長	15
☒ 国際報道課長	16
文化交流部長	17
領事移住部長	18
アジア局長	19
北米局長	20
中南米局長	21
欧亜局長	22
中近東アフリカ局長	23
経 済 局 長	24
経 済 協 力 局 長	25
条 約 局 長	26
国 連 局 長	27
科学技術審議官	28
情報調査局長	29
☐ 情 報 課 長	30

GM:8022-

※総第125763号001公館宛 GM8022-022

平成※平成310年12月3日 時44分45秒 秒受付

FAX

電 信 案

秘
無 期 限

電信課長

大 臣 秘書官 政 務 次 官 事 務 次 官 外務審議官 外務審議官 官 房 長	主管 中国課長	※発電係 2 起 案 平成3年12月11日 起案者 電話番号 2424
協議先		

(※印欄内は電信課記入)

(注意) 1枚目は、機械で処理しますので、折り曲げない様願います。

(八〇字)

在 中	大使 総領事	あて	外務大臣 発
件 名 事務連絡			
主管・文書記号 了中	※電番 △ 第3702号	大至急 普通	至急 (優先処理)
転電 転送 在 転報	※転電番号	大至急 至急 普通 (優先処理)	パターン・コード
植田参事官へ 本号中国課長代理より			
次の資料を別FAX信にて送付します。			
別FAX信1. 「天皇陛下等過去に好む御膳等」			
別FAX信2. バトリノ蘭女五話目			
※			
12576389 優先	TYUUGOKU	F電	
GB-1	外 務 省	回覧番号	

(昭和六三・六・三十改正)

GM:8022- 1 2

(三八〇字)

別FAX信3. ASEAN 訪問の際のお言葉

(3/6)

GM:8023-

※総第125764号001公館宛

GM8023-0

平成 3 年 10 月 12 日

12 時 46 分

13 分

日 秒 受付

FAX 信

電 信 案

秘
無 期 限

FAX

電信課長

大 臣
政 務 次 官
事 務 次 官
外 務 審 議 官
外 務 審 議 官
官 房 長

主管

中国課長

※発電係

1

2

起 案

平成 3 年 12 月 11 日

起案者 電話番号

木野 2424

協議先

(※印欄内は電信課記入)

(注意) 1枚目は、機械で処理しますので、折り曲げない様願います。

(八〇字)

在

中国

大 使
総領事

あて

外務大臣 発

件 名

事務連絡

主管・文書記号

了申

※電番

FAX 信
FAX 信

大至急

普通

至急

(優先処理)

パターン・コード

[Redacted]

転電

転送 在

転報

※転電番号

大 使・総領事あて

大至急

至急

普通 (優先処理)

往電 3602 号 別FAX信1.

※

12576405

優先

TYUUGOKU

F 信

GB-1

外 務 省

回覧番号

(昭和六三・六・三十改正)

天皇陛下等「過去」に対する御発言

3. 8. 13

ア地改

秘

(インドネシア)

- ・大統領代行、宮中晩餐会、昭和天皇お言葉、43. 3. 29)

貴国と日本とは、共にアジアの一員として、また古くから深い関係のある間柄として、友好的な接触を続けて参りました。先年の誠に不幸な戦争の後も、この伝統的な関係は急速に回復し、いまや、新たな両国の親善関係が日ましに深まっておりますことは、慶賀に堪えないところであります。

(フィリピン)

- ・マルコス大統領、昭和天皇お言葉 (41. 7. 27)

貴国と日本とは共にアジアに位置する国家として、古く文化と伝統のつながりも深く、友好関係を保持して参りました。先年の誠に不幸な戦争の後も、両国の親善関係は漸次回復し、閣下が御就任になってからは、

- ・アキノ大統領訪日時宮中晩餐会 (61. 11)

言及なし。

(マレーシア)

- ・マレーシア国王訪日時御会見、宮中午餐

言及なし

(シンガポール)

- ・リー・クアン・ユー首相訪日時 (数度)

言及なし

(ブルネイ)

- ・ブルネイ国王来日時 (59. 3)

言及なし

(ASEAN全体)

- ・海部総理、シンガポール政策演説 (3. 5. 3)

私は、あらためて今世紀前半の歴史を振り返り、多くのアジア・太平

洋地域の人々に、耐えがたい苦しみと悲しみをもたらした我が国の行為を厳しく反省するものであります。我が国民はそのような悲劇をもたらした行動を二度と繰り返してはならないと固く決意し、戦後40数年にわたり、平和国家の理念と決意を政策に反映する努力をしてきました。

(韓国)

・ノテウ大統領来日の際の陛下お言葉 (平成2年5月24日)

このような朝鮮半島と我が国との長く豊かな交流の歴史を振り返るとき、昭和天皇が「今世紀の一時期において、両国の間に不幸な過去が存したことは誠に遺憾であり、再び繰り返されてはならない」と述べられたことを思い起こします。我が国によってもたらされたこの不幸な時期に、貴国の人々が味わわれた苦しみを思い、私は痛惜の念を禁じえません。

・全大統領訪日時のお言葉 (59. 9. 6)

両国の間に不幸な過去が存したことは誠に遺憾であり、再び繰り返されてはならないと思います。

・中曽根総理午餐会発言 (59. 9. 7)

我が国が貴国に負うところの大きかったこの日韓交流史の中で、遺憾ながら今世紀の一時期、我が国が貴国及び貴国国民に対し、多大の苦難をもたらしたという事実を否定できません。私は、政府及び我が国民がこのあやまちに対し、深い遺憾の念を覚えるとともに、将来を固く戒めようと決意していることを表明したいと存じます。

日本政府及び日本国民は、戦後、こうした過去の反省に立ち、誠意を持って、新たな両国関係を作り上げるための努力をいたして参りました。

・日韓共同コミュニケ (40. 2. 20)

このような過去の関係は遺憾であって、深く反省している。

中曽根総理訪韓時、歓迎晩餐会における答辞 (58. 1. 11)

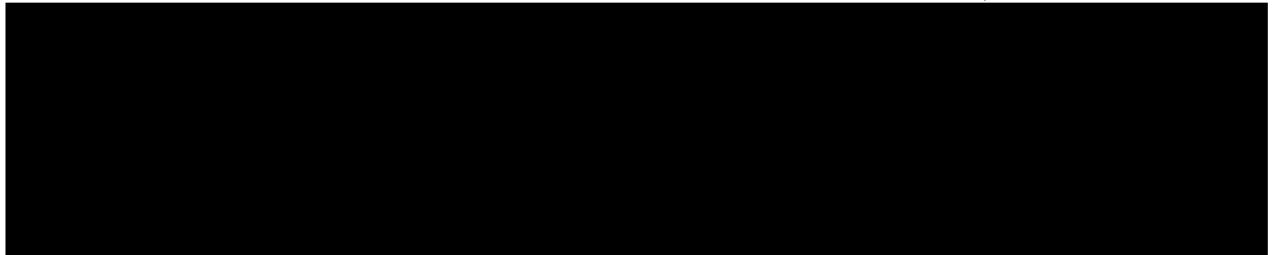
日韓両国の間には、遺憾ながら過去において不幸な歴史があったことは事実であり、我々はこれを厳粛に受け止めなければなりません。過去の反省にたって、――――

(中国)

・田中総理訪中時、周恩来総理主催招宴における挨拶（47. 9. 25）
過去数十年にわたって、日中関係は遺憾ながら、不幸な経過を辿って参りました。この間我が国が中国国民に多大の御迷惑をおかけしましたことについて、私は、改めて深い反省の念を表明するものであります。

・トウ小平副首相とのご会見（53. 10. 23）

両国の間には非常に長い歴史があり、その間には一時、不幸な出来事もあったけれども（トウ副首相）お話のように過去のこととしてこれからは長く両国の親善の歴史が進むことを期待しています。



・海部総理北京政策演説（3. 8. 11）

日中両国の間には、長い友好の歴史の中で日本が深く反省すべき不幸な一時期がありましたが、この歴史を克服し、両国関係を真の友好協力関係に変容させるには、双方の忍耐強い努力と限りなき情熱が必要でありました。

(米国)

・フォード大統領歓迎宮中晩餐会（49. 11. 19）

太平洋を隔てて相接する両国は、2世紀にまたがる年代を通じて、いろいろの起伏はありましたが、———このような友好的な両国の間にも、一時はまことに不幸な時代をもちましたことは遺憾なことでありました。

・ホワイトハウスにおける歓迎式の際の御答辞（陛下訪米、50. 10. 2）

両国の国民は、静けさの象徴である太平洋の波風の立ち騒いだ不幸な一時期の試練に耐え、今日、ゆるぎない友好親善のきずなを築き上げて

おります。

- ・ フォード大統領主催晩餐会における陛下御答辞（陛下訪米、50. 10. 2）

私は多年、貴国訪問を念願にしておりましたが、もしそのことが叶えられた時には、次のことを是非貴国民にお伝えしたいと思っておりました。と申しますのは、私が深く悲しみとする、あの不幸な戦争の直後、貴国が、我が国の再建のために、温かい好意と援助の手を差し延べられたことに対し、貴国民に直接感謝の言葉を申し述べることでありました。

（欧州、陛下欧州訪問）

現在検索中。✓

（国内向けお言葉）

- ・ 全国戦没者追悼式（63. 8. 15）

先の大戦において、戦陣に散り、戦禍に倒れた数多くの人々やその遺族を思い、今もなお、胸が痛みます。

- ・ 特別ご会釈お言葉（62. 10. 24、沖縄平和記念堂にて、御名代皇太子殿下代読）

先の大戦で戦場となった沖縄が、島々の姿をも変える甚大な被害を蒙り、一般住民を含む数多の尊い犠牲者を出したことに加え、戦後も長く多大の苦労を余儀なくされてきたことを思うとき、深い悲しみと痛みを覚えます。ここに改めて、戦陣に散り、戦禍に倒れた数多くの人々やその遺族にたいし、哀悼の意を表するとともに、戦後の復興に尽力した人々の苦労を心からねぎらいたいと思います。

- ・ 皇太子殿下時代の沖縄県民に対する談話（50. 7. 17）

過去に、多くの苦難を経験しながらも、常に平和を願望しつづけてきた沖縄が、先の大戦で、我が国では唯一の、住民を巻き込む戦場と化し、幾多の悲惨な犠牲をはらい、今日に至ったことは忘れることのできない大きな不幸であり、犠牲者や遺族の方々のことを思うとき、悲しみと痛恨の思いにひたされます。私たちは、沖縄の苦難の歴史を思い、沖縄戦

における県民の傷痕を深く省み、平和への願いを未来につなぎ、ともどもに力を合わせて努力していきたいと思います。払われた多くの犠牲は、いつときの好意や言葉によってあがなえるものではなく、人々が長い年月をかけて、これを記憶し、一人一人、深い内省の中にあって、この地に心を寄せつづけていくことをおいて考えられません。

県民の皆さんには、過去の戦争体験を人類普遍の平和希求の願いに昇華させ、これからの沖縄県を築き上げることに力を合わせていかれるよう心から期待しています。

GM:8024-1

※総第125765号001公館宛 GM8024-24

平成30年12月27日 秒受付

FAX信

電 信 案

秘
無 期 限

電信課長

大臣
秘書官
政務次官
事務次官
外務審議官
外務審議官
官房長

主管

※発電係

起案

平成30年12月11日

起案者 電話番号

2424

協議先

(※印欄内は電信課記入)

(注意) 1枚目は、機械で処理しますので、折り曲げない様願います。

(八〇字)

在

中国

大使
総領事 へて

外務大臣 発

件名

事務連絡

主管・文書記号

了中

※電番

FAX信

大至急

普通

至急

(優先処理)

パターン・コード

転電

転送 在

転報

※転電番号

大使・総領事へて

大至急

至急

普通 (優先処理)

往電 3702 号 別 FAX 信 2

※

12576518

優先

TYUUGOKU

F信

GB-1

外 務 省

回覧番号

(昭和六三・六・三十改正)

平成三年十月二十二日

GM:8024-2

宮中晩餐におけるお言葉

このたび、オランダ国ベアトリックス女王陛下には、ウィレム・アレキサンダー皇太子殿下とともに、我が国を御訪問になりました。三百年をはるかに越える日蘭間の交流の歴史の中で、初めて貴国から女王陛下を我が国にお迎えできますことは、誠に喜ばしく、心から歓迎の意を表したいと思います。また、私の即位の礼においてになりました皇太子殿下を再びお迎えすることも、私の深く喜びとするところであります。貴国は、我が国にとって、欧州諸国の中で最も長く修好を維持してきた国であります。日蘭間の歴史的友好関係は、千六百年、オランダ船「デ・リーフデ号」が大分県臼杵藩に漂着し、続いて千六百九年、貴国に対し我が国との貿易を許可する朱印状が交付されたときに遡ります。その後、二百年以上にわたる我が国の鎖国時代においても、日蘭両国は、我が国が西洋の世界に向けて開いていた唯一の窓であった長崎の出島を通じ、貿易を行ってきました。また、我が国は、出島を通じて貴国がもたらした西洋文明の知識を学ぶことができました。今から二百年以上の昔、オランダ語の解剖学書を訳し、出版した杉田玄白が自分の思い出などを書き記した『蘭学事始』を読みますと、貴国の進んだ科学に対する我が国の人々の憧憬と、それを学び、それを人々のために役立てようとする熱意に打たれます。開国後の我が国の発展を考えると、さ如何に貴国との交流によって我が国が恩恵を受けたかに思いを致すのであります。さらに、開国後も、日本が招いた貴国の技師等は治水事業等の分野で大きな業績を残されました。このように、貴国は日本の近代化の過程に極めて密接に関与してこられました。

このような友好関係が第二次世界大戦によって損なわれたことは、誠に不幸なことであります。戦後日本は、このような戦争の惨禍を再び繰り返すことのないよう、平和国家として生きることを決意し、世界の平和と繁栄のために積極的に協力しつつ、一貫して貴国を始めとする世界各国との間で新たな友好関係を築くよう努力してきました。いまや日蘭両国間では、幅広い分野で友好と協力の関係が見られるようになりました。これは、喜ばしい限りであります。私は、今後とも両国民がますます相互理解を深め、力を合わせ、将来へ向けて両国関係の一層の発展を図っていくことを切に希望いたします。

女王陛下には、二十八年、国賓として我が国を御訪問になりましたが、当時まだ二十代であった女王陛下と私は、この時初めて親しくお話する機会を持ちました。以後、女王陛下には、しばしば、我が国を御訪問になっており、我が国に対する深い理

解をお持ちになつていらつしやいます。私共も、貴国で御即位前の女王陛下並びにクラウス殿下から手厚いおもてなしをいただいたことが懐かしく思い起こされます。厳しい状況の中で、御即位前より我が国との友好関係の増進をお心にかけていらつしやうた女王陛下と今夕宴席を共にすることができまふことを誠に嬉しく思います。ここに杯を挙げて、女王陛下の御多幸並びにオランダ王国の繁栄と国民の幸せを祈ります。

REMARKS BY HIS MAJESTY THE EMPEROR OF JAPAN
AT THE COURT BANQUET
ON OCTOBER 22, 1991

ON THE OCCASION OF THE VISIT TO JAPAN BY
HER MAJESTY QUEEN BEATRIX OF THE NETHERLANDS

I am very happy that Your Majesty Queen Beatrix of the Netherlands has been gracious enough to pay a visit to Japan with His Royal Highness the Prince of Orange. It gives me heartfelt pleasure to be able to hail Your Majesty the Queen from Your country for the first time in the history of exchanges between our two countries extending far longer than 300 years. I wish to convey to You my most cordial welcome. It is also my great pleasure to welcome again Your Royal Highness, who was present at my Enthronement Ceremony.

Among the European countries, Your country is the one with which Japan has maintained the longest period of friendship. The friendly relations between our two countries date back to the year 1600 when the Dutch ship "De Liefde" arrived at Usuki Bay in Oita Prefecture, followed in 1609 by the issuance of a "red seal" license by the Tokugawa Government permitting her to trade with Japan. After that, even during the isolation of Japan lasting more than 200 years, our two countries continued trading through the Island of Deshima in Nagasaki, which served as Japan's only window open to the Western world. Through this island, Japan was able to acquire the knowledge of Western civilization brought by the Netherlands. By reading the book "Rangaku-Kotohajime", Initiation in Dutch Study - the memoirs of Gempaku Sugita, who more than 200 years ago translated a Dutch book of anatomy into Japanese and published it, we learn with deep impression how the Japanese people admired the advanced science of the Netherlands and how zealously they

tried to learn it and put it to good use for the public. As I think of Japan's development after opening her doors, I come to realize how much Japan owes to her exchanges with Your country. After that event, Japan invited Your engineers, who left behind an impressive record of achievements in various fields, especially in river improvement. Your country has thus been closely involved in the process of Japan's modernization.

I find it very sad that such friendly relations should have been marred because of World War II. After the War, Japan resolved that it would live as a nation of peace so that it should never repeat the horrors of war, and has endeavoured to build a new friendship with the Netherlands and all the countries of the world, making positive contributions to the peace and prosperity of the world. It is cause for my utmost delight that there exists between our two countries today a relationship of amity and cooperation in a broad range of fields.

I ardently hope that the peoples of our two countries will deepen their mutual understanding and work jointly for the further development of relations between their countries into the future.

I recall that Your Majesty visited our country 28 years ago as a state guest. Your Majesty and I were still in our twenties and had for the first time an opportunity to have personal talks. Since then, You visited our country more than once and deepened Your understanding of our country. The Empress and I have a happy memory of the warm hospitality we were accorded in Your country by Your Majesty, before Your accession to the Throne, and His Royal Highness Prince Claus. Knowing that You paid attention since before Your enthronement to the advancement of friendly relations with Japan, amid difficult circumstances, my pleasure is the greater indeed that I am able

to have Your company at this banquet.

May I propose a toast to the happiness of Her Majesty the Queen, the prosperity of the Kingdom of the Netherlands, and the well-being of the people of the Netherlands.



ベアトリックス女王陛下のお言葉

1991年10月22日公式晩餐会にて

天皇陛下。

「3カ月続く冬も優しいひと言で暖かくなる」という古い諺があります。陛下は私たち我が国に、ひと言ではなく幾つも優しいお言葉をかけて下さいました。何よりも先ず、陛下のお心遣いに衷心より感謝申し上げたいと思います。

この歴史的な旅に際して、夫が私と行を共にすることができなかったのは、夫のみならず、私にとりましても大変残念なことです。しかしながら、今宵は、この席に皇太子とともに招きを受け、喜びにあたえません。この度の旅行を私が「歴史的」と呼んだのは、オランダの国家元首が国賓として日本を公式訪問したのは今回が初めてだからです。いまや両国の関係は400年にもなろうとしており、そのこと自体、既に他に例を見ませんが、その中でも、この度の訪日は注目すべき出来事です。

日本の皇室とオランダの王室の長年にわたる友好の絆も、私たちにとっては大切なものです。この度の訪日には、その絆ゆえの特別の側面もあります。陛下ご自身や皇室の方々は、たびたび我が国を訪問して下さいましたが、私たちは、そういった折の数々の思い出を忘れてはいません。ご存知のように、私たちにとりましても、今回の訪問が日本を知る初めての機会ではありません。これまでに、いろいろな折にお国を訪れることができました。したがって、ここ2～30年間の日本の目ざましい発展ぶりについては、それぞれの段階を目にすることができました。

陛下。

この度のお招きにより、両国の長期にわたる輝かしい共通の歴史を語り合う良き機会が得られました。私たちを隔てる距離は数千マイルもありますが、両国の結び付きは4世紀にも及んでいます。これは、東西両洋の間で形づくられ維持されてきた関係の中でも、最も古いほうに属しています。この両国友好の歴史に関する詳しい事柄は、オランダよりも日本で広く知られています。事実、東インド会社という名前は歴史家でなくとも聞いたことがあります。この会社は世界最初の多国籍企業といえるもので、1609年に日本と貿易協定を結びました。ほぼ完全な鎖国状態にあった日本という国で、唯一、ごく少数のオランダ人だけが西洋人として許容されていたという話は、繰り返し語られる歴史物語であり、その物語の中では、出島が日本と西洋の間の橋頭堡として大きく取

り扱われています。いわゆる「オランダの学問」を意味する「ランガク（蘭学）」という言葉は、多くの人々に知られています。外国の科学や技術に関する知識は、2世紀もの間、全てオランダ語を通じて日本に入ってきました。

我が国は、日本が再び世界に門戸を開いた後も、かなり長きにわたって引き続き特権的な地位を占めました。日本の歴史において新たな時代が始まったこの時期に、両国の間で友好条約があらためて締結されたのです。今年には出島にオランダ商館が出来て350周年に当たります。また、今日の両国関係の基礎となった新条約の締結は135年前のことですが、その時もそれまでと同じ考え方が継承されました。

不幸なことに、第2次世界大戦の出来事により両国の国民の間に深い溝が生じました。数多くのオランダ国民が太平洋における戦争の犠牲になりました。その中には軍隊の一員として巻き込まれた者もありましたが、10万人以上の民間人もまた、何年もの間、抑留されました。これは、お国ではあまり知られていない歴史の一章です。多数の我が同胞が戦争で命を失いました。帰国できた者にとっても、その経験は、生涯、傷痕として残っています。その結果、これらの人々は、たとえ時は過ぎてても、今なお痛みや苦しみに悩まされているのです。

しかしながら、私たちは、太平洋戦争によって被害を受けなかった国が僅かしかなくとも忘れていません。日本の国民さえも、戦争の恐ろしい結果に苦しまなければなりませんでした。とりわけ、戦争末期の日々は悲惨なものでした。私たちは、あの戦争の年月の記憶を避けて通るべきではないと思います。私たちの過去に暗い影を落としていく苦い体験を真摯な目で認識することこそ、憤りや恨みに満ちた気持ちを克服する一助になるはずです。歴史を取り消すことはできませんが、私たちは歴史に囚われることを望むものでもありません。両国の新しい世代の人々は、こういった過去に関する知識を身につけたうえで、いまや朗々たる気持ちで将来に目を向けなければなりません。

陛下。

戦後、お国には民主主義がしっかりと根付きました。そして、目指す目標においても実際の行動においても、平和国家たるべく真剣な努力を重ねてこられました。しかも、この新しい時代は、物事を行おうとする確固たる信念と、何事につけ皆が力を結集させるということが大きな役割を果たす時代でした。僅か数十年の間に、日本の国民は極めて広範な再建計画を見事に達成し、同時に強力な経済発展をも実現させました。最近の数年間を見ても、お国の経済は目ざましい成長を遂げ、時を経ずして日本は世界でも最も豊かな国の一つになりました。この成功譚は今では殆ど伝説となり、世界中から羨望の的になっていますが、また同時に批判も招いています。どの国であろうと先頭を行く国に対しては批判が向けられるものです。

この成長を続ける経済力が両国の間の関係に確かな効果をもたらしているのは、喜ばしいことです。人々の往来や物の交流は、これまでにないほど盛んになり、技術の分野における高い水準のノウハウの交換も増えています。数百社の日本企業が、腰を据える国としてオランダを選びました。

このように経済的な接触が盛んになっているのは、ヨーロッパが急速に統一に向かっていることと大いに関係があります。いまや日本はECの当然のパートナーとなりました。このことは双方とも認識しており、協力のあり方は定期協議で調整しています。この協力関係の基礎となっている原則、および協力の目的は、今年7月18日に発布されたEC、EC加盟国、それに日本の間の関係を謳った共同宣言に盛り込まれています。この宣言はヨーロッパと日本の間で続けられている対話に新たな足場を提供するものです。

経済面での交流が進むにつれて、両国の関係を形づくる縦横の糸は以前にもまして強くなっています。しかしながら、両国の人々の間に接触があるといっても、それが直ちに両国民の間に真の交流が成り立っているということを意味するわけではありません。オランダにも日本にも、今なお、お互いの国の社会や文化に対する理解が不足しているところがあります。近年、統一ヨーロッパを構成する要素として、オランダと日本の間で次第に形成されてきた数多くの経済的な絆は、国際協調への道を塞ぐ、こういった目に見えない、それでいて今も有力な障害物を取り除くうえで、大いに役立つことでしょう。日本の側では、お国に建設されているオランダ村が、この目的達成に、それなりの独特の形で貢献していくと思います。

文化の面における交流も、両国関係の緊密化に役立っています。日本の方々が西洋、特にヨーロッパの文化の具象に対して抱いている関心は私たちの琴線に触れるものがあり、しばしば驚くほどに深遠です。オランダのオーケストラ、視覚芸術の代表、科学者など、皆、お国で温かく迎えられています。これらの人々の多くは、日本を既に立証された約束の地と見なしています。

両国の文化的な協力は、お国の方々の西洋文化に対する強い関心に、少なからず依存していますが、また同時に、この分野で日本が達成した全ての事柄に対する私たちの賞賛の気持ちにも支えられています。私たちオランダ人は、お国とは特に共通の歴史を持つがゆえに、日本の豊かな文化的伝統をよく知っています。視覚芸術の分野においても詩や建築といった幅広い分野においても、日本の影響は世界の至るところで感じられますし、審美的なデザインを追究する古典芸術の分野でも、日本という名前は顕著なものがあります。

日本の芸術家は、これまで主として自分の周囲にある自然や田園にインスピレーションを見出してきました。季節の移り変わり、そして素朴で穏やかな風景の美などは、芸術家の創造力や美的感性にとって、無尽蔵のインスピレーションを与える源です。人間と自然の調和は、芸術にとって古い時代からのテーマです。たとえ時代が変わっても、このテーマは問題としての迫力を少しも失っていません。それどころが、技術が爆発的に進歩した私たちの時代において、人間と自然の関係は人類にとっての主要な課題の一つになりました。日本は、このように物事の様相が変わったことの重大さと、その結果として日本および国際社会の他のメンバーに課せられた責務の重さについて、誰よりも先んじて、早い時期に気付きました。

日本もオランダも、何事にも優先して環境問題の解決に力を注いでいます。両国とも狭い国土に密度の高い人口を抱えており、環境問題は深刻です。しかも、日本には、首都圏の無制限に近い膨張を抑制しなければならないという問題もあります。このように国内で大きな問題を抱えているにもかかわらず、日本は海外へも目を向け、各国が世界の環境問題を解決すべく力を結集している中で、最先端に立っています。かなり以前から、お国は地球環境、特にオゾン層の破壊に関する調査を率先して行いました。また、地球気候の保護に関する「1989年ハーグ宣言」の共同署名国でもあります。人工衛星システムを整備し、地球の環境や気候の破壊状況を調査しようという日本の計画は、意義深く有望なものです。環境保護という重要な分野で、オランダは今後とも日本と密接に協力していきたいと望んでいます。

日本は自国の力も、その国力に見合う国際的な責任が大きいこともよくご存じです。このことは、お国が第三世界との協力に傾けているご尽力を見ても明白です。また、日本の方々は、経済の発展を目指して長い道のりを歩んでいる国々を助けるため、お国の経済力を活用したいという願いを明らかに抱いておられます。事実、日本が達成しなければならない課題は、単に発展途上国の経済成長や経済関係への貢献だけではありません。世界は人類の将来に関する国際的協議の場においても、日本に大きな期待をかけているのです。

陛下。

責任に溢れた新たな日本は、陛下のご即位とともに始まった新しい時代の入り口に立っています。新しい時代は“ヘイセイ（平成）”と呼ばれています。この「平和が永久に続くこと」を意味する言葉に含まれているメッセージと使命は、私たち全員の心を動かします。

では、ここに天皇・皇后両陛下のご健康を祝^すとともに、私たちオランダ人とは本当に長い知己である日本国民の将来の繁栄、そして特に陛下の時代の年号に因んで、平和の永続を願い、ご列席の方々とともに杯を挙げたいと思います。



GM:8024-12, 2

SPEECH BY HER MAJESTY THE QUEEN OF THE NETHERLANDS AT THE STATE BANQUET, TOKYO, OCTOBER 22, 1991.

Your Imperial Majesty,

"One good word can warm three winter months" says the old proverb. You have just uttered not one, but many good words as you addressed us and our country. I want to start by thanking you very much indeed for your kind thoughts.

My husband and I greatly regret his inability to accompany me on this historic journey. It is nevertheless a pleasure to be your guest this evening together with our eldest son. I have called our journey "historic" because it is the first State Visit of a Netherlands Head of State to Japan. We are witnessing a noteworthy event in the already exceptional chronicle of relations between our two nations stretching back almost 400 years.

The long-standing bonds of friendship between our families are also of great significance to us. They give our visit an important extra dimension. We retain numerous pleasant memories of the many visits you yourself and the members of your family have paid to the Netherlands. For our part indeed, this is, as you know, not our first acquaintanceship with Japan. We have been able to visit your country on various occasions down the years. Consequently, we have been able to follow the impressive developments that have taken place here during the last few decades as it were stage by stage.

Your Majesty,

This occasion affords us a good opportunity thankfully to reminisce on our long and remarkable common history. In spite of the thousands of miles that separate us, the historical link between our nations is almost four centuries old, and is therefore one of the oldest links between East and West ever established and maintained.

The details of this common history are known, though more widely in Japan than in the Netherlands. Indeed, even non-historians have heard of the United East India Company, which could be called the first multinational and which concluded a trade agreement with Japan in 1609. The story of Japan, a country almost completely cut off from the rest of the world, in which a small number of Dutchmen were tolerated as the sole Westerners, is an oft-repeated saga in which the island of Deshima figures largely as the bridgehead between Japan and the West. Many people know the term "Rangaku" denoting what was called "the Dutch sciences". For two centuries Dutch was the language through which all the scientific and technical knowledge from the outside world entered Japan.

Our country continued to occupy a privileged position for some considerable time after Japan had opened her frontiers anew to the world. At the beginning of this new era in Japan's history a Treaty of Friendship and Commerce was again concluded between our two nations. This year marks the 350th anniversary of the establishment of the Dutch enclave on Deshima and it is 135 years ago that the new Treaty, in which the foundation was laid for our present-day relations, was concluded along the same lines.

Unfortunately, a deep gulf between our two peoples resulted from events in the Second World War. A great number of Dutch people became victims of the war in the Pacific. Some were involved as members of the forces, but over one hundred thousand civilians were also interned for many long years. It is a chapter in our history that is less well known in your country. Many of my compatriots did not survive the war. Those who did return are marked

for life by their experiences. Consequently, they are still suffering, in spite of the time that has passed since then.

However, we do not forget that few countries remained unaffected by the war in the Pacific. Even the people in Japan itself have had to suffer the awful consequences of war, especially in the final horrendous days. We may not side-step the memories of those war years. Sincere realization of the ordeals that cloud our past may help us overcome feelings of resentment and bitterness. History cannot be undone, but neither do we want to be its captive. The new generations in both our countries, better equipped through their knowledge of the past, must now be free to face the future.

Your Majesty,

Democracy has become firmly established in your country since the war, and Japan has endeavoured in all her deeds and aspirations to be a nation of peace. Moreover, the new era has featured will-power and collective effort. In the space of a few decades the Japanese people have succeeded admirably in completing an extensive programme of reconstruction, initiating at the same time strong economic development. Your national economy has grown in spectacular fashion in the last few years, thus quite soon placing Japan in the ranks of the world's most prosperous countries. The story of this success has become almost legendary. It commands admiration the world over, but at once invites the criticism that is directed at every country that takes the lead.

It is gratifying that this growing economic force is having a distinct effect on our bilateral relations. The interchange of people and goods is becoming ever more intensive and there is increasing exchange of high-level technical know-how. Some hundreds of Japanese firms have selected the Netherlands as the country in which to establish themselves.

These intensive economic contacts are largely associated with the rapid integration of Europe. Japan has become a natural partner for the European Communities. Both parties realize this, and set their co-operation in regular consultation. The principles underlying this co-operation and the purposes it is intended to serve are formulated in the common declaration on relations between the European Communities, member countries and Japan, which was promulgated on the 18th of July this year. The declaration offers a new platform for an ongoing dialogue between Europe and Japan.

We can see that an ever stronger web of relationships is developing from the increasing economic exchange. The fact, however, that people are in communication with each other does not always mean that there is real contact between them. There is still, both in the Netherlands and Japan, a certain degree of ignorance of each other's society and culture. The many economic ties that have been forged between Japan and the Netherlands in the recent past as components of a United Europe will certainly help us remove these invisible, but still prevalent obstacles on the road to concord. On the Japanese front the Holland Village that is being built in your country is helping to achieve this in its own special way.

Our exchanges in the field of culture are also bringing us closer together. The Japanese people's interest in expressions of Western, and particularly European culture is heartening and very often surprisingly profound. Dutch orchestras, exponents of the visual arts and scientists are warmly welcomed here. Many of them regard Japan as the land of promise already proven.

Our cultural co-operation largely rests on your country's great interest in Western culture. It is also sustained by our admiration for everything Japan has accomplished in this area. We in the Netherlands are particularly aware of the wealth of Japanese cultural tradition, especially because of our common past. Japan has made her influence felt throughout the

world, both in the visual arts and in such divergent areas as poetry and architecture, while the name Japan is even pre-eminently associated with the classical art of esthetic design.

Japanese artists down the ages have found inspiration mainly in nature and the countryside around them. The changing seasons and the beauty of the landscape in all its simplicity and calm have been an inexhaustible source of inspiration for their creativity and esthetic perception. Harmony between Man and Nature is a classic theme in their art. It is a subject that has lost none of its topical appeal with the passage of time. On the contrary, the relationship between Man and Nature has become one of the major human problems in our era of explosive technical advancement. Japan realized at an early stage the importance of this turn of events and of the consequent obligations incumbent upon herself and upon all the other members of the global community.

Both Japan and the Netherlands accord high priority to the solution of environmental problems. Such problems are acute in both countries because of the great density of population in small areas. Moreover, Japan has the responsibility of controlling her capital's almost unbridled expansion. The magnitude of the problem at home has nevertheless not prevented Japan from looking abroad and being in the forefront as common efforts are made to solve the world's environmental problems. Your country has for some considerable time pioneered global ecological research, particularly into the destruction of the ozone layer, and is a co-signatory to the "Hague Declaration of 1989" on the protection of our climate. Japan's plans for the construction of a satellite system for charting the impairment of our environment and climate are meaningful and promising. The Netherlands hopes to be able to continue to collaborate intensively with Japan in the important field of ecology.

Japan is well aware of her own power and of the great international responsibility that it entails. That awareness is also evident from the great effort she puts into co-operation with Third World countries. Your nation clearly cherishes a desire also to utilize her economic power to aid countries that have a long way to go on the road to their economic development. In fact, the task your country has to accomplish transcends her contribution to economic growth and relationships with developing countries. The world also expects a great deal from Japan in international consultation on our common future.

Your Majesty,

A new Japan facing her responsibilities stands on the threshold of the new era which commenced with your inauguration. The new era is called "Heisei", meaning "the accomplishment of peace". This word contains a message, and a commission, that appeals to us all.

It now gives me pleasure to invite you to raise your glasses with me and drink to the health of Your Imperial Majesty, to the health of her Majesty the Empress, to a prosperous future for the Japanese people that we have known for so long, and especially to the accomplishment of peace that is associated with your reign.

GM:8024-15

オランダ王国ベアトリックス女王陛下御訪日

歓迎午餐会における海部総理大臣スピーチ

平成三年十月二三日

女王陛下、皇太子殿下、並びに御列席の皆様、

このたびベアトリックス女王陛下を国賓として我が国にお迎え申し上げ、ここにささやかながら歓迎の宴を催すことが出来ますことは、私にとって大きな喜びであり、この上ない光栄に存じます。私は、本年七月、第一回日・EC首脳協議のため貴国を訪問いたしました。その際、ルッベルス首相との日蘭首脳会談においても有益な意見交換を行いました。女王陛下は御不在中にて残念ながら謁見の機会を得ることが出来ませんでした。今般女王陛下の御来日を歓迎申し上げます。誠に欣快であります。

日本とオランダは、約四世紀に亘る歴史的な友好関係を維持しており、我が国にとって貴国は欧州諸国の中で最も古い友人であります。日蘭両国は、我が国が鎖国政策をとっていた江戸時代においても、長崎の出島を通じて貿易を行い、出島は我が国と西洋の唯一の接点でありました。そして、我が国は出島経由で入手されたオランダ語の文献を通じて西洋文明の

知識を学ぶことができました。この学問を「蘭学」と言いますが、我が国が明治時代以降に順調な近代化を遂げることができたのも、江戸時代の「蘭学」による知識の蓄積に負うところが大きいと言われています。また、シーボルト、ポンペ等の出島駐在医務官は、我が国の近代医学等の発展のため大いに貢献しました。更に、明治時代以降、我が国が貴国より招聘した専門家が治水事業等の分野で残された業績も忘れてはなりません。安積疎水事業、木曾三川改修事業、八郎潟干拓などがその代表的な例です。この午餐会には、戦後この八郎潟の干拓事業に貢献されたフォルカー教授にもお越し頂いております。このように、貴国が我が国の近代化の過程において果たされた役割は極めて大きいのであります。

かかる日蘭間の伝統的友好関係が、第二次世界大戦によって損なわれ、旧蘭領インドに在住した貴国の人々が戦争によって大きな苦しみを受けられたことは誠に遺憾でありました。これらの人々の心の痛手が簡単に癒されるものではないことは、私自身、本年七月の貴国訪問の際、痛感したところであります。我が国は過去に対する厳しい反省に立って、戦後、平和国家の理念と決意を政策に反映する努力をしてきました。我が国は、今後とも両国が共有する共通の価値の上に、歴史的な日蘭友好関係を一層強化させるべく努力していきたいと思っております。

今回、日蘭関係史上初めてオランダ国家元首の御訪日が実現致しましたことは、記念すべ

き出来事であり、誠に慶賀に堪えません。両国の皇室・王室間には親密な関係が存在し、これは近年様々な方面で益々緊密化しつつある日蘭二国間関係の大きな礎となっております。女王陛下の御訪日を機会に、我々は、貴国との間に存在する歴史的な友好関係を改めて確認し、今後とも日蘭二国間関係の更なる緊密化のために努力して参ります。

女王陛下、皇太子殿下、並びに御列席の皆様、

それでは、ベアトリックス女王陛下及びウイレム・アレキサンダー皇太子殿下の御健康と今回の我が国での快適な御滞在、並びにオランダ国民の繁栄を祈念して、ここに杯を上げたいと存じます。

乾杯。

SPEECH BY H.E.MR. TOSHIKI KAIFU, THE PRIME MINISTER OF JAPAN,
AT THE LUNCHEON

ON OCTOBER 23, 1991

ON THE OCCASION OF THE VISIT TO JAPAN BY
HER MAJESTY QUEEN BEATRIX OF THE NETHERLANDS

Her Majesty the Queen, His Royal Highness the Prince of Orange,
Ladies and Gentlemen,

It is truly a great pleasure and honour for me to be able to greet Her Majesty Queen Beatrix as a state guest to Japan and to hold this welcome gathering. I had the opportunity to visit Your country this year in July for the first Japan-EC summit meeting. During the visit, I engaged in a meaningful exchange of opinions with Prime Minister Lubbers in a summit meeting between Japan and the Netherlands. Since Her Majesty the Queen was absent then, I unfortunately was unable to have the chance to be given the audience, so it gives me great pleasure now to be able to greet Her Majesty the Queen on this visit to Japan.

Japan and the Netherlands have maintained historically friendly relations for nearly four centuries, and Your country is one of Japan's oldest friends among the European countries. Our countries continued trading even during the Edo period, when Japan adopted its closed-country policy, through the island of Deshima in Nagasaki, and this island served as the only point of contact between Japan and the Western world. Japan was able to acquire the knowledge of Western civilization through the Dutch texts she received through Deshima. The study of these texts was called "Rangaku" or Dutch Studies, and the

knowledge gained from Dutch Studies during the Edo period is said to have been one of the major factors for the smooth modernization of Japan since the Meiji period. Also, Philipp Franz von Siebold, Pompe van Meerdervoort, and other medical officers stationed at Deshima made substantial contributions to the modernization of Japanese medicine and other areas.

Furthermore, the record of accomplishments in the field of river improvement and other projects left by engineers from Your country, invited by Japan, cannot be forgotten.

Representative examples include the Asaka waterworks project, the improvement project of the three rivers of Kiso, and the Hachirogata land reclamation project. At this luncheon today, we are pleased to have the presence of Professor Adriaan Volker who contributed to this Hachirogata land reclamation project after the War. In this way, Your country has played a most significant role in Japan's progress toward modernization.

It is indeed regrettable that because of World War II, this traditional friendly relationship between Japan and the Netherlands should have been marred and many Dutch nationals residing in the then Dutch Indies underwent unbearable sufferings and sorrows. My visit to Your country last July made me realize even more keenly that the scars in their heart would not heal easily. With a sense of sincere contrition at Japanese past action, our nation has made strong efforts since the end of the War to translate its idea and resolve to be a peaceful nation into its actual policies. We will continue our efforts to strengthen further this historic friendship between Japan and the Netherlands, building on the values that our two nations share in common.

It is truly an event to remember, and gives me an utmost pleasure that, in the history of relations between Japan and

the Netherlands, the first visit ever to Japan by the head of state of the Netherlands has been realized. Close relations exist between the Imperial and Royal households of our countries, and this has served as a foundation for the increasingly tight bilateral relationship between Japan and the Netherlands in a variety of areas in recent years. We hope to take the occasion of this visit to Japan by Her Majesty the Queen to reconfirm our historical friendly relationship with Your country, and intend to work for an even closer bilateral relationship between Japan and the Netherlands in the future.

Her Majesty the Queen, His Royal Highness the Prince of Orange,
Ladies and Gentlemen,

Now, I would like to propose a toast to the health and a comfortable stay here in Japan of Her Majesty Queen Beatrix and His Royal Highness the Prince of Orange, and to the prosperity of all the people of the Netherlands.

Cheers.

GM:8024-21 - 21

ベアトリックス女王陛下の乾杯のお言葉

1991年10月23日の政府主催の午餐会にて

内閣総理大臣閣下。

ご親切なお言葉と、この度の日本訪問で私と夫の名代を務める皇太子に対するおもてなしに感謝いたします。閣下のご招待により、お国の行政に携わってきた方々と意見を交換する機会を得ました。

閣下が今年の7月にオランダに滞在された折には、お目にかかることができませんでした。それだけに、この度お会いできたことは何にもまさる喜びです。閣下が我が国を公式訪問されたのはその時が初めてでしたが、ご訪問の目的は、その少し前に我が国が議長国になったECと日本の対話を継続させるためのものであり、またいうまでもなく、日蘭関係の増進のためでもありました。その折に閣下が言われたことがオランダ国民に感銘を与えたのはいうまでもありません。

日蘭両国は、過去に独特の歴史を共有しているだけでなく、現在も多くの点で共通しています。ちょうど我が国と同じように、日本も比較的小さな国土を最大限に利用しなくてはなりません。また、その結果、初期の段階から環境保護対策の必要性を認識せざるを得なかったと思います。数々の分野で民間団体がイニシアチブを採り、しばしば自発的にキャンペーンを展開するなど、お国の国民がこうした問題を真剣に受け止めていることが本当によく分かります。

いくつか例外もありますが、日本もオランダも決して豊富な天然資源に恵まれているとはいえません。しかし、両国とも最大の財産は国民の才能と献身にあることを発見しました。このような財産があったからこそ、あらゆる利点を持つ民主的な工業国に発展したのであり、また一方で、あらゆる社会問題をも抱えるに至ったのです。日本はさまざまな分野で解決策を見い出しました。私たちはそれにも関心を抱いています。私は町単位・国単位の計画や、確実に進行している高齢化が提起する問題について考えています。また、若い世代に職業の見通しや人生の目的を与えるという大変な仕事についても考えを巡らせています。日本滞在中に、このことについて、もっとお話をうかがうことを願っています。

両国の経済協力は積極的に行われており、300社以上の日本企業が我が国に進出するなど、その盛んな様子は見た目にも明らかなです。こうした日本企業には、1万5千人のオランダ人が直接関わっていますし、間接的に関係している人の数は、それを遥かに上回っています。我が国における日本企業の特徴は、その存在がオランダ全土に広がっていることです。日本がオランダにとって経済の分野で如何に重要かは、今、私が国賓としてお国を訪れている間にも、時を同じくして、我が国の代表的企業の幹部のグループが訪日していることから明らかなです。このグループは、同種の日本企業と有益な話し合いを行なうことを望んでいます。

総理大臣閣下。

現在、両国の関係が良好なのは、両国が共有する独特の過去によってもたらされた結果です。昨日皇居でそうした過去の歴史が注目を集めました。その中でも最もすばらしい1章を成すのは、日本が（西洋から）鎖国をしていた2世紀の間、我が国が例外的な地位を占めていたという異論のない事実です。200年にわたり、オランダは日本にとって西洋世界の情報を伝える唯一の国でした。しかしながら、閣下にひと言申し添えたいと思いますが、我が国の国民はそうした時代がもはや過去のものであり、今では、日本が他の情報源からも情報を得ているということを認めています。また、本日、閣下が過去の出来事を不問に付すことなく、再び言及されたことに対し、私は感謝の意を表明したいと思います。

オランダは、対日関係を独占している西洋の国ではなくなりましたが、私たちは両国の関係をこれまでと同じように重要視しています。我が国にとって、日本はさまざまな分野における魅力的なパートナーであり、より良く、より公正な世界を築くために共に努力する尊敬できるパートナーであると思っています。

では、ここに、総理大臣閣下のご健康を祝すとともに、いまや400年にもなろうとしている両国の国民の絆が永久に続くことを願って、ご列席の方々とともに杯を挙げたいと思います。

pl h

TOAST BY HER MAJESTY THE QUEEN OF THE NETHERLANDS AT THE
LUNCHEON HOSTED BY THE JAPANESE GOVERNMENT, OCTOBER 23, 1991.

Mr. Prime Minister,

Thank you for your kind words and for the hospitality which you are offering me and my son, who during this visit is taking my husband's place. We highly appreciate your invitation, which gives us an opportunity to exchange views with people who have been charged with your country's administration.

Our meeting gives me all the more pleasure since I was unable to see you during your stay in Holland in July this year. You were then visiting the Netherlands officially for the first time. Your visit partly concerned the continuous dialogue between Japan and the European Communities, the chairmanship of which the Netherlands had taken over shortly before you came. Needless to say, your visit also concerned relations between our two countries. What you said to my fellow countrymen on that occasion clearly made an impression on them. I should like to express my appreciation of the fact that today you have again chosen not to leave unmentioned the events of the past.

Besides their unique common past, Japan and the Netherlands also have much in common in the present. Just like our country, Japan has to make the best of a comparatively small habitable territory. Just like Holland, your country has consequently been forced at an early stage to recognize the need to take steps to protect her own environment. Indeed, the numerous initiatives and campaigns often spontaneously undertaken by private groups here show how much your people take these problems to heart.

With certain exceptions, neither Japan nor the Netherlands are endowed with copious natural resources, but they have discovered that their greatest asset may actually lie in their citizens' talent and dedication. It is along these lines that our countries have developed into industrialized democracies with all their advantages but also with all the social problems involved. Japan has found in various areas solutions that also appeal to us. I am thinking of town and country planning, of the questions posed by the constantly ageing population and of the formidable task of giving the younger generation some prospect of employment and a purpose in life. We hope to hear more about this during our visit.

Our economic co-operation is intensive and indeed discernible in the Netherlands in the form of the over 300 Japanese firms that have establishments in our country. Fifteen thousand people are directly and very many more are indirectly concerned with them. A noteworthy feature of this Japanese presence is that it is spread throughout our country. The economic importance of Japan to the Netherlands is also evident from the presence in Tokyo during this State visit of a group of heads of leading Dutch enterprises who are hoping to have useful talks with their Japanese counterparts.

Mr. Prime Minister,

Our present relations are the happy result of our unique common past. That past received much attention at the Imperial Palace yesterday. The most remarkable chapter of this common history is invariably the exceptional position our country occupied during the two centuries in which Japan had cut herself off from the western world. For over two hundred years Holland was Japan's only source of information on the western world. However, I can tell you, Mr. Prime Minister, that my countrymen realize that those times are past and have

resigned themselves to the fact that nowadays Japan also obtains her information from other sources.

The western monopoly of relations with Japan no longer rests with the Netherlands. We value the relations themselves as much as ever. Our country regards Japan as an attractive partner in a multitude of fields and as an esteemed supporter in our joint endeavour to make a better and more equitable world.

It is with pleasure that I invite you all to raise your glasses and drink to your health, Mr. Prime Minister, and to the happy perpetuation of the almost four-hundred-year-old bond between our peoples.

5
GM:8024-1

※総第125766号001公館宛 FAX信 18

平成 3 年 12 月 11 日 10 時 48 分 3 秒 受付



電 信 案

秘
無 期 限

電信課長

45

大臣 秘書官 政務次官 事務次官 外務審議官 外務審議官 官房長	主管	※発電係 1. 丁 2. A 起案 平成 3 年 12 月 11 日 起案者 電話番号 木村 2424
協議先		

(注意) 1枚目は、機械で処理しますので、折り曲げない様願います。

(八〇字)

在 中国	大使 総領事	あて	外務大臣 発
件名 事務連絡			
主管・文書記号 ア中	※電番 FAX信	大至急 普通	至急 (優先処理)
転電 転送 在 転報	※転電番号	パターン・コード	
大使・総領事あて		大至急 至急 普通 (優先処理)	
経電 3702 号 FAX 信 3. ↓			
※			
12576631	優先	TYUUGOKU	F信

GB-1

外 務 省

回覧番号

(※印欄内は電信課記入)

(昭和六三・六・三十改正)

タイ国王王妃両陛下主催晩餐会における答辞（案）

今夕は、私どものためにこのような宴を催していただき、また、ただ今は国王陛下より丁寧なお言葉をいただき、厚くお礼を申し上げます。

本日は、日タイ両国が、くしくも百四年前、「日タイ修好通商宣言」に調印し、正式に国交を樹立した日に当たっております。当時は両国とも、独立を守るため、国の近代化を進めていた時期であり、四十年以上の長きにわたって治世の時期を同じくした国王陛下の御祖父チュラーロンコーン大王と私の曾祖父明治天皇、並びに当時の両国の人々の苦勞、努力は計り知れないものがあつたことと察せられます。四年前、皇太子であつた私は、ワチラロンコーン皇太子殿下と共に、東京で催されたこの修好百年の記念式典に出席し、それを祝うとともに、交流の歴史を振り返りました。

日タイ交流の歴史は古く、タイがアユタヤに都していたときに始まりですが、近年は様々な分野で幅広く交流が行われるようになりました。両国の理解と友好の懸け橋となる留学生の数も多くなり、タイ語でタイのことを話し合える日本の研究者も育ってきたと聞いております。国と国との友好関係の増進にはお互いの理解とそれぞれの立場の尊重が重要であり、両国の関係が、このように広く、深いものになってきたことを誠に喜ばしく思います。

タイの王室と日本の皇室との交流も頻繁に行われ、昭和天皇の大喪の礼に続いて、昨年は即位の礼にワチラロンコーン皇太子殿下が御参列くださり、また、タイの研究者の協力の下に研究の場として貴国を度々訪れております秋篠宮の結婚式には、シリントーン王女殿下が御参列くださいました。御好意に対して、深く感謝しております。今年に入ってから、東京農業大学創立百周年記念式典において、日本の大学や研究所で講義や研究にいそしんでいらっしゃるチュラポーン王女殿下にお目にかかりました。

国王王妃両陛下には、国賓として、昭和三十八年、我が国を御訪問になりましたが、その翌年、昭和天皇の御名代として、私は、皇太子妃と共に貴国を訪問いたしました。その時の両陛下の暖かいおもてなしや多くの人々から寄せられました心のこもった歓迎は、私どもの心に深く残るものであります。

その後も、外国訪問の途次、バンコックやチェンマイに立ち寄り、両陛下にお目にかかっておりますが、その度に、各地をお巡りになって地域の人々の暮らしをお考えになりながら、国の発展や国民の幸福を願う両陛下のお気持ちを感銘深く伺っております。現在、タイは安定して豊かに発展していますが、タイ国民のたゆみない努力が英邁な国王陛下の御指導の下に花開いたものと考えております。

日本は、先の誠に不幸な戦争の惨禍を再び繰り返すことのないよう平和国家として生きることを決意し、この新たな決意の上に立って、戦後一貫して東南アジア諸国との新たな友好関係を築くよう努力してきました。その中で、今日、日本と東南アジアとの関係が著しい進展を見せ、様々な面での交流がますます盛んになり、特に、アセアン地域の経済が極めて力強い発展を見せていることは、誠に喜ばしいことであります。中でも、貴国はインドシナ地域の中心に位置する国として、将来の繁栄への大きな可能性を秘めたこの地域の発展に重要な役割を担っておられると思います。

この度、御招待により再び貴国を訪問できることは誠に喜ばしく、発展しつつあるタイの現在の姿に接するとともに、多くの人々と交わり、お互いの理解を深めるよう努めたいと思います。さらに、かつてバンコックの博物館で見たラームカムヘン大王の碑を思い起こしつつ、「水に魚あり、田に米あり、……人々は^{の類は明るく輝いて}幸せである。」と描かれたスコータイの古都を訪れ、貴国の歴史に触れるのも楽しみにしております。

ここに杯を挙げて、国王王妃両陛下の御健康とタイ王国の繁栄、国民の幸せを祈りたいと思います。

GM:8024⁵-4

Reply of His Majesty the Emperor of Japan
at the Banquet given by
Their Majesties the King and Queen of Thailand

September 26, 1991

5
GM:8024- 5

(Unofficial Translation) ** check against delivery.*

The Empress and I are most grateful to Your Majesties for holding this banquet for us and for the cordial words Your Majesty the King has just spoken.

Today, by a strange coincidence, happens to be the day our two countries signed "the Declaration of Amity and Commerce between Japan and the Kingdom of Thailand" and established formal diplomatic relations exactly one hundred and four years ago.

It was the time when our two countries were carrying out their modernization to safeguard their independence. I can imagine that the tribulations and efforts of the Great King Chulalongkorn, Your Majesty the King's grandfather, and Emperor Meiji, my own great-grandfather, who reigned over their respective countries during the same period for more than forty long years and the peoples of both countries must have been inestimable. Four years ago, I as Crown Prince attended the centenary of mutual amity of our two countries held in Tokyo, together with His Royal Highness Crown Prince Maha Vajiralongkorn. I felicitated this event and looked back on the history of exchanges between Japan and Thailand.

The history of our exchanges dates back to ancient times. It began when Thailand had its capital in Ayutthaya. In recent years, these exchanges are taking place in various fields in a broader range. I understand

that the number of exchange students, who are to become the bridge of mutual understanding and friendship between our two countries, is increasing and that there are emerging Japanese scholars who are able to talk about matters of Thailand in the Thai language. For the increase of country-to-country friendship, mutual understanding and mutual respect for the other's position are important. I am happy to note that the relations between our two countries have become so extensive and deep.

Exchanges between the Thai Royal Family and the Japanese Imperial Family are being practiced frequently. His Royal Highness Crown Prince Maha Vajiralongkorn was gracious enough to attend the Funeral Ceremony of Emperor Showa, and also the Ceremony of my Enthronement last year. Prince Akishino, who frequently visit Thailand to conduct his research with the cooperation of Thai scholars, was honoured by the presence of Her Royal Highness Princess Maha Chakri Sirindhorn at his wedding. The Empress and I are profoundly grateful for such kind thoughts of the Thai Royal Family. This year I had the pleasure of meeting Her Royal Highness Princess Chulabhorn, who had devoted her time to lectures and studies at Japanese universities and research institutes, on the occasion of the Centenary of the Tokyo University of Agriculture.

Your Majesties the King and Queen visited Japan in 1963 as state guests. The Empress and I, then as Crown Prince and Crown Princess, made a return visit to Thailand the following year on behalf of Emperor Showa. The warm hospitality extended to us by Your Majesties and the wholehearted welcome accorded by many Thai people on that occasion remain deeply impressed in our hearts.

Since then, the Empress and I had the honour of being received by Your Majesties in Bangkok or in Chiang Mai in the course of our overseas tours. On each occasion, we were profoundly moved to learn of the sentiment of Your Majesties praying for national development and people's welfare, while making a tour of various localities and minding the lives of the local people. Thailand is now stable and achieving ample development. We believe that this is the blooming result of the continuous efforts of the Thai people exerted under the wise leadership of Your Majesty.

Japan resolved that it would live as a nation of peace so that it should never repeat the horrors of that most unfortunate war. Based on this ^{new} resolve, Japan has made unremitting efforts since the end of the war to build a new friendship with the Southeast Asian countries. In this situation, I am delighted to see that relations between Japan and Southeast Asian countries are witnessing remarkable development, that their mutual exchanges

expanding at various levels, and that the economies of the ASEAN countries have registered most dynamic development. I believe that Thailand, in particular, has an extremely important role to play, as a nation situated in the centre of the Indochinese region, for the development of this region which has a great potential for future prosperity.

It really gives us pleasure to be able to visit Thailand again at Your Majesties' invitation. The Empress and I are hoping to see for ourselves the ever-developing Thailand of today and to meet with many Thai people in our effort to deepen our mutual understanding. We are also looking forward to coming into contact with the history of Thailand by visiting Sukhothai, the ancient capital, while recalling the monument of the Great King Ramkhamhaeng we once saw at the museum in Bangkok, with the inscription:
In the water, there is fish; in the fields, there is rice;
... *[the faces of the people shine bright,*
~~... people are happy.~~

May I now propose a toast to the health of His Majesty the King and Her Majesty the Queen, to the prosperity of the Kingdom of Thailand, and to the happiness of the Thai people.

三月30日お言葉終了後内容確認の上使片

マレイシア国王王妃両陛下主催晩餐会における答辞（案）

今夕は、私どものために、このような歓迎の宴を催していただき、また、ただ今は国王陛下から丁寧なお言葉をいただき、厚くお礼を申し上げます。国王陛下には、王妃陛下とともに、昭和天皇の大喪の礼に続き、即位の礼にも御参列いただき、この御好意に深く感謝しております。

マレイシアから国王王妃両陛下を国賓としてお迎えしたのは、昭和三十九年のことであり、その六年後、昭和四十五年に、御招待により、昭和天皇の御名代として、皇太子妃と共にマレイシアを訪問しました。美しいクアラルンプールや打ち続くゴム林などとともに、貴国の多くの方々から暖かい歓迎とおもてなしをいただいたことが懐かしく思い起こされます。

それから二十一年、マレイシアでは、産業が著しく進み、人々が一丸となって努力し、国が豊かに発展していると聞いております。この度、御招待により再び貴国を訪問できることは誠に喜ばしく、このような現在のマレイシアの姿に接し、理解を深めていきたいと思っております。

願われば、日本は、先の誠に不幸な戦争の惨禍を再び繰り返すことのないよう平和国家として生きることを決意し、この新たな決意の上に立って、戦後一貫して東南アジア諸国との新たな友好関係を築くよう努力してきました。今日、我が国と東南アジアとの間において、政治、経済といった分野は勿論のこと、学術、文化等広範な分野にわたる友好関係が進展をみせていることをうれしく思います。特に、アセアン諸国との協力関係の深まりは著しく、その将来は、洋々たる可能性に富んでいるといっても過言ではありません。

マレイシアと日本の関係は、極めて良好に推移してまいりましたが、特に、近年、英連合国王陛下の下に、マハディール首相閣下が卓越した指導力をもって東方政策を推進され、両国間の幅広い交流が著しく進展を見せております。今日、東方政策の下で何百・何千という数の貴国の若者が日本語の勉学に励んでおり、また、マレイシアの国内においては、海外青年協力隊員を含め六千名にも及ぶ我が国の人々が種々の分野で活動していると聞いております。このような両国の関係が更に安定したものとなるよう、

5
GM:802

両国民がお互いの理解を深め、お互いの立場を尊重して、友好関係を増進していくことを切に望んでやみません。

私どもは、明日以降、由緒ある王都クアラ・カンサーを始め、教育・研究施設あるいは福祉施設を訪問いたしますが、今回の訪問が、このように発展を続けるマレーシアと日本との友好関係の一層の飛躍に資するよう念じております。

ここに杯を挙げて、国王王妃両陛下の御健康とマレーシアの発展、国民の幸せを祈りたいと思います。

Reply of
His Majesty the Emperor of Japan
at the Banquet given by
Their Majesties the Yang di-Pertuan Agong and
Raja Permaisuri Agong

(Unofficial Translation)

The Empress and I are most grateful for this banquet of welcome for us and for the cordial words Your Majesty has just spoken.

We are also much obliged to Your Majesties for your presence at the Funeral Ceremony of Emperor Showa and also the Ceremony of my Enthronement.

It was in 1964 that we had the honour of welcoming the then Yang di-Pertuan Agong and Raja Permaisuri Agong as state guests. Six years later, in 1970, I was invited to pay a visit to Malaysia, with my wife, as representative of Emperor Showa. We cherish the happy memory of the warm welcome and hospitality extended to us by so many people, along with the beauty of Kuala Lumpur and the row upon row of rubber trees.

Twenty-one years have passed since then, and I am now glad to hear that in this country industries have made remarkable progress and that people are making united efforts for the ample development of their country. It gives us great pleasure that we are able to visit this beautiful country again at your invitation. I would like to deepen my understanding of your country by observing for myself such condition of the present-day Malaysia.

As I look back, Japan resolved that it would live as a nation of peace so that it should never repeat the horrors of that most unfortunate war. Based on this new resolve, Japan has made unrelenting efforts since the end of the war to build a new friendship with the Southeast Asian countries. I am delighted to note that today, friendly relations have developed between Japan and Southeast Asia in a broad range of fields, extending over academic studies and culture, not to mention politics and economics. In particular, Japan's relations with the ASEAN countries have deepened remarkably, and we can safely say that their future holds vast possibilities.

Japan and Malaysia have developed very happy relations between them. Especially in recent years, exchanges between our two countries are making great progress in an extensive range, under Your Majesty's wise reign and with the prosecution of the Look East Policy under the outstanding leadership of Prime Minister Mahathir. I hear that hundreds or even thousands of Malaysian youths are now studying the Japanese language under this Look East Policy, while some six thousand Japanese nationals, including Overseas Cooperation Volunteers, are here engaged in various fields. I sincerely hope that our two peoples will deepen their mutual understanding, respect the other's position, and increase their friendship, thereby further consolidating our bilateral relationship.

From tomorrow, we are going to visit the historic, royal town of Kuala Kangsar and educational and research institutions and welfare facilities. We hope our current visit will contribute to a great stride forward in the ever-developing friendly relations between Japan and Malaysia.

May I now propose a toast to the health of His Majesty the Yang di-Pertuan Agong and Her Majesty the Raja Permaisuri Agong, and to the progress of Malaysia and the happiness of its people.

インドネシア大統領及び令夫人主催晩餐会における答辞（案）

今夕は、私どものために、このような宴を催していただき、また、ただ今は大統領閣下より丁寧な歓迎のお言葉をいただき、厚くお礼を申し上げます。

大統領閣下には、昭和四十三年国賓として日本を御訪問になったのを始め、幾度か我が国を御訪問いただいてありますが、昭和天皇の大喪の礼に続いて、昨年は即位の礼にも、令夫人とともにおいでくださいましたことを深く感謝しております。

私がこの前インドネシアを訪問いたしましたのは二十九年前のことになりますが、その時、貴国の人々から心温まるおもてなしをいただきましたことが今でも懐かしく思い起こされます。また、歴史の中ではぐくまれた文化と南国の美しい風景に接したことも深く印象に残っております。

この度、御招待により再び貴国を訪問できることを誠に喜ばしく思います。様々な文化に彩られ、広大な国土に無数の島々と多数の人口を持つインドネシアは、近年、スハルト大統領閣下の卓越した御指導の下、多様性の中の統一を目指して、大きな発展を続けておりますが、私はこのような現在のインドネシアへの理解を更に深めていきたいと思っております。

インドネシアと日本の間には古い昔からのつながりがあります。日本は、先の誠に不幸な戦争の惨禍を再び繰り返すことのないよう平和国家として生きることを決意し、この新たな決意の上に立って、戦後一貫して東南アジア諸国との新たな友好関係を築くよう努力してきました。今日、日本と東南アジアとの間において、幅広い分野の様々な交流が花開いていることは、喜ばしい限りであります。特に、我が国とアセアン諸国の協力関係は顕著な進展を見せ、これらの諸国が世界的に注目される発展を続けていることを嬉しく思います。その中で、インドネシアと日本の関係は、インドネシア共和国の独立以後、お互いになくてはならない協力者として、誠に順調に進展を見せていることは喜ばしいことであります。

私どもは明日閣下の御出身地に近いジョグジャカルタを訪問します。ジョグジャカルタの地域は古くから文化が栄えた所で、この訪問により、イ

GM:802

インドネシアの歴史的文化への理解を深めたいと思います。かつて機上から見た巨大なボロブドゥールの遺跡を間近に見るのは楽しみです。今回のインドネシア訪問を通じ、貴国と我が国の間の交流が更に進み、両国の友好関係がアジアの平和と繁栄の重要な礎として今後とも発展することを願っています。

ここに杯を挙げて、大統領閣下並びに令夫人の御健康とインドネシアの発展、国民の幸せを祈りたいと思います。

Reply of
His Majesty the Emperor of Japan
at the Banquet given by
His Excellency the President
of the Republic of Indonesia and Madame Soeharto

(Unofficial Translation)

The Empress and I are most grateful to you and Madame Soeharto for this banquet for us and for the cordial words of welcome Your Excellency has just spoken.

Your Excellency visited Japan on a number of occasions, starting with the visit as a state guest in 1968. I am particularly grateful to you for attending, together with Madame Soeharto, at the funeral of Emperor Showa, and also at the Ceremony of my Enthronement last year.

My last visit to Indonesia took place twenty-nine years ago, and I still vividly remember the warm welcome extended to me on that occasion. It also remains deeply impressed upon me that I observed at first hand your culture nurtured by your history and the beautiful scenery of this land of the south.

It gives me great pleasure that I am able to visit this Republic again at your invitation. Indonesia, rich with diverse cultures and possessing a vast territory consisting of numerous islands, and a large population, has in recent years achieved great progress, under the outstanding leadership of Your Excellency the President, realizing "Bhinneka Tunggal Ika". I would like to deepen further my understanding of this condition of the present-day Indonesia.

There have been ties binding our two countries since ancient times. Japan resolved that it would live as a nation of peace so that it should never repeat the horrors of that most unfortunate war. Based on this new resolve, Japan has made unremitting efforts since the end of the war to build a new friendship with the Southeast Asian countries. It is most gratifying that wide-ranging exchanges are flourishing between Japan and Southeast Asia. I am especially pleased to note that Japan's cooperative relations with the ASEAN countries have made remarkable progress, while these countries continue their development which is drawing world-wide attention.

In these circumstances, it is a matter to be congratulated that relations between Japan and Indonesia, since the latter's independence, have been making steady progress as between indispensable cooperative partners.

We are going to visit tomorrow the ancient city of Jogjakarta, close to Your Excellency's birthplace. The Jogjakarta area is the place where different cultures thrived since olden days. By this visit, I would like to deepen my understanding of your country's historic culture. I also am eagerly looking forward to a close look at massive Candi Borobudur, which I once was able to glimpse from the plane. I hope that my current visit to Indonesia will serve to further enhancing exchanges

GM:8024-⁵

between our two countries and that our friendly ties will continue to develop as an important basis for the peace and prosperity of Asia.

May I now propose a toast to the health of His Excellency the President and Madame Soeharto, and to the progress of Indonesia and the happiness of the people of the Republic.

(3)